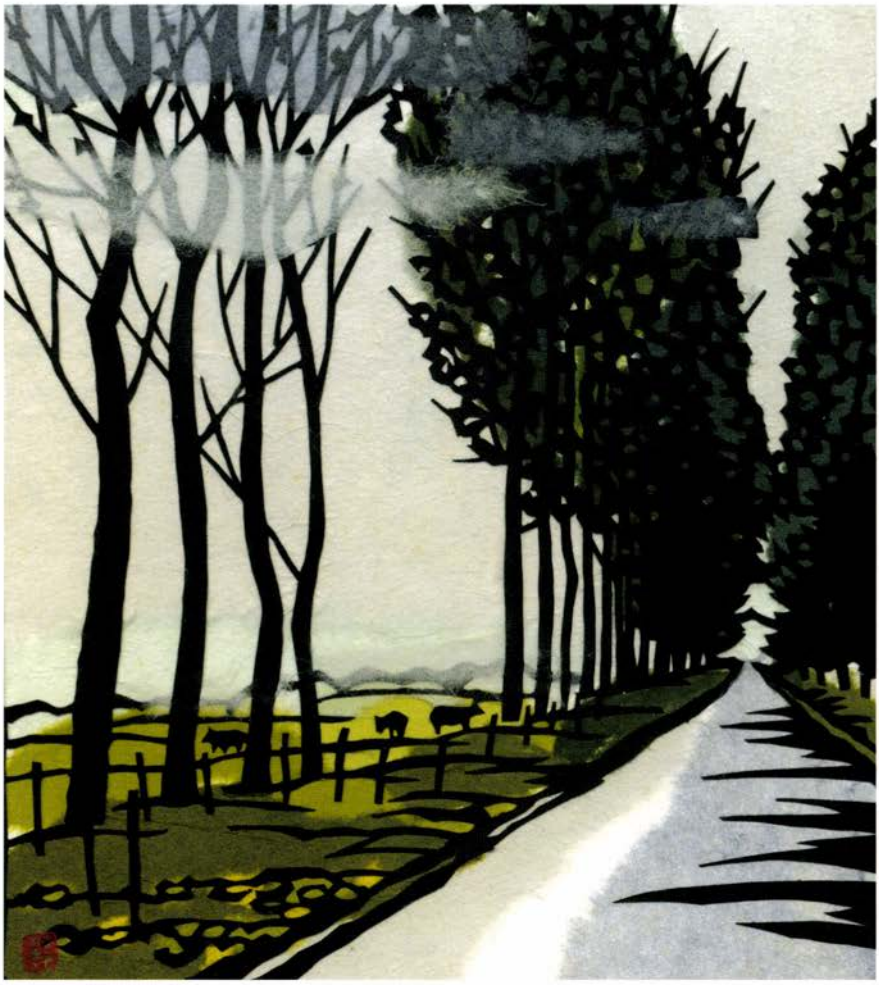
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十四年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇二一号



日川協加盟

No. 1021

六月号

第十八回　川柳塔まつり

とき　十月八日（月・祝）

ところ　ホテル・アウィーナ大阪

◎詳細は四月号表紙裏をご覧下さい。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。5月号巻末の綴じ込み**暑中見舞広告原稿台紙**に原稿を貼付（又は記入）してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個　人　一口　二、〇〇〇円

★団　体

①1/3頁　六〇〇〇円　③2/3頁　一二〇〇〇円

②1/2頁　九〇〇〇円　④一頁　一八〇〇〇円

▼原稿締切　七月二十日

川柳塔社

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022　大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

一通の手紙

小島蘭幸

私は川柳塔創刊号から誌友になりました。近作柳樽への投句は川柳塔第2号の昭和40年11月からです。選者は西尾栞・松江梅里先生でした。出句数は10句で、入選は1句から巻頭でも5句～8句という厳選でした。

高校三年生の時で本名の和幸で投句していました。川柳塔同人になったのは、昭和42年、十九歳でした。「蘭幸を二十歳までに川柳塔の同人にしたいんや」という私の川柳の師・山内静水の熱い思いからでした。川柳塔同人になるにあたって私は

一、何があっても川柳は止めない
一、川柳塔社同人として川柳を全うする

という二つの目標を掲げたのでした。

川柳塔同人になってからの私は、月末に届く川柳塔が待ち遠しくて待ち遠しくて、仕方なかったのを覚えています。

川柳塔が届く日には、職場の昼の休憩時間にわざわざ自宅に帰って、一番に自分の句、二番に秀句鑑賞、三番に好きな作家の作品を一気に読みました。職場から帰ると、一頁からあとがきまで一言一句じっくりと読んだものです。正に至福の刻でした。

そんな私でしたが、昭和48年の3月号から6月号まで投句を休んだ事があります。二十五歳の時でした。川柳塔の選者は、中島生々庵主幹から替わったばかりの栞先生でした。4月号からは若本多久志先生に替わるのですが…。

栞先生からお手紙を頂いたのは投句を休んで三ヶ月が経った時でした。そこには切々と川柳塔への投句を勧める暖かい言葉がありました。そして最後に「儂の選では駄目なんか…」とあったのです。これには泣かされました。

川柳塔への投句を復活した私は、多久志選で巻頭、そしてずうっと後ではありますが、栞選でも巻頭を飾る事が出来たのです。栞選で巻頭を頂いた時、ああこれでやっとあの時のご恩が返せたとしみじみと思ったものです。

栞先生からの一通の手紙は、今も私の心の中で息づいているのです。

座右の句

人恋し人煩わし波の音　（栞）

私の句

一つまみの塩と相談しています　坂部紀久子

川柳塔　六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「蒜山高原」

■巻頭言　一通の手紙……小島蘭幸…(1)
そして二十五周年……斉藤劦…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌⑨⓪……木津川計…(47)
自選集……(48)
温故知新……(51)
水煙抄……川上大輪選…(52)
新川柳鑑賞④……麻生路郎…(73)
中島生々庵句抄……(74)
小出智子抄……(75)
誹風柳多留一一篇研究82……(76)
■寄稿　切り取られた「川柳雑誌」昭和十八年八月号……一色哲八…(78)
英語 de Senryu⑥……吉村侑久代…(83)
愛染帖……新家完司選…(84)

そして二十五周年

（川柳塔みちのくへお出でください）

斉藤劦

今から五十年前、昭和37年7月20日、麻生路郎先生は橘高薫風子さんと藤村〆女さんを伴い、長い長い深夜の青森駅ホームに降りられた。工藤甲吉さんは路郎先生から昭和35年秋、「来年になれば日本を見直す意味であっちこっち旅行したい。実現出来たら青森も…」という手紙を貰っていたので、東奥日報社主催の第16回青森県川柳大会へ特別選者としてお出でを願ったのだという。

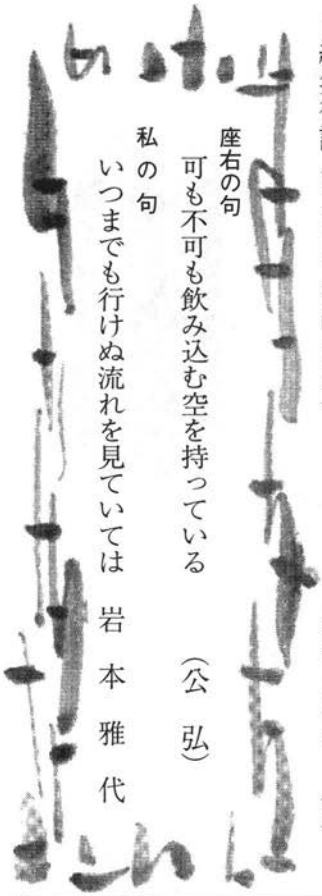
大会は22日に行われ、先生は「川柳一筋に」と題して講演、予定の時間を越えて熱弁をふるわれ、「川柳は人間陶冶の詩である」と語られたという。74歳だった。その時、大阪の路郎先生とみちのくの青森は見えない川柳の糸で結ばれたのだ。

そして大会翌日、路郎先生は薫風子さん、〆女さん、甲吉さんと十和田湖を遊覧、次の句を詠まれた。

十和田湖よみなさけになれ旅人へ

それから25年後の昭和62年9月、第41

檸檬抄「青　い」……福士慕情・池　森子共選…(88)
主幹・理事長の選任について……(91)
一路集「敏　感」……岸本宏章選…(92)
「ハーモニー」……寺川弘一選…(92)
「ひたむき」……森　茜選…(93)
初歩教室「のっそり」……鈴木公弘…(94)
秀句鑑賞┌同人吟……藤井則彦…(96)
　　└水煙抄……吉村久仁雄…(98)
せんりゅう飛行船⑱……新家完司…(99)
『麻生路郎読本』余滴⑨……楽原道夫…(100)
■エッセー　民族の詩(1)……三好専平…(104)
本所深川を歩く(五)……松永浩一…(105)
五月本社句会……(106)
各地柳壇（佳句地十選／矢倉五月）……(110)
六月各地句会案内……(124)
柳界展望……(126)
■編集後記（ひとこと／宮﨑シマ子）……朱夏・まつお…(128)



座右の句

可も不可も飲み込む空を持っている　（公　弘）

私の句

いつまでも行けぬ流れを見ていては　岩本雅代

回東奥日報社主催青森県川柳大会に特別選者として西尾栞先生と特別参加で橘高薫風先生がお出でになった。お二人の先生をお招きしての席上で波多野五楽庵先生は、川柳塔あおもりを結成させたいとお話された。そこで結成の気運が一気に高まり、翌年7月3日創立総会が開かれ、みちのくの弘前に路郎先生を尊敬してやまぬ川柳塔の灯がともされたのである。（のちに川柳塔みちのくと改名）

その時をお祝して、かつて路郎先生と青森にお出でになったことのある薫風先生は、遠い青森で路郎先生に心酔することには誰にもひけをとらぬ甲吉さんと、五楽庵さんが中心となり川柳塔の輪が誕生した。青森と大阪が遠いとは、路郎先生の意識には無かったに違いないのです。私は涙の出るほどの嬉しさで、心からおめでとうを申し上げます。と述べている。

それから川柳塔みちのくは皆様の温かいご指導とご支援をいただきながら創立五周年、十周年、十五周年、二十周年と記念句会を開催してきた。そして二十五周年記念句会を7月1日に開催する。

今から五十年前、路郎先生がお出でになられた青森の地へ、お誘い合わせの上お出でください。川柳塔みちのくの会員一同心から歓迎いたします。

小島蘭幸選

硬い殻破ったやわらかい新芽
今はまだ黙って皿を洗う時
ほほえみか涙か切り札に迷う
いつの間にか正座で読んでいた書物
母も亡く駅舎も新しくなった
一人だけ染めぬ白髪に春日影

橿原市　居谷真理子

うれしい事も想定外でやってくる
遮断機が下りるだあれも居ないけど
わたくしの海でまったりされている
六歳にためされている記憶力
花いちもんめ一年生にある憂い
うしろの正面だあれも居ない背が寒い

寝屋川市　籠島恵子

思い出に寄り添うように花が散る
やぶ椿あなたに勝てるものがない
野の花のように清くは生きられぬ

西宮市　西口いわゑ

菜の花と風のリズムに乗っている
私の今と向き合う花の下
笛吹けどもう届かない距離になり

大阪市　谷口義

松の廊下にあるIC改札機
挨拶も御辞儀も下手になりました
一筋縄を抽き出しに片付ける
妥協したのはわたくしの都合です
新聞を畳んで眼鏡拭いておく
お経より良く効く精神安定剤

出雲市　岸桂子

いつ来ても墓は正座を崩さない
ストレスが溜まると犬と散歩する
カウント九までには立って見せる意地
毒呉れるいい友達が二三人
毎日がコピーのように過ぎてゆく
母さんを越えた人にはまだ逢えぬ

正直に生きるちいさな力瘤
ボクだって地球の仲間 募金箱
弱虫な守護霊さまでちと困る
日本男児禅も武道も知りません
年金といっしょに入る袋小路
生き方は選べるけれど死に方は

弘前市 高瀬霜石

握る手を離せば私消えていく
大ジョッキほどの相談なら乗ろう
愛と憎溶かして川は蛇行する
似たような過去で徳利が交叉する
内緒ごと聞くため猫も来て座る
盃の月も飲ませている屋台

枚方市 伊達郁夫

エピローグだろうか風があたたかい
少年のケアレスミスを許す空
悲しみは語らず 欠けた桜貝
震災を超えて寄り添うのは心
柵で桜吹雪を行くふたり
生も死も神に委ねる選択肢

和歌山市 牛尾緑良

上の句と下の句が舞う春の空
教室の窓から紐を垂らしてる
友だちは一人でいいサうまい棒

堺市 桒原道夫

次の世もつづく逆上がりの稽古
鉄柵に顎をのせてるなつかしさ
さくらさくらなかににやりとするさくら

堺市 柿花和夫

婚活の息子に仕込む煮転がし
聞かぬ約束言わぬ約束更衣室
楽しみを遺したままで逝った父
望遠鏡を故郷へ向ける天守閣
味音痴歌も音痴で理想家で
正論に待ったを掛けた咳ひとつ

松山市 髙橋宏臣

愛嬌で買う大根の売れ残り
雲に乗る戦い終えた破れ傘
少年佇てりブランコのない遊園地
どうらんの顔で明日を生きる人
疲れたと言わぬ歪な走り方
漂泊の日もある中に玉座あり

豊中市 江見見清

頑張れと別の私のちさい声
今だって旨い学食の素うどん
昨晩のカラオケ口に出た車内
加と乗にだんだん縁が遠くなり
行く日日を惜しみながらもする昼寝
膝よりもおでこが先に歩いてる

竹原市　岩本笑子

一生懸命咲いて見事な散り際
キンカンを煮てます母の背中です
辛抱を諭す山茶花はらりはらり
遅くなりましたと桜　菜の花　桃の花
先生がにっこり安心して帰る
竹の子を御裾分けして春になる

松山市　宮尾みのり

もやもやの中で迷子になる未熟
桃さくらつつじと溶けていくこころ
おだやかな顔感性はもう言わぬ
楚々とした美人の裏が読み切れぬ
元気だった頃は昭和も走ってた
これからは後期高齢ひとくくり

大阪市　升成好

春の土手ファイトの声に追い越され
土つきの大根を買う朝を買う
母の愛詰めた箱には底がない
こつこつと正攻法で悔いがない
枠外があって人生多色刷り
物臭が考えついたワンタッチ

奈良市　米田恭昌

たやすくはもう跳び越せぬ水溜り
ひとに厳しく砂糖まぶした自己評価
音楽はいつも5だった落ちこぼれ
人生ゲーム勝ち組みだけのクラス会
医者通いたまりたまった本読破
たかが二階エレベーターに乗る不甲斐なさ

尼崎市　山田耕治

ホームラン打ったとどろんこで帰る
五匹産んで満足そうな犬の顔
おはように明るいこだま跳ね返る
あきらめなさい点滴受けている時間
信号機手押し車を取り残す
選抜の優勝戦を聴く花見

堺市　志田千代

親だもの面倒かけていいじゃない
悪態をつく老親の介護する
見かねては妻のメガネを拭いてやる
甘え方知らないままの拾い猫
持ち回りの自治会長は米寿です
マニュアルを守り通したのが悲劇

香芝市　大内朝子

復興元年希望と勇気湧く桜
身の丈に合うた暮しがよく笑う
大好きなひとが隣に居ない春
すっぴんの心で笑い合う仲間
人の身にすぐになっては貰い泣き
思い出をいっぱい抱いている豊か

免疫が出来て無礼も気にならぬ
千鳥足黙って歩くはずが無い
不調法ですがと隙を見せて来ぬ
傍道のどれも古里らしい貌
内臓が内部告発したようだ
教訓と気付かずチャンス捨てて来た

鳥取市　森山盛桜

泥臭く過ごして賞も罰もない
濁り酒自問自答を繰り返す
春の陽は心臓にしてしまう
煩悩を捨てたら灰になる私
アナログに戻ると人はよみがえる
学習をしたのか猫が寄り付かぬ

松江市　三島淞丘

度忘れもいよいよ後期高齢者
あっという間に人間は星になる
真っ直ぐな道をぐにゃぐにゃして歩く
老妻をアップで撮って叱られる
一年をこの日のための祭りバカ
上流の雨を下流は断われぬ

愛知県　早川遡行

刑務所も外観だけはハイツ並み
年寄りの身に堪えます遅い春
アルバムに今はもう亡き人が増え
人が人裁く苦脳の裁判員
オレオレとホントに風邪の子が電話
損をした話しかせぬ株のこと

堺市　村上玄也

世の末の検察裁く最高検
断捨離の出来ぬ卒寿にある迷い
出口マーク地震思えというように
チャンネルの何処も笑える年となり
隣席は愛煙家だな臭いなあ
少子化へ生めよと言わず居る不思議

泉佐野市　山本蛙城

船上山の庭石父の声がする
春嵐止んで夫婦の絵にもどる
水やりに花がきき耳たてている
仏様抱いて一期一会の旅に出る
元気なうちに金は惜しまず使っとく
日々写経文字が仏に見えてくる

鳥取県　佐伯やえ

底の浅い袋ばかりを持っている
満月の下で吠えてるのは僕だ
怪我しないとこで遠吠えしています
知らん振りしている人で温かい
コップの中でカエルが喧嘩しているよ
平凡に生きて静かなお葬式

大洲市　中居善信

喜んでくれる人あり桜咲く
会心の作です僕の娘たち
あの頃のポーズは無理な二重あご
やると言えばやりますちょいと飲んでから
投げキッス深い意味などありません
怒鳴り合いしてから好きになった奴

四條畷市　吉岡　修

手を包むように釣り銭渡される
表情筋鍛えて作り笑いする
昼間から飲んでいいよと言う桜
まあ一杯桜が酌ぎにやって来る
勧誘の電話に暫し暇つぶし
宿敵が弱いと面白くない野球

米子市　竹村紀の治

朝の経遺影にっこりしてくれる
ありがとう生きてただけで満点だ
エンディングノートに書いてまだ死ねぬ
ありあまる時間の中で夢を見る
デイケアに夫見送り大掃除
孫のことばかりを書いてくる手紙

大阪市　山本加お里

新型の車両レトロで客笑顔
妹の形見のペンで手紙書く
穏やかな顔した夫の癌転移

三田市　石原歳子

亡き夫が渡してくれた虹の橋
夫の遺影と話してから床に就く
想い出と廃線歩く春うらら

和歌山市　坂部紀久子

亡夫と見た桜今年も満開に
白衣十人廊下歩けば物物しい
信号が赤のまんまで故障する
税金は納め取られるものでない
後悔がもう始まっている財布
郵便受けＳＯＳを知らせてる

西宮市　山本義子

毛糸編み輪と輪重ねて愛になる
八十路来て輪番の役解けました
朝ドラに卓袱台のあるなつかしさ
輪唱に調子はずれが楽しそう
年金の輪にまったりと沈みおり
輪になるといたずら話弾みます

大阪市　津村志華子

雑念を無にしてくれる花の下
はつらつと生きて齢など気にしない
ファスナーもわたしも鈍くなりました
快復の夢見たままの千羽鶴
弟よ思い出たんと有難う（弟逝く）
蟹ざんまいあれが君との終の旅

朽ちた倒木虫たちのレストラン
カメ虫よたよたお前も後期高齢者
筋肉隆々この頃の新生児
わたしの誕生日銀行忘れない
頭がパンクせぬようすぐに忘れます

西予市　黒田茂代

その顔のどこにあるのかお人好し
万歩計さびついたまま永遠の夢
祈り終え生きるリズムを取り戻す
妻別居娘家出の重い肩
鍵穴の向うに父が生きている

高知市　小澤幸泉

自然いっぱい芽吹いた春を摘んでくる
春ですね踵の荒れも気にならぬ
花柄でおしゃれ心を軽くする
年年歳歳母と見上げて来た桜
これからの話桜をめでながら

高知市　小川てるみ

適役の妻町内の顔になる
あーあーと人に知られぬ欠伸する
存分に生きたと思う勝手口
ふがいない夫を責める目が迫り
酔った父関白気分持ち帰る

福岡県　林さだき

百万遍仏の慈悲をもらう数珠
民は飢え糖尿病の独裁者
一票の行使を民は待ち侘びる
断罪の斧を維新に賭けますか
靴はいて待てども妻はまだ二階

唐津市　山口高明

縄のれん世界を狭く飲んでいる
父を知り父の背を越す齢になり
若い人に妥協してます老いてます
風と遊ぶ子がいませんネ塾通い
裏のない明るい声だアリガトウ

唐津市　井上勝視

あやまちを正せば影が薄くなる
合わせてるのに釣り合っていると妻
怖い顔出来ないパパの骨がない
若者の背中どんどん遠ざかる
良いことはみなラッキーと手を合わせ

唐津市　坂本蜂朗

ロスタイム勝利間際に五輪逃げ
義理チョコか本命なのか妻に訊く
井戸端に噂の種が芽吹いてる
婚活の新芽あえなく枯れました
伝えたい事がいっぱいある背中

唐津市　樋口輝夫

旅帰り外食よりも弁当と
20ヶのおにぎり掌火傷した
今日予定無いと血圧上らない
新車が花束抱いて帰宅する
桜満開胸ふくらんで空になる

熊本県　岩切康子

晩春の夕陽を惜しむ余生の身
腹立ちを流す座禅の目を閉じる
反省の現場に阿呆な僕が居た
酒の味日頃の無口埋め戻す
老いの手で優しく行こう老朽車

熊本県　髙野宵草

予定ない一日読書して昼寝
検査値もまあまあという旨い酒
死んでから捨てよと断捨離をさせず
浪速座のとざいとーざい維新劇
定年のない陛下さまお気の毒

札幌市　三浦強一

金平糖噛んで砕いてみたくなる
春一番昔の傷をそっと見る
出直しの効かぬ旅路に少し悔い
延命拒否この文章に倣いたい
花は光人は温さに向きたがる

札幌市　小沢淳

トランプの占い吉と出てくれぬ
現住所豊かな土と水がある
かきむしるように毒舌効いてくる
宿題を投げつけられて深い皺
呼んでいるやまびこだった恋だった

砂川市　大橋政良

ジャンケンポングーで勝っても気は晴れぬ
近道が嫌いになった万歩計
いつまでも軍手が白く笑う種
消しゴムの後に残った高望み
口喧嘩繰り返してる酒の友

平川市　小寺花峯

豪雪に耐えた裸木が目を覚ます
春や春　軒の氷柱は痩せ細る
雪解けて剥き出しになる罪の色
待ち侘びた春が足踏みばかりする
啓蟄や虫も動けぬ雪二尺

弘前市　福士慕情

社の黒字守るパートにアルバイト
掃除機が心のゴミも吸ってくれ
スカイツリー見てから行こう極楽へ
手作りは楽し世界にひとつだけ
表札は用心棒に下げておく

弘前市　須郷井蛙

弘前市　稲見則彦

大空が自由な鯉にある迷い
大嫌い猛暑　豪雪予報官
及ばぬが子らには母の味である
減らず口叩くが友は友のまま
この轍わだかまりなのかも知れぬ

弘前市　岡本花匠

せめぎ合い苦笑に終る人と雪
平穏に生かされいきてダイヤ婚
糟糠の妻と鍬打つ六十路畑
恵方へと願うふたりの八十路旅
颯爽とカラオケ歌う万歩計

弘前市　髙橋洋子

方言の自販機駅でお出迎え
助け乞う積りはないがついぼやく
劣化する輪ゴムに老いを重ねみる
半額で買ったペットに癒される
時々は夫の毒舌聞いてやる

弘前市　今愁女

上野満開　陸奥は四月に雪が降り
雪の上燃え滾る色落椿
ぜいたくに慣れて断捨離くり返す
断捨離は不要質素な暮らし向き
復興はよそに各党すぐ割れる

青森県　松山芳生

見送って駅のホームの戻り寒
線光花火ポトンと落ちて子が帰る
オッパイがたれるニュートンの法則
ポケットの中で消してる春の音
北の男が雪解けを待つ力瘤

さいたま市　星野育子

誕生日過ぎた日数え残数え
税を上げ道もダムもと言う総理
桜散る犬の介護に明け暮れる
一日中電子マネーで事足りる
割り算をしない日続き独り住む

東京都　岸野あやめ

誕生日心に触れるバラの束
アイドルともてはやされてもう消えた
恐いもの地震竜巻崖津波
妻の愚痴聞き流してて怒られる
忘れたいことがわたしを離さない

横浜市　小野句多留

ひょんな事一対一のいい日和
まだ八十路気持充分わかります
自分にも落度気付いて黙りこむ
優勝の横綱ニュース小さくのり
水温む眉しかめ出す雪だるま

横浜市　菊地政勝

うかつにも迷宮入りのもの忘れ
補聴器も拾ってくれぬ流行語
一病を連れた老後は当り前
謎解きが終ることない原発禍
冥途への切符は忘れた事にする

川崎市　三浦きぬ

お金には無縁の職を務め終え
一人居は自問自答のくり返し
カサブランカやっぱり美女ねバーグマン
放射能お前の罪か漏れたのは
私にも若い頃あったと眼尻あげ

富山市　島ひかる

春うらら一期一会の花衣
哀楽も川の流れに逆らわず
掛け違うボタンに歳を見てしまい
葬式も結婚式も春の午後
歳時記の奥から祖母の声を聴く

静岡県　薗田獏沓

ほらそこに風が忘れて行った春
ほろ苦し土の味なり蕗の薹
着膨れて老女が守る煙草店
土匂うほどのお湿り春立てり
原発はやはり紙風船だった

可児市　板山まみ子

他人様は老人と言う七十二
よく食べてよく寝てたまに美酒少し
幅広の足にオシャレな靴がない
普段着と余所行きがあるスニーカー
救急車どうか隣でないように

犬山市　関本かつ子

明日会える人なのに夢に出る
ジューサーをかけてうっぷん思い知り
渋滞の京都花見に汗をかき
譲られる席に抵抗なく座る
長生きの相で薬袋二つ三つ

犬山市　金子美千代

周平の下町辿る歩き旅
三日間歩き通した江戸の旅
ケータイが旅先までも追ってくる
よく当たる予報スリルが減ってくる
残り時間楽しい事は前倒し

犬山市　吉田幸子

父さんの心のひだを見るベッド
五年満期いえ一年と念を押す
役が付き若返ったとひやかされ
おだやかな日だおだやかに子と遊ぶ
うぐいすの声に鍬持つ手も軽い

倦怠期清純だったあれは夢
姑の部屋子供の部屋になる予定
栄養をやり過ぎ咲かぬ子も花も
邪魔されずアランドロンとふたりの夜
常識を難かしく言う哲学者

京都市　桝本宏子

境目はほころび易くできている
両面テープ脇の甘さを止めておく
福引きをするさびれた商店街
叩き台にはよく捏ねてからのせる
なにごともない顔をする蟻の列

京都市　高島啓子

タッチだけで遊んでくれるスマートフォン
友の助言背中で受ける石頭
中身より包み開きにはしゃぐ妻
満腹で作った料理妙な味
親密度後部座席か助手席か

京都市　藤井文代

日によって変る私の幸福度
ウエットな日がありがたい花粉症
桜なら越境しても怒らない
若夫婦家計割勘して平和
物忘れ記憶の箱が漏れている

京都市　三宅満子

ありがとう今朝も味噌汁あたたかい
握手するその目の奥に殺気見た
青春譜めくると軍歌馳けてくる
美しい嘘ならどうぞ聞きまする
用もなく靴磨いてる定年後

京都市　坪井孝一

大声を発してやる気を駆り立てる
安全に転んで起きる技を練る
自分から褒めて元気になる仕掛け
維新流知事と市長の新鮮味
お花見とスカイツリーがよく似合う

亀岡市　井上森生

コンサートの余韻を包むハーブティー
スパゲティいつもお箸で食べている
痴呆出ても敬語正しく使ってる
真心を過剰包装してしまう
歳なんて飛びこえてゆくファッション

長岡京市　山田葉子

愚痴入れた箱には鍵をかけている
爪先にセンサー欲しいころび癖
振りまいた愛の回収始めてる
星空に国境はない旗もない
聞こえぬ振り出来る齢ですウフフフフ

大阪市　古今堂蕉子

大阪市　神夏磯　典子

六月の樹々も私も燃え出した
あせったら耳が大きくなってくる
誕生日まだときめきが残ってた
雑草の根っこしたたかでしたたかで
奥の手を出して歪みをくい止める

大阪市　川端一歩

大空のこころを読んで薫風忌
友の文抱いて楽しい旅終える
エンピツの文化一生の友だち
脇道の花がウインクしてくれる
気くばりの飴の一つが嬉しくて

大阪市　吉村一風

越えた山一杯のむとついしゃべる
赤ちゃんが笑うと負けんよう笑う
だまし易いだから騙さぬ妻だから
子の世話にならない口はなんとでも
隙だらけそれでビールも旨いんだ

大阪市　板東倫子

情のある話に涙もろくなる
豆御飯美味い花便り聞きながら
神仏に無理な願いは遠慮する
少しでも美味しいものは皆食べる
金ピカの仏壇子孫が持て余す

大阪市　大川桃花

ずたずたにしたこともあるラブレター
身を切らぬ政府説得力がない
妹が居なきゃ泣いてたかも知れぬ
遺された妻はつらつと光り出す
緩和病棟静かな時間ながれてる

大阪市　小谷集一

失敗を腐葉土にして生き残る
輝いた昔を誰も信じない
労わりが反骨心に突き刺さる
正常の範囲の異常です加齢
身の丈に合った歩幅は崩さない

大阪市　井丸昌紀

誰にでも微笑む人の腹の底
腹一杯戦意はすでに失せている
気が付けば一番後ろ走ってた
カラスさえ鳴かなくなった街に住み
まだひとり拾ってくれる人がいた

大阪市　近藤正

消費増税すれば日本が破綻する
祝砲の出足挫けた三代目
瑞穂の国水の脅威にひざまずく
原発事故鳥や猿には報せたか
彬忌が世間の話題になりはじめ

大阪市　原田すみ子

脇役が支えてくれてエンディング
ヒートテック脱いでわたしの春となる
やさしさに結局勝てぬ力ずく
アルバムで暫し昭和へ逆戻り
売り言葉乗ってこぬのが気にかかる

大阪市　江島谷勝弘

テレビ消し静寂を楽しんでいる
頃合を計っています総選挙
何処でもすぐに食み出す私です
五十万当たったけれど黙ってる
終息を宣言したが洩れている

大阪市　津守なぎさ

買物のすすめ上手なターミナル
吊り橋もトンネルもある旅プラン
ビリケンさんさする目的あるパワー
ポシェットに替えルンルンのずだ袋
生きている証誤解も腹立ちも

大阪市　奥村五月

居辛いのか諭吉はすぐに旅にでる
中も見ぬ福袋ならすぐ売れる
宝くじ次は僕だと思い買う
集団で助け合ってる雑魚の群れ
癒されて灰汁を流した露天風呂

大阪市　中村叡子

お祖父さん合格ですと仏壇に
夢に来る亡夫の声が聞こえない
原発も怖いが自然なお不気味
腰と膝湿布貼りおえさあねます
パッと散るそれが見事な人間も

大阪市　寺井弘子

すんなりと渾名呼び合うクラス会
土いじり真黒になる温かさ
春の使者バラの匂いのレター来る
苦手とは口先だけのマイク好き
凍結の愛をとかした春の水

大阪市　坂　裕之

賛成に回っただけで他意はない
それぞれの歴史認めてから平和
この次は背伸びしてでも勝ってやる
夢の中父と元気に野を駆ける
道草を楽しむ春はれんげ草

大阪市　伏見雅明

ネット売り始めた老舗三代目
地下資源なくて技術の輸出国
家事担当の役員もいる町工場
デパ地下のタイムサービスはしごする
助手席で妻ブレーキを踏み続け

青テントから阪神戦が聞こえてる
ミニスカート正座も似合う若さかな
琵琶湖の浄化雪も一役買っている
仏壇開け愚痴もこぼせる仏さま
埋蔵金出てきた例ありません

大阪市　田浦　實

日の丸をしっかり畳み出てこない
父さんのピンチは誰も知らん顔
ひとりでも毎日出掛け喋ってる
平和とは心静かにしてくれる
冷蔵庫で勿体無いが腐ってた

大阪市　榎本　日の出

悪気なさそうなひとこと身に応え
安全神話原発事故で崩れ去り
ボランティア瓦礫に挑む子等がいる
隣の子悪餓鬼だけど憎めない
狼狽えて事の善悪見失ない

大阪市　池上　清治

瓦礫後花も咲きます春が来る
病院の坂人も草木も春が来た
ピンク色一直線に車窓から
春色の服を選んで出かけてる
会いたくて偲んでいます花の下

大阪市　榎本　舞夢

一喝を頂き気持ち表向く
気が折れた時は両手で空つかむ
大嵐雲間に迷う昼の月
原発禍帰れぬ人を待つ草木
流れ雲よ被災地の花見ておくれ

大阪市　平嶋　美智子

テレビから一喜一憂今日の糧
無掲載友の安否が気にかかる
辞書引ける作句楽しや古稀の坂
午後八時安否きづかう子の電話
安穏の日々に感謝の日の出見る

大阪市　松尾　柳右子

手にうけて私の寿命あげるから
いかなご煮味がちがって配れない
全身の毒素が抜けた露天風呂
奉納の師の書に出合う厳島
満点の一泊二日灰汁抜ける

大阪市　笠嶋　恵美

咲き誇るピンク椿に縁担ぐ
北朝鮮平和の味を満たしたい
おばあちゃん元気でいてと寮帰る
初入社大学入学嬉しい悲鳴
余生こそ笑顔を残す置きみやげ

大阪市　吉内　タカ子

歳なんか忘れ翔んでる八十の春
快方の眼に草花が咲きはじめ
風船の行方ふわふわ春の旅
年金に感謝三度は食べられる
夕食後ぼやっとしている独りぼち

大阪市　小泉ひさ乃

エンピツを削って今日も気合いかけ
心根の良い子に育ち孫自慢
過ぎし日の思い出話日向ぼこ
まだ欲が右往左往の八十路坂
あと少し女してます残り福

大阪市　熊代菜月

胡蝶蘭早や温室を出る支度
いつまでも美しピンク桃の花
近頃は文明の器具多すぎて
国会に笑顔が見える世も変わる
田舎道昔なつかしふきのとう

大阪市　山崎君子

下調べ過ぎて名所も鮮度落ち
無理を引き受けたらチャンスついて来た
健忘もよろし心を軽くする
朝寝坊誰も知らないのも淋し
ちゃん付けで呼び合う友は貴重品

堺市　矢倉五月

さまざまなドラマ集中治療室
会計は専務が握る自営業
切腹の作法仕込まれ秘書になる
友だちの輪を狭くする酒の癖
惚れましたマリオネットになりましょう

堺市　加島由一

夜更かしはいかんついついいやしんぼ
仰山な音で機械が皿洗う
タカイタカイ後の腰痛淋しいよ
八十歳寺の外にも行く処
闘いに倦んで花影蝶が舞う

堺市　山本半銭

荒れた手も握手をすればやさしい手
さあ飲むぞ花を味方に缶ビール
夢不安スーツに包み入社式
リズムよく妻にやられた海老で鯛
よく忘れメモが並んでいる日記

堺市　西村りつえ

ばあちゃんは元気だ口がよく動く
包み込んだ欲のかけらがとび出した
玄関の前で野良猫日なたぼこ
おいしい空気吸うてストレス吐き出した
怒鳴りたい気持おさえている疲れ

堺市　宮本かりん

堺市　大久保　のん子

オアシスは森林浴の深呼吸
気のおけぬ友へ紅茶のいい香り
大切なルーペなくして暮らせない
許されて許して温い風の道
ふりむけば他人の恩がよく光る

堺市　大隅　克博

介護士の優しさ偶に真似てみる
ゆっくりと言えばゆっくり頷いた
拒否権を持っているのは妻一人
営業の作り笑いに嘔吐がでる
深追いをしたら出口を見失う

堺市　遠山　唯教

転ぶたび世渡りうまくなっている
巣立つ子を春一番がそっと押す
長幼の序を説く力まだ残る
一票の格差是正に鈴がない
残照に胸の時間は止めている

堺市　源田　八千代

ビューティフルサンデー満開の桜
富士山も噴火誘われそうな揺れ
再稼動に不安拭いきれないまま
卯の花見たさにチンチン電車乗る
回覧板濡れないように気を使う

堺市　奥　時雄

コピーから始めた国に出し抜かれ
着ないまま元に納める衣装箱
今年こそゴーヤ植えようかと思う
付加価値を見た目でつける京料理
器には収まり切らぬ市長さん

堺市　荻野　像山

新聞の日付頼りに予定表
カレンダー頼りに夫婦医者がよい
紙おむつしっかり締めて万歩計
足腰が頼りない分口達者
農薬が頼りの野菜市が立ち

堺市　澤井　敏治

背が縮むほんとなんです三センチ
転がった小銭の音にけつまずく
断捨離が出来ずにごみと暮す老い
余生だと言いつ未だに走ってる
多数派に沈み個性を見失う

堺市　内藤　憲彦

お膝つき見舞をされた両陛下
脳ミソにブレーキかけるカタカナ語
自分史に妻の苦労をちょっと入れ
目にうれし口もうれしい旬イチゴ
合コンに金の草鞋を履いて行け

堺市　齋藤さくら

春風に寒い懐覗かれる
気張るより子供を立てておくことに
聞かないでよかったなあと一人ごと
コンビニのお世話になった妻が留守
また来てと孫の笑顔に元気出る

池田市　栗田久子

こともなく時が流れた日の夕餉
操れば人形でさえ意志を出す
バージンロード父の腕から彼の手へ
今という今をわたしは逃がさない
早掘りの筍茹でてから勝負

和泉市　横山捷也

カタログの通り蒔いても芽が出ない
大騒ぎしてもがっちり貯めてはる
地を揺する神様地下に住んでいる
死の影に怯え白衣と手を繋ぐ
よくしゃべる女だ真赤な唇だ

茨木市　島田誠一

安全神話パンドラの箱こじあける
日本語の乱れを今日も撒くテレビ
駅弁にロマンスシート旅弾む
町工場油まみれの手は寡黙
また増えた維新の衣着たコピー

茨木市　藤井正雄

振返る未練を叱る影法師
側にいて大きな愛に気付かない
傍へきた運があかんべして帰る
王様の側近みんなイエスマン
風に色つけた牡丹の寺参り

大阪狭山市　矢野梓

いかなごが一緒に春をつれて来る
お花見に今年はいない友ふたり
今年またお花見出来てありがとう
年金の枠を食み出す新年度
喜寿過ぎて日進月歩加速する

交野市　森本弘風

俺と妻錆付いたまま歳をとる
ご都合で勝手に耳を留守にする
譲られてお尻むずむず俺も歳
ケイタイは持たぬが不自由しない僕
職退いて妻のペットになり下がり

河内長野市　山岡冨美子

宙を舞うびっくり箱もセシウムも
迷宮入りの恋が段ボールの奥に
化粧箱に婚活中と書いてある
疑問符が溜まる年金のそれから
ふかふかの布団にしあわせの匂い

河内長野市　黒岩靖博

レシピなく受け継いできた母の味
生玉子うまいはずだよ放し飼い
お遍路を歩いて回り得る功徳
マニフェスト煙と化して消費税
言葉じり捕えて絡む酔っぱらい

河内長野市　村上直樹

閉塞感根雪のままの瓦礫処理
人も世も斬っては徳利また追加
もと上司でも割り勘の囲む会
海鼠腸を試し食いした肝っ玉
失せかけた脳細胞へ辞書のムチ

河内長野市　山室光弘

開花せぬ大器晩成丸い背な
聞き上手世間を渡る隠し技
夫婦愛確かめ合ったガン告知
純愛を裂かれて見合した主人
別腹がいくつも有ってふくよかに

河内長野市　坂上淳司

梅の香と初音拾いに里山へ
コツコツと話を拾う地獄耳
アルミ貨を昭和一桁なら拾う
何故かしら拾う手袋みな片手
拾っては駄目なのか知ら粗大ゴミ

河内長野市　植村喜代

誰も見ない庭にひっそり福寿草
娘二人交代の墓参り
道がよくなれば車が増えた
もう地震大丈夫だといつ聞ける
チャイムだよ足腰ちょつと返事せず

河内長野市　水谷正子

クラス会愉快な風に包まれる
退院は桜満開深呼吸
お向いの猫よ私を忘れたか
入院で友達の味身に沁みる
救う神それは貴方の胸の中

岸和田市　岩佐ダン吉

打たれても響かぬ頭のせている
介護する身でよかったか空仰ぐ
真っすぐに歩いていたと思ってた
我慢重ね腑抜けのようになっている
負け戦それでも僕は言うている

岸和田市　雪本珠子

脳さびてボキャブラリーが出てこない
それなりに楽しんでます一人旅
先生も教える中で教えられ
足並が乱れて来てもマイペース
初夏の風心のドアー開けに来る

年重ね秘めた心を眉に引く
逆切れの婆ばも偶に良い薬
独り居で落込んでいる春嵐
我儘な亭主だったが今愛し
良いお顔苦労重ねて今日があり

岸和田市　森元ふみよ

満開の桜トンネル姫気分
お笑いは脳活性化のおくすりだ
エヤコンもしばらくお休み御苦労さん
美味しいな桜の下のバーベキュー
春陽ざしほほえんでいるチューリップ

岸和田市　堤楢代

若い若いと春風におだてられ
春風を入れるポケット　バッグにも
老斑がふえたもの忘れはすすむ
宿題を抱えて雲の晴れ間待つ
机の上に広げたままの昨日

吹田市　山本希久子

断捨離に祖母の未練が邪魔をする
包囲網のなかで言い訳考える
赤い靴履いてピンチを切り抜ける
意地っ張りの涙が今日も止まらない
寡黙だが活断層を抱いている

吹田市　太田昭

静と動　動が苦手になりました
母の愚痴反面教師にしています
地下街の店無くなればトンネルだ
切り株の年輪で知る樹の偉大
筍と蕗炊きましたやっと春

吹田市　瀬戸まさよ

衛星がどうして海に飛び込むの
ロボットを動かしている陰の声
復興の元気を貰う甲子園
ベランダで桜をほめる孫の声
オウムから声かけられる上天気

吹田市　野下之男

早春の香り集めた貯金箱
老いの殻ぬぎ捨て春に飛ぶ
ぶらぶらとデパ地下めぐり旬探し
割り勘の男の酒はよく喋る
向き合った体重計にほめられる

吹田市　大谷篤子

荒波に揉まれ人間脱皮する
友が来て弾む話へ新茶など
話そうかよそうか迷う喉仏
ふる里の海も優しく墓参り
私から時折逃げたくなる私

吹田市　須磨活恵

親として広げていたい傘の骨
足腰が泣いてる花も開くのに
水たまりもう飛べないと膝の声
有り難いこと旬の味噛み締める
春なのに石油スタンドまた消える

吹田市　木下敏子

飼い主に先に逝かれた犬哀れ
味方でも敵でもないな傍観者
暴風雨誰か一緒に居てほしい
パンドラの箱にギリシャの今むかし
どんぐりか背比べする日向ぼこ

高石市　浅野房子

米寿まで坂道けわし一歩ずつ
新聞にただ孤独死と読む辛さ
センバツの明暗二校うるんだ目
改革を願う政治に無理ないか
サクラ咲く見事果した孫門出

高槻市　井上照子

いかなごに歓声あがる瀬戸の海
ロンドンへ日の丸を背にレッツゴー
八十路チャンスに備え充電中
気配りで支え合ってる過疎の村
ガソリンは高値近場で桜愛で

高槻市　峯村勲弘

先頭を切れなくなって角がとれ
ブレーキを上手に踏んで世を渡る
名ばかりの役員椅子が揺れている
妻の留守ゆっくり耳を休ませる
ポケットに溜った野心こぼれそう

高槻市　佐甲昭二

デジタルの狭間で揺れる孤独感
子へ送る荷の隙間にも愛を足す
大粒の涙を落とすチャンス今
つま逝って枕一つになった冬
病むニート他人が言うほど悩み無し

高槻市　富田保子

清貧の座敷でおもう残り道
少子化のうねり老後を冬にする
子の進路貧しい親の欲がでる
落ちぶれた人にも妻の待つ灯り
老いて子に従う父になって逝き

高槻市　富田美義

お留守番用にとカレーできている
的を射たことも言ってる外野席
哀愁が漂う丸くなった背
追伸と余白がものを言う手紙
ゆっくりのリズムが心地よい齢

高槻市　片山かずお

高槻市　指宿千枝子

お隣と話が弾む桜草
ランドセルの名前にルビがつけてある
悪ぶっても淋しがり屋でやさしくて
私を丸ごと洗う洗濯機
命ある限り私は私です

高槻市　初代正彦

熟練の人馬一体法華津さん
試着して値切ってるのはまあ熟女
若人に未来を託し種を蒔く
肩コリもゴルフの時は忘れてる
小鳥より早起きしてる歳になり

高槻市　島田千鶴子

夕暮れて遊び心も連れ帰る
楽しみを覚えた独楽が止まらない
野の花に元気を貰う春の靴
モノクロの画面の中にある昭和
浮き立った心をいかに鎮めよか

高槻市　安田忠子

三月も祈りの月になりました
夕日見て祈りたくなる孤独な日
しんどくても多忙こなして調子良い
ケータイの独り言にも慣れてきた
なばなの里光輝く小宇宙

高槻市　杉本義昭

疑わぬ孫達の目が愛らしい
妥協するたびにわたしが弱くなる
裏方に徹する人にある野望
悪友と言われまだまだ生きて行く
残された碁盤亡くした主を恋う

豊中市　安藤寿美子

ひとり酒涙ふいても月おぼろ
する事が何もないのに生きている
落ち込みへ句友の電話ありがたし
旧友とひょっこり出会う花の雨
雨の午後悲しい事をおもい出し

豊中市　水野黒兎

大河へと君のしずくが基になる
辛酸に耐えて端役のいぶし銀
ほどほどの夢を絵具に春を描く
蒔き時を土の温みに推しはかる
誰も見ぬ日記に見栄を少し足す

豊中市　藤井則彦

みちのくの声に涙がふと零れ
短所より長所を拾う名伯楽
我慢した人ほど他人に強いる癖
平凡な日日を過ごせば飽きも来ぬ
毒舌を買われて乗った選挙カー

豊中市　松尾美智代

空回りしてる私のお節介
取捨選択いつも後悔しています
合わせ鏡心の中は映せない
急に桜満開になり落ち着かぬ
騒ぐより静かに桜見ていたい

豊中市　松村里江

メモの紙さがしひらめきもう忘れ
いい予感ドミノの様に広がって
微力でも尽した自負はもっている
花に倦みみどりの森にいやされる
それからは二人に任せ幕を引く

富田林市　中崎深雪

満開の桜の下はみな笑顔
来年も来れるだろうか桜花
花びらのじゅうたん踏んで弾む朝
今じゃ家訓になってる爺さまの小言
ある日ある一言で恋始まりぬ

富田林市　中井アキ

前向きの仲間に両手預けてる
とりあえず横一列にいる野心
ゆるゆるの脳でクイズをする夫婦
返信に老母の気合が入れてある
いつか切る尻尾に聞かすよいとまけ

富田林市　片岡智恵子

人は旅人羽根を休める家がある
未完で生まれ未完で死んでゆく輪廻
語り継ぐ戦史美化させてはならぬ
飛びたつ日が来るまで祈る千の鶴
音がある心にひびく音がある

寝屋川市　森田麗

母元気印のくぎ煮届く春
新人の初仕事なる花見席
その昔駄菓子屋でルール学んだ子
意識して傾いている胡蝶蘭
温度差が微妙な絆保ってる

寝屋川市　山本三郎

どんな顔して良いのやら娘は嫁ぐ
追及に秘書が秘書がと深い霧
お祖母さん洗濯板は手放さぬ
自分史の余白を少し残しとく
渦を巻き無口になってゆく心

寝屋川市　森茜

旅立ちの朝ジーンズに文庫本
シュークリーム少女の頬っぺふくらんだ
理不尽を睨む少年石となる
点　点　点言わずもがなは伏せておく
コリント人の手紙へ帰りたいこころ

寝屋川市　平松　かすみ

想定がだんだん高くなる津波
日本が無くなりそうな想定表
血管もこんなヘドロか下水管
私の特技野菜の使い切り
じいちゃんのティッシュばかりのゴミ袋

寝屋川市　冨山　ルイ子

一病また増え頑張って生きねば
家族皆一病持っていて優し
外出に二の足を踏むようになる
咲きほこる桜しっかり撮っておく
桜曇り一人静かに賞でている

羽曳野市　徳山　みつこ

マスクして春を探しにスニーカー
せせらぎがギャロップ春の音たてて
万物の芽吹き少年にもニキビ
花筏と蝶々五線紙に遊ぶ
弁護士と相談中の雲隠れ

羽曳野市　三好　専平

空気まで読むひまのない泥鰌
生ゴミを見逃すはずもないカラス
つきつめて言えば政治がなってない
四の五のと言わせぬ監視牙をとぎ
ショベルカー動かぬ浜に散るさくら

羽曳野市　安芸田　泰子

涙ぽろり女にずるい知恵がある
噂には負けぬ女のサングラス
無洗米が好きな女の赤い爪
女系家族へ初孫誇る鯉のぼり
通り過ぎる足音ばかり夜の冷え

羽曳野市　吉村　久仁雄

老いて盛ん試行錯誤が面白い
自分史に花一本を隠し入れ
デパ地下の試食に旬を教えられ
毎日が命拾いの地震国
竜宮を旅してきたと父の髭

羽曳野市　福田　悦子

棚一つ吊れぬ男の不器用さ
大丈夫母の呪い信じよう
一人旅宿の女将の温かさ
生きて行く自信地球を踏んでいる
ふるさとの味はここだと道の駅

羽曳野市　宇都宮　ちづる

悪妻をそろそろ止める四十年
娘が来ると音量下がるテレビ音
ちょちちょちあばば孫の笑顔でヒーリング
孫の守り二週続いて風邪をひく
仕舞風呂今日の疲れをじわり融く

羽曳野市　永田章司

鏡にはおやじの顔のコピーあり
海峡の封鎖の脅しオイル高
末席に座る器が大き過ぎ
ペットにも厚着をさせて風邪引かせ
政治家も塾で促成ハイいっちょ

阪南市　森村美花

待ちわびた便りそおっと封を切る
美味いもん食べに行こかと慰める
長い橋わたくし彩に染めました
ドラマ見て泣いているのはいつも夫
いい芝居見てほっこりと爪を切る

東大阪市　佐々木満作

向き合って思いの丈をぶちまける
オフの品更に値切っているお客
針箱に母の涙の糸車
三食に欠かせぬ旬の青野菜
人間のエゴが優先する社会

東大阪市　北村賢子

うとましく居なきゃ気になるのが夫
時時はストレス抜きにおんな旅
何歳か猫は元気な声で恋
絆と掲げ瓦礫受け入れを渋る
ありのまま不器用に生きてる誇り

東大阪市　笠井欣子

墓石が元気出せよと光ってる
ダイヤ婚済ませあの世へ早々と
大好きなお酒かかさず供えます
葬送は自我の詩吟に送られて
ぶつだんを拝む可愛い新夫婦

東大阪市　米田水昇

病院の窓外に見る花満開
旧友も見舞うてくれるうれしい日
孫描くばらに室内にぎやかす
リハビリはイケメン先生にしてもらう
眠られぬ夜は川柳雑誌読んでいる

枚方市　海老池洋

草餅に故郷の春の走馬灯
美しい別れにしたい花吹雪
失敗の数で磨いてきた特技
堅い殻破り脱皮のしたくなる
こんにちはそんな顔して出る新芽

枚方市　寺川弘一

ペットより先にわたしは死なれない
サプリメントで寿命を少し追加する
影法師だけで人柄わからない
コップ酒心の鬱に流し込む
勇気が無いと言えぬイエスとノーがある

ぼんやりと麻酔が切れて腹が減り
強腕へ面従腹背しています
秒針と駈け競べする終発車
中世の落首が無形文化財
菜の花やネクタイ結ぶリクルート

枚方市　丹後屋　肇

泣きながら渡った橋がもうなくて
ヨーイドン競争したね太鼓橋
つり橋揺らす私やっぱり意地悪ね
てんとう虫夢見て渡る虹の橋
頑固者の濡れたまつ毛を見てしまう

枚方市　小林わこ

真ん中を歩きつづけてけつまずく
褒められて正座くずせず耐える膝
内緒ごとやればおそろし妻の勘
居ない人悪い噂の主人公
人並みに悪さもやってもう傘寿

枚方市　安達忠央

頂点を極めた男の低い腰
ほんとうは愛してないと四月馬鹿
コンクール逃した右手の再手術
ほっこりと生きる余生の趣味多忙
春がほら来てます子らのつくしんぼ

枚方市　二宮山久

春風に動き始めた万歩計
バイキング育ち盛りの孫を連れ
朝ドラが迷いの背中押してくれ
日本中癒しの桜咲き誇り
愛犬が絆をつなぐ嫁姑

枚方市　二宮紫鳳

大根の白さなんにも言わないが
迷わずにエレベーターに乗っている
望まぬがだんだん錆が増えてきた
プレッシャーになりそう赤い薔薇抱いて
ちどり足酔うているのはお嬢さん

藤井寺市　髙田美代子

どの道を行っても自販機の明かり
どう足掻いてみてもわたしという器
手ごたえがあるまで送る一筆箋
妻と女の距離をつないでいる苺
月下美人月のない夜の月となる

藤井寺市　鴨谷瑠美子

赤い花恋にはとても素直なり
整理不能少し思い出多すぎて
天国へ行けると決めてボランティア
宿の下駄借りてフキの薹探し
誰からも愛されたいな紅の彩

藤井寺市　太田扶美代

藤井寺市　鈴木いさお

分れ道右を選んだのも運命
古希の坂少し余震を期待する
エッセーの中へ自分史さりげなく
辛抱のトンネル抜けて小さい幸
われに似た羅漢も在す古都の寺

藤井寺市　俣野登志子

衣摺れの音なつかしく切なくて
試みる勇気がほしいワンパターン
地下街をウロウロわたし今土竜
食欲のブレーキ満腹で掛かる
紙とエンピツ持てば眠たい春うらら

藤井寺市　津田シルク

心耕す本に出合って読み返す
思考回路錆びて作句に鞭を打つ
冷しうどん食べたくなった四温の日
のめや唄えや開花宣言出たばかり
暦どうり先発隊のつばめくる

藤井寺市　若松雅枝

亡き人に留守を頼んで一人旅
亡夫に似た人がおいでと呼んでいる
風呂敷に包んだ僕の淡い恋
ライバルに負けず私もニューモード
電子辞書買って喜ぶ僕の脳

藤井寺市　増井ヨシ枝

サクラさくら追加予算がほしい春
半世紀前の人から便りくる
サイタ咲いた痴呆の老母の童うた
アカギレの老母の手愛し春の陽に
病癒え命の追加しています

藤井寺市　伊藤アヤ子

愛犬も満足そうに花の道
マンションが建ってからビル風が吹き
鏡に写したくないこのスタイル
自信など一本も無い足の指
夫婦してこれまで生きて来た自信

藤井寺市　吉田喜代子

長寿国親しき友は去って逝く
ただ会ってランチに会話生きる糧
満たされぬ頃が良かった五七五
救急車立寄り先が近くなる
寄進帳御近所さんをちらと見る

松原市　森松まつお

新緑に誘われ歩幅広くする
大股で歩き右足つってくる
羽根のばすつもりが時間持て余す
カス汁もだめなんですか休肝日
念のため宝石箱は買ってある

箕面市　出口セツ子

一歳の違い大きな歳となる
遺言のつもりで続けている句作
難病の見舞い私に無い強さ
慰めは言えず見舞いにだけ通う
祝い事無く訃報ばかりの歳になる

箕面市　広島巴子

桜咲く皆幸せに幸せに
吉野山霧に心を洗われる
花吹雪役者のようにポーズとる
寂しげに日帰りなのと母がきく
老母よりは先にいけぬと元気だす

守口市　井上桂作

老いと死を直視しながら歩みます
逃げないで老いのり越える道求め
人間が抱える無常直視して
親日のキーン博士も日本人
街飾る少しおくれて紅梅は

八尾市　宮崎シマ子

家は空っぽひとり暮しの遊び過ぎ
筍一本どうして一人で食べようぞ
美人薄命大事にしたが妻強し
小学唱歌忘れていない友が来る
三回忌すぎても亡夫の咳を聞く

八尾市　髙杉千歩

花吹雪老いのドラマよ一行詩
今日もまたのほほんと生き日記綴ず
初出勤後姿が父に似て
加齢です安定剤を三日分
老人会会長さんも河内弁

八尾市　村上ミツ子

雪にびっくり頭をだした土筆
お待たせしました桜やっと咲きました
やっと咲いたさくら嵐に圧し折られ
コート着てマフラーもして花見かな
天秤に掛ける電力と安全

大阪府　籾山隆盛

酒とろり夢の旅路に誘われる
青空へ舞う日信じる千羽鶴
ひとり居の電話かまえに入る癖
影一つ風の記憶の中で舞う
容赦なく凍った拉致に刻ながれ

大阪府　野田栄呼

ひたむきに野への愛着春を待つ
老体へ張り合いくれる庭の草
畑仕事心通わす野菜たち
旅すがら思わぬ友と春睦む
健康へ駄作続けて持つ気概

大阪府　米澤俶子

ゼンマイが切れぬ程度にネジを巻く
老いるたび縮まってきた車間距離
春うらら恋の余熱に着火する
ファッションに歳はない赤が好き
予定通りに今日小吉で暮れていく

大阪府　桑田ゆきの

永田町増税と言う春嵐
花筵父の軍歌にアンコール
献血の青年逞し瞳澄む
茶の席に侘び寂得たる顔になり
晩学に一灯点す花の城

神戸市　山﨑武彦

ありがとう魔法のようないい響き
世渡りの上手な魔女に付いて行く
哀しいね作り笑いの上手な子
微笑めばほほえみ返す車椅子
初孫の笑顔を抱けば歯が二つ

神戸市　井上じろう

底抜けにいい奴だった今ホーム
男ってつらいよなただただ無言
四季の花やっと楽しむ年になり
真夏にも熱燗愛した彼も逝く
憧れの晴耕雨読身につかず

神戸市　山口美穂

明日のこと分からないから歯を磨く
疲れるってどんなことかと孫がきく
お留守番犬が不服な顔をして
お先にどうぞゆっくりですが歩けます
鏡へ笑えば今日のスタート押してくれ

神戸市　伊勢田毅

人間不信まんだらの絵がまだ描けぬ
金婚へもつれを直す赤い糸
妻の留守へそくり数え安堵する
TPP心売らぬと種を播く
検査パス先ず一杯と大ジョッキ

神戸市　山田婦美子

偽りのない土地の匂いを嗅いでみる
春ですよ頭で動く老いの足
よく動く右手だペンも包丁も
サクラサク孫には甘い老いの知恵
逢いたいからさようならとは書きません

神戸市　木村貴代子

希望持つだけで変ってくる世間
志望校受かり家中光り出す
満開の桜見下ろす午後の酒
積み立てた年金消える筈はない
入場料払い野原に遊ばせる

神戸市　山口光久

御無沙汰がますます敷居高くする
正義感だけでは飯にありつけぬ
父は拳母は優しく言い聞かす
寝たきりの夫我が家のコンダクター
長旅は敬遠したい歳になり

相生市　中塚礎石

八十路坂二本の杖で登りきる
子を守るたったそれだけ手は挙げぬ
頂上へあえぎながらも夫婦旗
天職に定年が無い筆を執る
日の丸の白地は赤に染まらない

芦屋市　竹山千賀子

古帽子父の生きざま染みのあと
ありがとうの声が聞える花棺
はぐれ雲早く仲間にお入りよ
お飾りが多くて本音掴めない
喜寿の坂許し許され歩いてる

芦屋市　黒田能子

まあまあまあと両方の顔立てている
乾杯で消えてしまったわだかまり
リハーサルなら落着いて逃げられる
軸足のゆがみわたしの現在地
ここ一番決断の父口ひらく

明石市　糀谷和郎

職退いて大志は棚に置いたまま
結局と言った話がまだ続く
客が去りほっと桜の息遣い
振り出しに戻ってみても無い若さ
子に示す手本は親の笑顔です

尼崎市　林昭三

早咲きのさくら足踏み戻り寒
留守番が少しで酔った盗み酒
バス旅行袖擦り合うも飴一つ
婆ちゃんは手提げの中に飴備蓄
春になり思い出せない事が増え

尼崎市　春城年代

あのときが花道だった君も居て
つんつんと新芽揃ってきた活気
帳尻を合わす熱意も疎くなる
いちご大福娘の手作りは格別だ
先は短かいとわが身にとくと言い聞かす

尼崎市　藤岡りこ

パンドラの箱が開いた日本国
宝石箱に鎮座しているガラス玉
妻の肉じゃが少し煮くずれして旨い
散歩後のカフェーは妻と割り勘す
若いってそんなにいいの児が問うた

尼崎市　加川靖鬼

花時計誰も時刻を覗かない
きっちりと仕事果した釘の錆
挿げ替える首が無いのでそのままに
恥かけぬ下着でいつも出掛けてる
ボウフラの忍耐力を学ばねば

尼崎市　軸丸勝已

もっとよい日本語ないか四月馬鹿
節電はできぬ便座の待つ温み
大事な日奪う爆弾低気圧
寒気団お前も花見したいのか
川柳で笑い米寿と言う褒美

尼崎市　長浜美籠

いつまでも過去引き摺らぬさくら咲く
天然呆けなんて幸せ春うらら
お目覚めの水が清すがしいサプリ
それからへと話が続く南瓜パイ
一文のメールガス抜きしてくれる

加西市　金川宣子

侮るなボケの階段上り下り
妻だけが友に誘われよく出かけ
感化され通い始めた絵画展
不意打ちのウインクもらい頬染める
運動会ばあちゃん弁当大好評

川西市　米原雪子

連休の留守番役を買って出る
泥濘を跨ぎ損ねてどろどろに
駅工事迷路のように歩かされ
もうすべて子に従って生きるのみ
前向きを思い起して友誘う

川西市　西内朋月

飽きもせず焼酎飲んでいる深夜
新聞を拾い読みする朝御飯
何もかも捨てて本気のボランティア
幸せの風はてのひらから逃げる
満開の桜に明日を問うてみる

三田市　久保田千代

プロの夢見た少年の甲子園
様ざまな生き方知って糧を得る
凭り掛る机があって落ち着ける
期待せず自分の分をわきまえる
本当の親友さてはどの友か

三田市　堀　正和

春の海のたりと平和過ぎないか
家族との絆乾燥注意報
家もなくお墓もないが本籍地
最高の贅沢でしょうマイペース
チョイ悪もときどきはして元気です

三田市　福田好文

じゅうたんの縁につまずく喜寿の足
孫あやす妻久びさに母の顔
飲むな飲むな言う娘の土産大吟醸
焼酎党ばかりで風情ない酒席
靴下の穴に気付いた通夜の席

三田市　田中章子

賽銭をはずみ心配置いてくる
川柳ノートことばを探す旅に出る
毎朝の夫の薬を用意する
長生きをしそう今から貯めましょう
夫にも違った夢があったはず

三田市　上垣キヨミ

シルバーの恋はちょっぴり淡味で
生きるため涙袋は捨ててきた
一・一七知らぬ球児の甲子園
幹事して余韻にひたるクラス会
孫連れて休眠貯金出しに行く

三田市　北野哲男

食前の薬はいつも余りがち
今はもう田舎の匂いせぬ故郷
のんびりも三月で飽きた定年後
凭れすぎ味方の酒に裏切られ
盛大な葬儀の涙すぐ乾く

西宮市　緒方美津子

縁側には人寄せ神が在します
ごはん粒一つになるとうとまれる
残したらあかん作った人が居る
大人と子供の境目がいとおしい
悪友のいない人生淋しかろ

西宮市　秋元てる

正にまさにこれが笑顔と言う写真
物言いが爽やかなのでついＯＫ
あの姉も老いたか折合いつけて来る
老いて今見た目も大事と思い知る
懲らしめか余震が続く昨日今日

西宮市　吉井菜々子

恥じらいのさくらようやく舞台へと
しみじみと美味しい春のしじみ汁
キッチンでタカラジェンヌになるすみれ
はるばるとお越し青菜にカタツムリ
葉ざくらの気合いに負けぬよう歩く

西宮市　藤本直

ふわふわの春の温さに二度寝する
花吹雪只々春を浴びるだけ
たけなわと言うには優し花曇り
烈風が春の甘さを吹き飛ばし
春炬燵猫も見ていた大欠伸

出不精の足へ春だと言い聞かす
よそさまの花に元気を貰う坂
おばあさんのリズムになってきた命
チクタクと時が聞こえていた昭和
丁寧語使い夫婦の冷たい日

西宮市　亀岡哲子

逝き方は生き方ですと僕の医者
深刻に飲んでいるのは私だけ
別れるなと言うあんたに何が分かります
妻からの電話命令口調なり
潔白ですか夜ごとお酒を飲みながら

西宮市　片山忠

花街道人も小鳥も浮かれ行く
感動を友に伝えた郁夫展
揺れ動くマグマに杭を打っておく
ケーキより和菓子好みで合う夫婦
言うたつもり笑えるうちは許される

西脇市　七反田順子

復興の血行繋ぐローカル線
夫婦独楽国会中継傾聴中
山菜を摘む指先がわらう春
低気圧気分が重い日日がある
鉛筆で輪になる友の五七五

姫路市　古川奮水

想定外言わず桜は咲いてくれ
毀誉褒貶自由にものが言える国
それにしても揉めて政治が進まない
竜年の兄に疎遠を詫びている
かかりつけの医者が信用とはいかぬ

奈良市　加門萌子

水溜り見ればジャンプをしたくなる
税保険ないと年金溜まるのに
影絵して遊んだ障子今はない
ニューファミリー還暦過ぎて二人きり
異常気象遅れる花に早い花

奈良市　辻内げんえい

逝くときは妻の手を取り「また逢おう」
水溜まり跳んで気持ちを切り替える
黄泉路行く旅に欠かせぬ酒　柳誌
カラオケのマイク握れば小指立つ
師の影を踏まずの昔懐かしむ

奈良市　岩本浩二

壊れたわジューンブライドだったけど
明晰なサッチャーさんも認知症
安らかに故郷の土によく眠れ
父が居たエトロフ島に行けるかな
金色の人型棺に祈りあり

奈良市　阿部紀子

生駒市　飛永ふりこ

たわごとも弱音も吐けて仲間なり
修飾語いらず笑える同い年
煽られて少し踊ってみるもよし
なつかしいセーラー服の青春譜
薔薇好きの理論派天に召されたり

橿原市　安土理恵

真ん中で身動きとれぬ団子です
お茶漬けの友です元は夫婦です
ちょっとした悪戯わくわくしています
春は輪舞次はどなたのパートナー
何ひとつまとまらぬまま花の春

大和郡山市　坊農柳弘

慌てるのは止そう紫陽花まだ蕾
けだるさの中で向日葵の吐息
ときどきは僕の前行く影法師
満ち足りた気分で絵日記を綴る
風紋の戯れに酔う風の私語

奈良県　渡辺富子

何かある妻のスキャット透き通る
スタートの覇気がいつしか干涸びる
足並みが乱れ原発宙に浮く
心臓の鼓動も入っているマイク
人生論積んで迷いがまだ続く

奈良県　天正千梢

彼岸すぎたに淋しい話多すぎる
朝風呂にびっくりしたのせきやまず
足まくら少し大きめがほしい
声の張りが出て来ていい調子
ダイエットするなどうそだった

和歌山市　福本英子

艶っぽく咲いて椿の潔さ
頑張れと米寿の足の機嫌とり
ちまちまと一人それでも朝昼晩
譲られた座席おおきにどっこいしょ
夢を買うお金惜しまぬ列にいる

和歌山市　木本朱夏

変換キィー押したらパッと花盛り
涙目で見回している桜さくら
にぎやかに桜を囲む倶会一処
思いだし笑い桜は頬染めて
道連れをときどき変えて旅つづく

和歌山市　松原寿子

わたくしのさだめとしかと心得る
てのひらにもらった夢の種がある
奥深い料理へ愛のひとつまみ
2・23カラット母の形見は逃さない
歯車があって心の鍵が解け

和歌山市　古久保　和　子

花散らしの雨に疎遠の友のこと
ひとり居て笑いのツボもずれてくる
愛車のキズと一緒に心までへこむ
ずぶ濡れの方がすっきりすることも
空席へ母の面影座らせる

和歌山市　喜　田　准　一

曖昧にして置くことも策の内
文句だけつける気楽な雑魚の群れ
率直に詫びる勇気で座が和む
ナツメロが捨てた昔を呼び戻す
躓いて転けて七十路の坂を知る

和歌山市　田　中　み　ね

裏山は今ウグイスの楽園地
鶯ははっきり言って声美人
時として女を捨てる言葉じり
掘りたての竹の子届く旬届く
とてもとても妻のお口に勝てません

和歌山市　武　本　碧

繕ったあとが濡れてる愛の傷
たましいが透きとおるまで手を洗う
過ぎてきた月日へパズル埋めていく
止まり木で羽を休めている戦士
あじさいに花を持たせて雨しとど

和歌山市　玉　置　当　代

おだやかな顔に闘志を秘めている
裏方で終わるものかとかすみ草
萎縮した脳にもカツを入れている
世の中の速さうっかりなどできず
花の種添えて無事だと言う便り

和歌山市　福　井　菜　摘

少年の夢は果てない多色刷り
ねぎらいのひと言根雪とけてゆく
下り坂誠の愛が見えてくる
崖っ縁一枚岩になる絆
わくわくと夢とドラマを抱く大地

和歌山市　柏　原　夕　胡

恋をする準備を夏が来る前に
かすみ草の謙虚いちばん美しい
白よりも白くなりたいなと思う
哀しいくらい真っ白く炊き上がる
自惚れはひとを待たせたことがない

和歌山市　土　屋　起世子

もう初夏のリズムで泳ぐ鯉のぼり
戸主になり泣きごと言うていられない
春ですね手摺りを握り背伸びする
夫逝き日毎ずぼらになってゆく
クラス会誘う電話で聞く訃報

和歌山市　松尾和香

掛け続ける年金不安来る未来
城に月地上に桜平和の世
誘われて海を渡った句会旅
何事も本気で動く女偏
何もかもゆったりできる歳になる

和歌山市　上田紀子

たっぷりの時間あるのに忙しい
鯉のぼり見えぬ日本の明日思う
俎に無駄ないシェフの手包丁
台本に真直ぐ光る芸がない
物差しが沢山あって決まらない

和歌山市　堀冨美子

鉢植えの春が心を和ませる
鉢植えも子も頃合がむつかしい
ちょっぴりの見栄が世間を狭くする
春なのにギブスが蝶を舞わせない
金持は使わぬように出来ている

岩出市　藤原ほのか

桜散り私の春を締め括る
プロジェクト立ち上げ瓦礫消去する
天命と思いふんわり受け止める
自分史のページに華の色を足す
地球儀を回すと青い点になる

海南市　堂上泰女

孫からのクイズで我に返る脳
ライトアップへ夜桜からの溜息が
あなたへと続いて弾む銀の道
アイデアが降って来そうな峡の星
三猿になれとお財布からサイン

海南市　小谷小雪

手にとればまた溺れそう愛読書
日に一つだけにしておく探し物
足元の泥も勲章野良着着る
渋い日はひたすらに詠む般若経
たわいない悩み丸める朝の虹

紀の川市　宇野幹子

ライバルが火をつけにくる導火線
煩悩も泰山木の香に溶ける
水割りの底へ沈める半世紀
別腹に妻の小言を流しこむ
遺影用の写真と知らずハイチーズ

紀の川市　北山絹子

ネクタイを外せば父の顔となる
列島が花の香りに包まれる
白昼夢宇宙に建てたマイホーム
雑居ビル窓がストレス溜めている
子は鎹だけど独身貴族です

田辺市　岡本　昇

子煩悩まだ肩の荷が下ろせない
余震続く非常袋を負ったまま
治癒力にハッパをかける鍼やいと
漣は海の男の鎮魂歌
手作りの器に同じ物がない

鳥取市　土橋はるお

鏡見てよっしゃと出発して行った
手提金庫にいっぱい位知れとるわい
普段着のままの写真ばかりなり
下敷きをすると癖字がよくわかる
名刺から転げ落ちてる役もある

鳥取市　岸本孝子

三人の孫にうれしいサクラ咲き
機嫌いいときのピアノはいい音色
聞き上手やっぱり今日もしゃべらされ
延命はいらないとだけ言い残す
しみ皺が目立たぬようにいい笑顔

鳥取市　岸本宏章

免許証惚けのテストが待っている
貧乏に耐えても孤独には負ける
忠告を蹴った若気をいま悔いる
欠点の裏にたくさんある長所
生き恥を曝して僕も進化する

鳥取市　鈴木一弘

最果ての孤島古老に慈雨嬉し
千年も経てば憤墓も見世物に
見送りは垣根にあそぶやぶ椿
北は雪南は桜花ざかり
同人の雅号鬼籍に書きかわり

鳥取市　吉田孔美子

なんとまあ湯灌までしてしまったわ
入院の前にはお寺さんを呼んだ
お義姉さんもう天国ばかりだからね
孤独死でなくて良かったよかったね
死出化粧もう子供等に会ってるか

鳥取市　池澤大鯰

若菜摘む乙女は見えず過疎すすむ
水仙の種類きわめる気が起きる
罪ほろぼし菩提を祈るしかないか
宝くじ変身の夢追っている
進化して先祖の癖を隠し持ち

鳥取市　春木圭一郎

夢希望あふれるうちは青春だ
どの花も何にも言わず凛と咲く
絵てがみで自分の心伝えたい
苦労した人の言うこと味がある
悩みとはとらえず課題解きほぐす

息はずませて一年生のご挨拶
駅伝の応援団も息が切れ
吸って吐いて胸に翳りは見当らぬ
時どきは雲隠れして息を抜く
ストレスを大きく吐いていい眠り

鳥取市　西川和子

いろいろとあってふて寝と黙秘権
誇るもの無くて遠慮のない仲間
そのときは何と言おうが尊厳死
ヘルペスと同行三人の遍路
毒蜘蛛のようにヘルペス肌を刺す

鳥取市　福西茶子

駄目元でやれば投句も楽になる
楽すれば貧乏神に好かれそう
好き嫌い言える柄でもない自分
妻の愚痴聞いて流せる耳になる
酒二合飲めば朝まで天国だ

鳥取市　竹口清信

土地勘が十年たつもまだできず
真贋の目情に流され曇りがち
花粉症読経途中で鼻ぬぐう
古文書読み拡大するもまだ読めず
年とってウラの畑が荒れてきた

鳥取市　池原天馬

ド根性あるのかカエル雪の上
星達の歌が聞こえるスカイツリー
加齢臭孫に言われて気がついた
一人居のつぶやきじっと聞く鏡
古傷が時々俺に指図する

鳥取市　中村金祥

花のいのち摘んだハサミにある自責
人生なかば仏と鬼も同居させ
フルムーン思い出つむぐ草千里
終焉まじか生きざまを問う弥陀に問う
老いて今日本の四季に心和ぐ

鳥取市　奥谷彩子

病名を並べ待合室の主
長生きの秘訣持病と腹八分
イランより家計を泣かす原油高
子離れが出来ずオレオレ詐欺に遭う
人並の亭主でゴルフ　酒　浮気

鳥取市　加藤茶人

ライバルに内緒にしたい泣きぼくろ
押し花になっても残る炎色
北風に乗って挑戦状が来た
てのひらが熱いぞ今が潮時だ
魂が揺れる別れのクラクション

鳥取市　倉益一瑤

笑ってる薫の遺影泣けてくる
幸せのうちに閉じたいこの命
ＡＩＪあなたも人の子でしょうが
大切に程よい距離で恋をする
このままを持って逝きたい愛一つ

鳥取市　前田楓花

未だ八十路天下無敵の恋をする
愛しくて憎い夜明の交叉点
父母の眠れる海の波まくら
喧噪の街で拾った国なまり
慰めの言葉はいらぬ吊し柿

鳥取市　中宇地秀四

年金は下降出費は上を向く
風穴をドーンと開けてくれ維新
薬のみだして調子が狂いだす
元気なら先も何とかなるだろう
花吹雪もう言うことはないような

鳥取市　福永ひかり

幸せな未来願っている四つ葉
徳利が転び文学論に酔う
花束とワインで魔女の誕生日
空白の時間を埋めてゆく介護
夕食は六時と決めている独り

鳥取市　両川無限

頑張ろう星の数ほどする握手
年金のふらふら岩も落ちつかぬ
雨の降る前に自浄はすませます
太陽と転ぶ大地に身を任し
生と死の証運命と土になる

鳥取市　平尾菜美

ダルビッシュ世界の春へダッシュする
タイムカプセル母校に埋めた若い夢
その任務終えた母校に花が咲く
飾っても歳は正直背なに出る
柳友も減って侘しい住所録

鳥取市　永原昌鼓

あっちこち後期のからだ軋む音
対向車老いの自転車降りて待つ
大丈夫老後の恋は妙薬に
巣立ちゆく孫は未来へ眉きりり
三代目孫貧乏はほんとらし

鳥取市　吉田弘子

もろもろの苦労老化とともに消え
お花見に行けますように膝さする
あの世とや母にもあの人にも会える
雪ひらり桜のひらり早く来よ
独りごとはじまったねと壁笑う

鳥取市　近藤佳子

鳥取市　有沢　せつ子

日中の長さへ軍手忙しい
書道展清い心になって出る
書道展帰りに筆と硯買う
初めての毛染めに誰も気付かない
良い方に解釈をして胃にためず

鳥取市　夏目　一粋

めずらしくマッチの軸が捨ててある
夫と妻二つの岩の愛の綱
傷ついた地球は回るとこしえに
いつまでも子どもは子ども愛おしい
はるかなる音にも耳を立てる鹿

鳥取市　高浜　勇

平凡に生きて記憶もうすれ行く
ハンカチの移り香だけに亡母生きる
日本中スカイツリーにしがみつき
少しだけ逃げ道あけて非を責める
ぴったりとはまらぬ蓋も味がある

倉吉市　猪川　由美子

防衛相鬼門の溝が埋まらない
増税命なにがなんでも総理です
年の差婚迫る介護へ愛誓う
死刑執行法には合うがやり切れぬ
予防ワクチン気休めだけど打っておく

倉吉市　山中　康子

一徹の血はあらそえぬ父ゆずり
頃合いに口出ししてもいいですか
福島に笑み戻るまで生きている
三役をこなした母に山がある
この山を越せばわたしも一安心

倉吉市　牧野　芳光

督促状見るとこの世が暗くなる
表彰状飾ってやる気出してみる
原始的な脳で天気に右左
昇ってきた坂は振り向かないように
無礼講だから喋ってなりません

倉吉市　山本　玲子

長居癖二番煎じのお茶になる
冗談の見分けがつかずひとり浮く
啓蟄に一人静は芽を出さぬ
優しい口調わたしを包み込んでくれ
大欅緑のつばさ天かくす

米子市　中原　章子

人生の仕舞い支度の良いことば
坦坦と鼻突き合わせ飽きもせず
テレビ見て泣けばティッシュがすっと出る
終章にしあわせ笑顔残したい
孤独死が身につまされる世の中だ

米子市　後藤美恵子

選び抜いた種を蒔いても出来不出来
ひとり暮らしてこずる後ろ留め釦
手の荒れを春風そっと撫でていく
ミサイルが天のメルヘン撃ち落とす
新聞を見る目いつしか作句の目

米子市　成田雨奇

古希過ぎてまだ軸足が決まらない
落ちそうで落ちない岩が崖の上
花よりも酒を喜ぶ父に花
楊貴妃を目指し鏡に向かう妻
願い事一つに絞る流れ星

米子市　高田振作

ツイッターより声が聞きたいもしもーし
年寄りをいじめる課題カタカナ語
もてないのに面食いだけは人並みだ
縄のれんここは親父と飲んだ街
別嬪の嫁をもらって怠けだす

鳥取県　斉尾くにこ

けだるさの午後コーヒーで貼る切手
水ふうせん誰かが春に投げつけた
水槽の中だと不意に知ったシャチ
悪ぶったそのやさしさに救われる
ふいに鳴るコントラバスの低音部

鳥取県　石谷美恵子

もう一度嬉しい手紙読んで寝る
せめて句で実らぬ愛を吐いている
ふる里の軸は日本海の幸
はんなりと花びら餅が待つ茶席
軸たしか回り道したひとらしい

鳥取県　細田裕花

ポストイン朝の匂いのする活字
春切符貰ったつばめ海渡る
容赦なく打ち寄せてくる税の波
机上論少し青くはないですか
草花の無言の愛にすくわれる

鳥取県　山本正光

一年生みな輝いて春の門
百態の風も動ぜぬ伯耆富士
いい過去を温め合います再会日
まだ誘い合う友が居てありがたい
広すぎる庭で日課の草を抜く

鳥取県　深田倶久

自転車の運転おそわる高齢者
神話伝説古事記の国に桜咲く
蹴とばしてみたが敗色増すばかり
砂丘にも砂の美術の花が咲く
塾通い遊ぶ暇など僕にゃない

鳥取県　竹信照彦

誰がための鐘か同級生が逝く
不仲でも過去引きずって行く葬儀
桜咲く頃に逝こうか散る頃か
テロップがやたら警報注意報
無視されぬ程度に動き人になる

鳥取県　山下節子

人間をみがく本です読みにくい
七十五日やっと安心して眠る
思いきり自己主張して散るさくら
ツイッター本音と愚痴の告白か
死んだ振りしてみませんか今日の鬱

鳥取県　西谷悦子

うめが咲いたよ感性うれし二歳孫
花を愛で花壇の手入れ小半日
美しい個性をもって花は咲く
草むらにそっと咲いてる花でいる
花育て花の生き様から学ぶ

鳥取県　松川行男

積雪を眺めて春の種を播く
恋仇歩幅ゆるりと狭くなり
恋愛で仲人汗をかきません
風に乗り祝儀法事と老いを攻め
ハッピーエンド歩いた運に四季があり

鳥取県　岩崎和子

夜半の咳夢破られてうつうつと
長い冬二人越えたね笑顔出る
早や四月句会次々ペン握る
ハッピーに生きるブータン憧れる
昼食は僕が作ると助け舟

松江市　石橋芳山

流線に凶器となってアスリート
嘘つきが塗り足す艶のない言葉
届かないところが痒くなり朧
膨らんで怒りはゴツゴツの拳
闇は朧に取り残されているらしい

松江市　小川注湖

ひらひらと桜花は悲し群れて落つ
よくぞ続く十円卵世を支え
笑い声日々嫁と持つ孫と持つ
キャミソール美しくなる女の背
湖上にはロマンス乗せてボート揺れ

松江市　松本文子

生きよう愛そう過去形にしたくない
平成と昭和くっきり溝がつく
捨てよ捨てよと生意気を言うでない
心も脳も解凍を急がねば
どげでもいい事だ今夜は寝るとする

髪カットきりっと決めて一年生
一斉に春の花咲き背なを押す
春を行く出雲まほろば花愛でて
白木蓮くずれ始める春のウツ
春の陽へ虫も私も動き出す

松江市　松本知恵子

借景は見事な眺め桜舞う
堂々と生きよと額に書いてある
妹がモデル油絵セピア色
木蓮が咲く堅い衣を脱ぎ捨てて
雑音が小さくなって行く検査

松江市　錦織禮子

土くれを転がす別れ時かもしれぬ
耳朶を染めて並んだ桜餅
遠い日の靴音今も耳を踏む
軸足で踏ん張る折れそうな心
土蔵朽ち芽生えるものの代替り

松江市　川本畔

国境に重い話が埋めてある
あどけなさ残しお国のために消え
くすぐりも入れて妥協の案が来る
ざわざわの中から飛んでくる礫
ショーケースの中で成長止められる

出雲市　竹治ちかし

春ですネ道行く女の花衣
脱ぎ捨てて農耕春の風に立つ
靴下の穴から春の陽が笑う
木登りが出来ぬ子供の長い足
野の花の響きにふれる童歌

出雲市　小白金房子

百選の桜の蕾期待させ
新風が年度始めを祝っている
手洗いを子供のように習慣に
句集出す渦をまいてる五十年
凛として絆がつくる明かるい世

出雲市　富田蘭水

暗い記事剥ぎ取るように桜咲(はなわら)う
今泣いた毬がポンポン弾みだす
心つなぐ抹茶にお蕎麦出雲弁
病む人に「お気をつけて」と案じられ
陽はうらら蝌蚪の学校見て飽きず

出雲市　伊藤玲子

財産は無いが明るい笑い有り
外は雨積ん読の本崩し読み
囲む輪が大きくなって母白寿
花に囲まれこころ優しくなって来た
シャッターを押してばかりのお父さん

出雲市　多久和敬子

哀しみの重さを知った水の嵩
水掛け論素知らぬ顔をする蛙
口止めをされて重い荷を分ける
眼帯を取ったら春が全部見え
日経新聞読む帰省子も不惑越え

島根県　伊藤寿美

等分に愛を盛ってる母の皿
遮断機が下りる迷いを断つように
茶柱に暗示もらった今朝の靴
ソプラノで唄い出すのは春の雨
見残した夢のかけらが手に積もる

美作市　大石あすなろ

つなぐ手に応えて響く愛紡ぐ
もう少し歩いて見よう万歩計
原発へ天使の黒い矢がささり
ささやかな希望小さな花咲かす
薄明り命をさがす闘病記

美作市　福原悦子

満開の花をねぎらう雨よ雨
やり直し出来れば吾子を胎内に
終極は瀬戸内の海自然葬
人間臭息苦しくて茜空
フラミンゴ無念無想の修業中

竹原市　石原淑子

晴れ渡る空へ心を遊ばせる
衣がえ身軽さがいい米を研ぐ
すいすいと解けた難問夢の中
終章を飾る希望の鈴がなる
大空を揺らして風の花ミモザ

府中市　馬場利子

こだわりを捨てよう風に委せよう
よくもまあおんなじ口で言うセリフ
花吹雪胸のしこりは治まらぬ
も一人の私が裾を踏んでいる
遅咲きの桜にグチを言ったとて

府中市　藤岡ヒデコ

門限がオールドミスにしてしまい
犠打打った人が殊勲者かも知れぬ
過労死の遺書へ冷たい社の幹部
それなりの皺と白髪で丸く老い
溺愛が子供一人を駄目にする

宇部市　平田実男

すくと建つ桜の中の薫風碑
天運と地運を信じ種を播く
ダミ声が時に役立つ電話口
三十年変らぬ友が宝物
ご近所と声かけ合って丸く住む

東かがわ市　川崎ひかり

東かがわ市　清川玲子

わだかまり捨てると笛が吹けてくる
復興へ一段強く笛を吹く
たくさんの愚痴聞いてくれ海の青
ひとしきり泣けばやさしい海の顔
隅っこの席に肩書とれた顔

松山市　古手川光

満開のさくらへ解ける蟠り
うやむやなような気もする義援金
なんでやねん言いたい事が多過ぎる
同期会みんな開けてた玉手箱
警察に警察が要るだらしなさ

（前月分）鳥取市　横田春名

若者の老後案じて老い生きる
冤罪の償い神も涙する
どなた様うつろな瞳母を抱く
躓いたとたん見知らぬ若い手よ
なにくそと気ばってみても重い空

第31年度 夜市川柳ご案内

回	兼題	選者	締切
1	まだまだ	新家 完司	6月末
2	大阪	岩田 明子	7月末
3	夜	鈴木 公弘	8月末
4	知る	高瀬 霜石	9月末
5	仲間	川上 大輪	10月末
6	野菜	政岡未延子	11月末
7	解く	阪本 高士	12月末
8	つくる	奥山 晴雄	1月末
9	運	森中惠美子	2月末
10	嵌める	天根 夢草	3月末
11	からだ	大野 風柳	4月末
最終	成長	小島 蘭幸	5月20日

第16回　全日本川柳誌上大会（太字は本社同人）

（参加数1731件）

平成柳多留賞

逆風をいつか寄り添う風にする　大分　清池　羊子

川柳大賞

なでしこも心に龍を飼っていた　大阪　中崎布佐恵

NHK会長賞

すごいなあ龍を初めて描いた人　愛媛　栗田　忠士

日本青少年育成協会会長賞

子に渡すガラスケースの第九条　北海道　岩間　啓子

全日本川柳誌上大会賞

都会より星が近くにある故郷　兵庫　北野　哲男
逆らった父とおんなじ樹に登る　神奈川　富岡　桂子
胸内にガラスを秘めて介護する　宮城　齋藤てい子
トンネルを抜けたと被災地の便り　山形　樋口　一杯
前向きに歩く平面図の都会　神奈川　阿部闘句朗

秀句

笑わせてくれる子がいて喪が明ける　鳥取　両川　無限
昇龍の大志に燃えている蛟　大阪　海老池　洋

川柳塔の 川柳讃歌 ⑨⓪

木津川 計

老人の街日没が早くなり

太田 昭

幼い子供らの遊び声が聞こえてくると、隣組が活気を帯びる。ときには私道に広がり、色とりどりのチョークで道一杯に楽書をしている。母親たちの「汚くしまして」に僕は言う。「道は子供の遊び場ですよ」と。

老人の街は静かな上に昭さんのいう通り日没が早い。今号、高田振作さんも読んでいる。「孫が来ぬ午後は寝るしかない夫婦」

町内会はみんな年金暮し

星野 育子

僕が子供だった頃、町なかに老人の姿は少なく、町内会にもぽつぽつとしかいなかった。ところが、一村ことごとく年金暮しもあり得る老人大国になった。すると、素敵に老いるか、醜く老いるか、のどちらかに傾く。

素敵に老いる方法は一つでしかない。文化的な刺激を異性も交じわる人間同士の交流で受け続けているかどうかに尽きる。

春を待つ雨花柄の傘をさす

木本 朱夏

文化的な場に身を置いて育つのはおしゃれのセンスである。雨が降ったら万人が傘をさす。そのとき、どんな柄の傘をさすかが文化のセンスだ。まして春を待つ雨ならば朱夏さんのように花柄を選ぼう。

淡谷のり子は「雨のブルース」でへあゝかえり来ぬ心の青空　すすり泣く夜の雨よ」と歌った。青空の人生もあれば、雨の苦節もある。雨を眺め、ブルースに沈むか、素敵な傘をさして街へ出るか。僕は後者をお奨めする。

クラス会に蟹など出すな喋れない

高田 振作

フランス料理に蟹は出てくるのであろうか。どう考えても食べるマナーに蟹はそぐわない。黙々と足をつつき、身をせせり出す。そんな仕草の、なんと卑しいことか。

パーティーが会話を楽しむように、クラス会も旧交を温め、昔を懐かしむのである。そんな場に蟹料理を選ぶセンス、出す不心得が問われる。昔、エリザベス・テイラーがパーティー会場から救急車で運ばれた。鶏の骨が喉にささったのだ。下品な女性だったと思う。

世の中のあらゆることはすでにある

春木 圭一郎

年を取ると、いいことが一杯ある。思い出を蓄えていることだ。愉快に暮すには楽しかった記憶を甦らす。辛いときは苦しかった経験を生かす。フランスの浪漫詩人―シャルル・ド・ヴィニイは「旅行」でこう読んだ。

「いかなる土地が私を驚かすに足るほど眼新しいだろう。私の思想があらかじめ描き出すことのできないようないかなる国が存在するか」。圭一郎さんも一杯生きていた。

この橋は落ちると雪に言ったのに

小野 句多留

別の視点で見ると、事態は当り前でなくなる。女性ばかりがなぜトイレで長い列をつくるのか。男がトイレを設計するからだ。明けない夜はない。が、また夜がくる。

橋は雪の重さで落ちる。落ちた橋を被害者と見るのは常識的な視点である。句多留さんは逆から見る。雪は春の雪解けまで橋の上で長生きしたかったのに、橋の警告を聞かなかったばかりに、という逆の観点の面白さだ。

〈前号の誤植〉一段目「ぬかるみちぞ」は「ぬかるみぞ」「さいげつ」は「歳月」です。

（『上方芸能』誌発行人）

自選集

前へ前へ満身創痍ではあるが
いつからか書斎は森になっている
孫の手が私も離せなくなった
絶好調と言わなくなってから久し
ライトアップの桜は散ることが出来ぬ

小島蘭幸

老いぼれたけれど想定内である
逆立ちをしても神さま見当らず
海賊も山賊もいる飲み仲間
居酒屋の椅子ではいつも昇り龍
長安の都が胸の底にある

新家完司

幸せな家だ緑の風が吹く
いい知恵が生まれて来ない禿げた脳
弁舌につい騙される小さな欲
いい事があるからついてくる若さ
辛抱が出来ない長い髪形

恒松叮紅

満開へ気力体力背を押す
そこそこに生きて提供する臓器
春おぼろ忘れ物だけ増えつづけ
セシウムを知らずに跳ねる高級魚
達磨さん並べ試練に立ち向う

津守柳伸

かくしゃくと米寿家系を狂わせる
大志抱くにしては少ないお賽銭
立候補酒の肴に聞いてくれ
奥さんの笑顔に野心支えられ
これからを磨く元手が入れてある

遠山可住

神戸から春を連れてきた釘煮
清盛ツアーに判官贔屓がわんさ
まだ使いみちあるらし消去法から漏れる
影法師も酔ってるらしい朧月
もの言わぬようになってきた妻の指

都倉求芽

国を愛するこの青空がある限り
カーナビに案内されて北へ行く
病院の東南東に虎落笛
すこしずつ菩薩になってゆく命
活断層の上でのん気に住んでいる

土橋螢

なるようになって私の今がある
なにもかも許せと雨足の激し

西出楓楽

思ひ出と書くとセピアになる視界
企みがあるので黒を金という
胸底に実の成らぬ花ばかり咲く

仁部四郎

てにをはが完全なのは勅語だけ
てにをはのズレに夫婦の演技賞
てにをはで招いた誤解に便乗し
てにをはを直され嘘を見すかされ
てにをはの一字でいつも二等賞

波多野五楽庵

大根が一本残る冬の風
妻病んで桔梗も萩も雨ざらし
窓一枚おぼろおぼろの月夜にて
きさらぎの白さに敗けた立ちくらみ
月も星も見えない街で病んでいる

林瑞枝

顧客とのルーツ辿れば雨が縁
夢はるか地球儀まわし空の旅
駆け足の人生何時のまにかと笑う
情緒なく奈良も京都もカーラッシュ
控え目な愛かな月にあるロマン

花便り母校の庭に辿りつく
気力には付いて行けない影法師
この歳でやっとプライド捨てました
高ぶりを神の試練に諭される
人の世や聖歌で集う花見あり

前たもつ

好きな人と都の隅で生きている
行くことも住むこともない東京都
ビードロに私の夢も入れて吹く
ガラスに写る私を見ないことにした
カットバン人差し指にばかり貼る

政岡未延子

その長さ太さに意味のある十指
村議会で挑戦議決したギネス
生きるとや何度脱輪したことか
一切の空にゆだねている命
木の香り消えてもローンまだ残り

三宅保州

山いくつ極めた老母のまるい顔
横道を選んだ筈でない茨
ハンガーに光った日日のあるスーツ
肉身の重さ軽さも見た突然
菜の花の海で現実美化をする

宮西弥生

ぼんのくぼ

八木千代

かたくなにつむじは右に巻きたがる
シンプルに生きようとする眉がしら
ぼんのくぼのあたりは父にその母に
ひんやりとうなじに微かなる気配
ほとけからの文かも待たせ過ぎたかも

八十田洞庵

土に生きる顔老醜を思わせず
名優の名前も出ない歳となり
見えて来ぬ神だ大きく鈴を振る
地球儀を回せば火種ありすぎる
見はるかす暮色ひそかに喝采す

両川洋々

惜しまれて散ろうサクラもわたくしも
ワンマンの椅子も疲れて来た日暮れ
もがいても僕の首だけ売れ残り
罰金じゃ済まない北の拉致である
補助金のカット聖域など要らぬ

河井庸佑

どちらとも読める言葉で困らせる
生真面目な人で狡さが許せない
身の丈に合った暮しと甘んずる
内緒ごと知って気苦労また増える
爽やかな目醒め幸噛みしめる

川上大輪

半音を下げてのんびり生きている
花便り友の訃報を連れてくる
薄味は苦手で毒をひと抓み
消去法誰も消したくないのだが
グーチュキパーどの手もみんな欲がある

木村あきら

天気晴朗上昇気流待っている
節水の宣伝カーのゆく暑さ
老人の砦の攻める低金利
酒タバコ呑んで長生きするつもり（98歳）
南風が来て椰子がハルバル泳ぎ着く

小西雄々

サイドミラーの中の大山今日は晴れ
波の乗る鴎は自由信じたい
除染して運動場も元気出る
自分史を書く善人の顔をして
沈丁花強気わすれず人を待つ

斉藤劦

父に似た羅漢何かを言いたげに
労わりのことばに泣けてくる弔詞
春うらら音符流れてくる小川
震災の子等へ気配る蜜りんご
種を選る数だけ祈り深くなる

見る人はなくても健気野のすみれ
腕組んだ影がとっても淋しそう
影踏みを笑って見てる盆の月
親の目には五十歳でもまだ子供
生かされてさくら色にもグレーにも

奥田　みつ子

長生きの秘訣空気を食べている
ゴキブリが勇気をくれた大津波
遠くから見てもキレイな母でした
ねずみ捕り買いに出かけて帰らない
半世紀前から暮らすひとが居る

板尾　岳人

長生きし孫の結婚見届けた
大阪に川柳図書館作りたい
羽曳野に癒しの殿堂作ります
幸せな椅子は美女のヒップ乗せ
スタッフは女ざかりの美女ばかり

塩満　敏

エッセー募集

一行　18字　65行
原稿の採否は編集部に一任願います。

温故知新

『清水白柳遺句集』より

イメージと違う本物やってくる
巫女一人人身御供のように居る
閑のある奴だと思うほととぎす
麦踏んで帰って来たにまだ寝てる
ひげのある先祖が見える応接間
咳払いニュース一と言聞きもらし
六三三四学制に似た家を借る
良い政治待つ七夕の笹しおれ
紙風船のむらさき色も過去のもの
こんな玉ころがすだけにあるルール
慰霊碑へ無言のままの母と子と
忘却の石段となる夜を降りる
小さい餅グラムで買うて味気なし
トラクター嫁の免許が役に立ち
大阪市南区今は蚊帳が要り
香典のことで別室もめている
待つ人があって駅前ひろすぎる
朝の陽を待たず場末は動き初め

川上大輪選

もう少し小さな夢を見させてね
無口ですとても頑固な伴侶です
年をとる　楽しいこともあるらしい
ほんのりと菜の花苦く　あすは雨
こだわりなんてなにもない生ビール
真っ直ぐにみつめてくれてありがとう

三田市　上田ひとみ

いつからか故郷行きのレール錆び
口実の傘を一本置いてくる
フルネームで呼ばれて恋が遠くなる
行くあてのない風船の手を離す
年金の都合に寿命合わすのか
縁あって結んだ糸にほだされる

高槻市　田中由美子

電卓を叩くと赤字増えていく
果てるのはどちら寿命と蓄えと
夜の雨きいて行火を引き寄せる

紀の川市　辻内次根

冷蔵庫閉じて開いて決まらない
考えて考えぬいてカップ麺
寝返りをうって明日に切り替える

岡山市　工藤千代子

広告の裏のエリアにある自由
あの時のわたしを消していいですか
カーテンも変えたし靴も磨いたし
苺パフェ軽めの恋に誘われる
鉛筆を削り時空へ潜り込む
イントロが長くて味噌汁が冷える

和歌山県　小川イセ

過去は過去これから咲かす彩を選る
幸せは明日の予定組めること
躓いて悟る小石のしたたかさ
追伸の母のひらがな温かい
温故知新とても大事な父のメモ
もつれ糸気長に解いてくれた母

古里の絵をモノクロで描いている
癒し博温い言葉が出迎える
脱藩の道で龍馬の風に触れ
父の根気を仕事の鬼と呼んでいる
糸口をつかむと心見えてくる
心急く思い通りにならぬ足

大洲市　花岡順子

就活の春まだ浅き孫思う
競り勝った椅子に孤独が付きまとう
軸足を決めてまだ役立つつもり
老いふたり少しはしゃいで雪見酒
上向いて思い出せずに下を向き
喜寿からは夢と命の根比べ

阿波市　三浦千津子

軽い嘘とがった席を和ませる
一日を反省ばかり夜の鏡
来年も欠けず会いたし花の下
吹っ切れたあたりで軽くなった靴
目も耳も加齢のせいにされて雨
気紛れな人だがなぜか温かい

岡山市　藤成操江

重箱の隅の噂を片付ける
まだ迷う愛にピリオド打つ位置を
天辺の風が欲しくて手を繋ぐ

富田林市　山野寿之

同感の顔して謀叛起す風
深読みをし過ぎて本音聞き洩らす
生き様は加減乗除に愛を足す

寝屋川市　岡本勲

ほれぼれするほど化け方うまいおばあちゃん
喜怒哀楽をそっと届けるポストマン
蛇口からポトリポトリと妻の愚痴
ダイエットすな　お前は今が一番や
自分史の紆余曲折に悔い残る
とぼけてるようで胸刺す父の喝

神戸市　新保登美子

納得の値段で打った舌鼓
潮時を飴転がせて待っている
ペンの字も踊り元気という便り
思い出し笑いこらえている窓辺
あら不思議魔法のような物忘れ
ハイチーズみんな揃った通夜の席

神戸市　玄番美恵子

成り行きに任せて明日の風に乗る
雑踏の中で孤独の立ち泳ぎ
不景気にあきれる程の夢を買う
この勝負譲って明日の風を読む
美しい花の根っ子にある悩み
見上げれば満天の星夢無限

横浜市　川島良子

桜舞う夫の退院日が決まる
病人と思って許すことにする
ひと言で積木一気に崩れだす
少しだけ息を抜いてもいいですか
真面目ですだから心配しています

相模原市　赤木妙子

梅桜開花待ってるランドセル
遠回りして花屋で春の息吹き聴く
咲く花を描き種蒔くプランター
会釈すれば笑顔がかえる花の下
両手に包む友の便りが温かい

奈良市　大久保真澄

割り勘の時は仲間にされる下戸
深呼吸いいえ溜め息ついただけ
私だって心が揺れる甘い水
食欲と座高はヨメに勝っている
遺された方の都合で家族葬

奈良県　谷川憲

目論見が外れた悪夢見る期末
駄菓子屋の当たりで読んだカバ文庫
滑舌がだんだん悪くなる老化
記念日を忘れたふりの恍け顔
口滑る軽い言葉の政治ショー

和歌山市　北原昭枝

座布団をそっとななめに聞く話
能弁な理屈なんかはもうあきる
生半可だったら言わぬ方がいい
躓いた坂で力を貰った日
本当のことは言えずに苦笑い

紀の川市　楠原富子

まわり道決して無駄と思わない
気くばりの人生だった母の背
アップダウンの暮しもあった現在地
許し合い夫婦の絆深くなる
何食わぬ顔のうしろにある秘密

鳥取市　松原ひとみ

鈍行に内緒の話せきを切る
父臥して母の強さを思い知る
帰りたい父の願いが漏れる窓
嬉しさをかけ算にする花束よ
子が巣立ちぽかんと家に穴があく

倉吉市　前田喜美子

春よはる待ってざわめく変な虫
地球に和探しあぐねていがみ合う
年ごとに音沙汰のない友思う
めくるページ睡魔がおそう硬い本
遊び心持って百歳たぐりよせ

保険屋が年を言ったらさようなら
丸い爪器用貧乏亡父に似る
同窓会春のおしらせ出席だ
お買物閉店間近かデパ地下で
我が家にもなでしこ四人ビール飲む

米子市　小塩智加恵

病院の待合椅子に眠りこけ
ひもじさも腹いっぱいも知る昭和
Bグルメ心底好きな年金者
一族の系図肴に一回忌
やれやれと愚痴こぼしても仕事好き

米子市　生田寒之

真剣に遊ぶと決めたパチンコ屋
まだ若い見た目気にする欲がある
贅沢を乗せた天秤つり合わず
ネギ貰う土のにおいがする人に
負け続け敵にもならず生き残る

米子市　湯浅久司

ポイントのところ大阪弁で言う
頑固という軸をたよりに生きていく
甘やかす競争をするじいとばあ
早い者勝ちで決った形見分け
携帯と電車の中でにらめっこ

米子市　後藤宏之

姑の座で忘れた振りもして生きる
あの世にも境界線があるやろか
八十路来て夫の偉大さやっと知る
財産は健康ですと言った姉
嫁さんと仲良くするも金がいる

鳥取県　下田茂登子

喜寿までを共に歩んだ歯をみがく
褒め言葉どんな薬もかなわない
畳紙開ければ昔語り出す
いつまでも自分らしさを重ねたい
花の下思い出してる風のいろ

松江市　山根邦代

大切な毬でも一度蹴ってみる
束の間の幸せ口に蓬餅
三日月の背の丸味がいとおしい
絆とは嬉しくそしてわずらわし
記憶力試す日記は三日前

雲南市　武島ちよえ

妻と観る映画半分船を漕ぎ
風見鶏不本意ながら拍手して
ファッションも時流も読めず風に聞く
流行語みたいに絆問う件
誉められて眼鏡の顔も好きになる

岡山市　永見心咲

後難を恐れ見ぬ振り聞かぬ振り
口数が減って増えてく物忘れ
戦力にならない雑魚が良く騒ぐ
忘れるという生きていく術もある
コンクリのすきまの花に励まされ

宇部市　高山清子

ひょっとこの顔してガラス拭き終える
盛りあげた欲を残したバイキング
弁解をする程刺さる疑惑の目
折りたたみ出来ない妻の足を揉む
主婦の座を守り通して枯れてゆく

北九州市　岡田幸生

効いたらの話分け目は七三に
照れるとこ心配性が長所です
異次元の人と思えば腹立たず
目力にネコも思わず目をそらす
花びらと共に散っていく憂鬱

山鹿市　米加田恭代

三日坊主で辞める禁煙誓わない
酒呑みはもうこりごりと妻の言
ワンコインで申し訳ない義援金
舐めれば癒える程でよかった恋の傷
老人会病とお寺往き来する

四国中央市　篠原久

さみしがりの君の話にのりました
関心があるので裏もお見せする
縁あってあなたの色に染まります
男っぷりああどうしよう倒れそう
お片づけに行ってそのまま夫婦です

大阪市　柴本ばっは

注目を浴びてる時は元気出る
朝目覚め両手両足試運転
お金では救えないよと老婆心
春陽浴び猫といっしょに大あくび
両方の目で遠近を見きわめる

堺市　近藤治子

トイレまで監視カメラが追ってくる
絨毯の下に畳を眠らせる
割り勘に食べ過ぎたりはしない齢
ごまかしの言い訳うふふと返される
螢飛ぶ川を夢見て拾うゴミ

池田市　上山堅坊

土用干したとう紙あけて母偲ぶ
嘘でもいい死ぬほど好きや言われたい
初孫に両家が競う宮参り
優しいとすぐに信じる老いの耳
おそまつな土産ですがとエビとカニ

泉大津市　助川和美

河内長野市　梶原弘光

入院中更新続く休肝日（腰手術入院）
お互いにいびきをぼやく四人部屋
日だまりに集う歩行器車椅子
快方に向かい院内パトロール
親切にされて病院依存症

河内長野市　木見谷孝代

楽天家済んだことだと取り合わず
落胆をそっとなぐさめほぐす花
たわいない話がはずむ花の下
行き詰まる心を本に救われる
お互いの遊びに夫婦立ち入らず

河内長野市　谷久美子

和菓子屋の貼り紙ひらり桜餅
言い訳を聞いてるうちに出る欠伸
病抜けしても薬は放せない
エンピツが滑らないから不貞寝する
期待され肩にどっかりプレッシャー

豊中市　貝塚正子

意地になりチビた鉛筆まだ削る
生命線とぎれとぎれで生きつづけ
とりあえず聞いておこうか質問は
日に一ツ何か出来たら二重丸
ハテどこに忘れぬように書いたメモ

富田林市　関よしみ

イースト菌今日も憧れ膨らます
太陽の香りほがらかプチトマト
道尋ねもっと聞きたい京言葉
ポンプアップして汲み上げたのは愛
明日咲く事決めている百合の花

八尾市　山根妙子

花冷えにコートで迷う出かけ際
とび入りの予定書き込む花見どき
春休みお財布持ちのじいとばあ
満月も参加している花の宴
早や秋の句会の知らせ届く春

八尾市　田邊浩三

待ってます除染すむまで寒桜
平和の鳩もマンションからは追い出され
車椅子ひざに花弁通り抜け
新聞の悲鳴聞える広告量
ウォーキング道を譲らぬ散歩犬

大阪市　神野千恵子

雛祭り今年は硬い風が吹き
春風がくしゃみを連れてやってくる
旬野菜食べてたべてと顔を出し
お茶席でしびれた足の置き所
国会で飛び交っている的外れ

春爆弾夕の町並み容赦なく
豌豆も律儀につかむ藁の先
大雨に球児池へとすべり込む
競い咲く香る王者の花吹雪
颯爽とスタートします新入社

大阪府　西川冷子

退院は光って見えるなにもかも
スランプに初志貫徹で立ち上がる
でこぼこな近道はもう遠慮する
ご婦人と会う日は身なり念入りに
そのことをパパ遺言に書いといて

神戸市　木村忠義

重い腰あげてでかけた父の意地
優しさにやっと開いた重い口
腹据えて相手の出方待つゆとり
見え透いた嘘で固めたほめ上手
子に残す生きた証の川柳誌

神戸市　山根弘子

ほいほいと誘いにのってくださった
一線を画す愛などいりませぬ
線上に並んでいますわたくしも
ちっぽけな野心ですねと風がいう
入道雲はきっと野心家なのだろう

篠山市　酒井真由

つまずいてまたつまずいて八十路なり
喜んでいいのか席を譲られて
さまざまな過去を知ってる日記帳
捨て切れぬ夢を追いつつ八十路まで
手の皺もわたしの生きた証です

篠山市　石田久子

意気込みをリュックにつめて花の土手
まだ少し生きたく買った靴と傘
楢山のみやげ食べたりつつんだり
恙なく暮れて一人のライスカレー
子から孫曾孫三人見て元気

篠山市　谷田多美子

待つ人も去る人も居る花時計
展望も値段のうちという料理
途切れたら妻の鼾も気にかかり
コツコツと響けば美人かと思う
知る人が彼岸に多くなってきた

宝塚市　丸山孔一

お月さまも混浴なさる露天風呂
プレートを鎮めてほしい海の神
親密度増して浮かれているハガキ
ほめてからやんわり叱るのど仏
死ぬまでに悪いところはみな治す

西宮市　泉水冴子

後5分遅ければ土砂降りの中
夢に挑む程がむしゃらに生きてない
腐れ縁波風立てて未だ仲間
それぞれの効き目一気に飲む薬

シドニー　坂上のり子

ストレスかまだまだ続く長電話
話し中妻は携帯離せない
孫流す三代揃う温泉場
甲子園あの土は今どうしてる

弘前市　高森一呑

ぽんぽんと跳べなくなった水たまり
妻にまで報連相のクセがつき
この頃はあやつるはずが操られ
自分史のところどころに仮定法

塩竈市　木田比呂朗

ベランダのたばこにむせる影法師
どくだみの花の白さにある矜持
じわじわと私を解いてゆく書簡
モノクロの記憶が戻る巡り合い

富山市　有澤嘉晃

再婚の方は恥ずかしそうもなく
消費税我が家も多額納税者
米買って食う身になった小地主
読まぬ本ばかり並べて言う理屈

佐渡市　髙野不二

春が来てお弁当箱出番なし
末っ子もやがて来るのか反抗期
悪い事プラス思考で星3つ
新学期どの一年も初々しい

東京都　髙岡弥生

好物の妻の手料理酒とろり
蟹料理出れば論争ピタリ止み
銀シャリに卵かけする妻の留守
スーパーの卵とバナナ安すぎる

東京都　井上つよし

親切を素直に受けぬ天の邪鬼
ちぐはぐな形いろどる人模様
わが子には辛い言葉の親心
怖ろしい保存技術で生物が

東京都　大竹一良

幇間雑踏をよく通り抜け
悪ふざけ真意が届かない悲劇
新聞は死亡欄から読み始め
幸せのハードル低く志は高く

東京都　岸愛三

場所取りをそっと見つめている桜
満開が奥千本へ駆け上がる
もう見頃早く帰れと里の母
追伸でやはりダメだと釘をさす

昭島市　野口忠

必要とされてるうちは腕まくり
旅仕度薬の束の多きこと
三文の得だが四時は早過ぎる
怒りたい泣きたいけれど笑ってる

横浜市　巖田かず枝

枯れたままがみついてる花はいや
それにしてもしっかり婆さん顔になる
小編物仕上る事が老いの幸
十八の頃思い出す八分咲き

静岡市　渡辺芳子

北育ちでもこの春は寒過ぎて
八十路過ぎまだ世を嘆く同期会
わらべ唄叙情を唄う会楽し
花火よしこだまの余韻また楽し

熱海市　三谷圭角

三分咲き待ったがかかる春嵐
富士登山一歩一歩に活いれる
気づいてくれ送るサインのもどかしさ
看護師の笑顔に元気取りもどす

江南市　脇田雅美

微笑みの遺影囲んで午後のお茶
肩書を脱いで心の友を知る
定年の駅鈍行に乗り換える
食べ喋るひとつの口がよく動く

岐阜市　平野あずま

買物のメモ書き探す品いずこ
スーパーのレジでまたないニッケル貨
冷やす間を惜しんで悔いたぬるビール
桜見てまた会えるかと問う患者

愛知県　樺嶺志

親ごころ宅急便で届けられ
追従の弔辞に遺影笑いだす
不燃性の愛に変えてく倦怠期
がらくたに疎開をさせる不意の客

豊橋市　藤田千休

震災一年ただ前進のほかはない
起震車の比ではなかろう震度7
末席で目光らせ耳立てている
食事会にいそいそと行く妻を妬く

京都市　清水英旺

いい風が撲っていく旅ごころ
春ですよ靴ピカピカに拭いておく
被写体が決まった　レンズ拭き直す
余白から父の達者がにじみ出る

八幡市　今井万紗子

店先にダイエット本夏が来る
差し当たり趣味もないのでボランティア
ゴキブリが出たぞ母さん出番だぞ
不況下に家族団欒やたら増え

大阪市　髙杉力

携帯のマナー悪さに慣れてきた
運転はしないゴールド免許証
スマホには遅れないぞと見得を張る
流れ星まるで宇宙の運動会

大阪市　松田　聰

年金が無くなる話ザワザワと
老けました七十年の風受けて
不況でも風呂は入るし歯も磨く
善悪が顔に出るから鏡見る

大阪市　太田としお

空堀を通るとはいる古本屋
風船が枯れ木に咲いておもろいで
帰り道雀轉り孫ハモる
烏来て低空飛行のヒッチコック

大阪市　安田由美子

実演の言葉懐かし今ライブ
もうええと保険が出ない八十歳
ミュージック早よやれ話もうええわ
ライトアップ桜ねむいと言うてます

大阪市　平井露芳

苦労した亡母思いつ今を生き
酒の様で酒でない酒売れている
出来なかった親孝行へ悔い残し
野田政府前後左右に壁があり

大阪市　前川善之

ペンネームそれぞれ大志持っている
美人より愛嬌を売るコマーシャル
犬猫のカラフルな餌美味しそう
近頃のペット残飯など食べぬ

大阪市　吉田知之

久し振り古き友来て若返り
勇気ある一石投じ見直され
子の願いこれがラストと甘い親
振返り私の道もまあまあか

大阪市　阿野寿美子

近頃は歯ブラシ噛んで妄想す
一生を骨だけ遺し逝く人も
空咳をガンだと思う恐ろしさ
目に見えぬ棘に責められ春に哭く

大阪市　梅里南天

歳とれば全て半分ありがたい
老いた脳しっかりメモで助けよう
目的の半分だけで疲れきる
暇が無いとさっさと決める智慧も無い

大阪市　浅井公平

愛してる言えないままに見る桜
やさしさでウソをつくにも要る勇気
我重さ耐えてる足をいたわろう
後ずさり いいえ飛躍の助走です

大阪市　安藤なつこ

国会は大山鳴動消費税
春寒く恥ずかしそうに桜咲く
渡り鳥原発恐れず飛んできて
アベコベや送る検事が刑務所へ

堺市　増田和幸

見え透いた反省語る謝罪劇
方角をつい見失う地下の街
追伸へ一言本音覗かせる
試みに始めた趣味へはまり込み

堺市　羽田野洋介

花大根教えて兄は認知症
あきらめるいつか着ようと三十年
悪い事必ず当たる処世訓
ストレスがたまったままで医院出る

池田市　多田契子

送辞にも答辞も明日の二字がある
許されよブレも悩みもある歳で
転んだのもう数えない何回目
確率のたった一分に賽を振る

泉佐野市　稲葉洋

一日を桜さくらで日が沈む
僕の子を見るまで生きや孫の言
換気扇わが家の夕餉ノラを呼ぶ
袴を脱げば友達寄って来る

貝塚市　石田ひろ子

三代目看板背負う頼もしさ
石ころの弾みに泣いた膝小僧
合格の発表聞くと要るお金
表札は仲良く暮らす独り者

河内長野市　山本エミ

採算と意地がぶつかる頑固爺
先代の写真がにらむ町工場
頑張れとリュックの鈴がうしろから
減量のためにわざわざ遠まわり

河内長野市　松岡篤

言い訳のアレコレまとめ正当化
食べて寝て落とすと決める皮下脂肪
紅をさし通院祖母の身だしなみ
妻の留守のびのびするが落ち着かず

河内長野市　辻村ヒロ

飽きもせず孫の写真にルーペあて
今の歌クチパクでさえ舌縺れ
脳トレに脳より眉間の皺が増え
役員に目を掛けられて鞄持ち

河内長野市　藤塚克三

人生を苦楽の糸が織り上げる
とりあえず分かりましたと言っておく
荷を降ろし一息つけば次の山
求人は看護師介護葬儀社か

河内長野市　穂口正子

映画館座席は非常口の傍
我が遺影どれにするかと通夜帰り
栄転の引越し子等は喜ばぬ
シャッター街これから先を思いやる

岸和田市　増田隆昭

花束も脈打っている発表会
気まぐれの一病宥め万歩計
モチーフの一つになって耐える日々
億ションに住む生意気なペルシャ猫

岸和田市　中岡香代

終電車入定したる人多し
棒となり立ちつくしていて昼静か
感情を殺してかぶる笑い顔
壊れてる心のままにぎくしゃくと

豊中市　石橋優明

春なのに花粉が阻む深呼吸
春日受け埃もきらり光り出す
喜寿迎え春の花芽と競い合う
脱ぎ捨てたズボンの膝も曲がりいて

豊中市　荒巻夢

春なのに浮き立つ気分まだ茶
妻の愚痴ロボット犬に聞かせてる
道草にちょっとの迷路ダイエット
ひいき目で鏡の中の試着室

豊中市　西村康子

だまされる気配もなくて四月馬鹿
仏も鬼も車座で飲む娑婆の味
旅は好きけれど仏滅待ったかけ
失言をチャッカリ塞ぐ柄マスク

寝屋川市　小谷滋彦

聴き洩らし待つ鶯のそれっきり
若葉寒む三歩進んで二歩下がり
春雷の怖さヘルパーさんと手を握り
太り過ぎ医師の言うこと聞かぬから

羽曳野市　安本美喜

春来たが値上げ値上げの風が舞う
税の道不退転とは誰のため
祖に学ぶ聴く耳八分口は二分
通販が紙面を占める時代なり

羽曳野市　磯本洋一

写真撮る気分にさせる孫の顔
欲のある内は元気で張りがある
これからの事は成り行き古稀の坂
ガソリンが高くて車庫で欠伸する

東大阪市　西田いくひろ

地図友に出逢い求めて旅をする
近道と歩いた先が行き止まり
春なのに鼻水マスク離せない
テレショップあれもこれもと欲しくなり

枚方市　河田洋子

出番だが黄門様が消えて行く
格差知る雑踏の中の孤独な目
ガレキ見て宝の山に変える知恵
コマーシャル早く消すなよ注意書

枚方市　松原保

言い勝っても明日に謝る勇気出す
歳月を噛みしめ生きる家族愛
おぼろ月さくらに恋いて雲がくれ
夜の悪夢みんな忘れて今朝の風

枚方市　坂本ミヨノ

日曜は寝るか遊ぶか考える
一日も無駄には出来ぬマイライフ
散髪で自分の話題出してみる
一人旅が心の疲れ治してる

松原市　市川雄太

かかあ天下尻に敷かれて波立てず
さしすせそ単身赴任役に立て
ハイハイと従う気などありません
やり残しまた翌年へ先送り

箕面市　寺井柳童

けしからぬ私にジャンボ当たらない
悪筆でも心をこめて書いてます
無理やりに納得させて友が去る
春蘭がおじぎしている狭い庭

箕面市　酒井紀子

五分咲きも花より団子気にしない
年金が崩れ人生生き迷う
無農薬蛞蝓付けて御裾分け
被災地は待ったなしです此の不況

八尾市　前田紀雄

おらが世と土を割る草畑の声
通販の服がタンスであくびする
手作りを褒めあい老いの生き上手
食卓の菜花鮎子(いかなご)春の色

大阪府　畑中節子

年金でうまく泳いで生きる老い
もう最後言いつつ何度出掛けたか
出掛けたら知人恩顧に出会う幸
花の名も頭素通りカタカナ語

大阪府　小栢こずえ

一寸気取って正装孫の婚
式場の広さへ往き交う皆笑顔
はじめましての顔もいっぱい胸いっぱい
新郎新婦ほやほやいとおしさ

大阪府　坂口公子

春風の指揮棒逸れた春嵐
過去形の話に夢中根が生える
おしゃべりに暇を告げる大欠伸
ヨーイヤサ都踊りのホイッスル

大阪府　高木道子

花よ花よ流雛に咲かせこころざし
急がねば日本のその後暮れ泥む
枯木立まだ咲かせると同期会
難文字と取っ組み合いの編集日

神戸市　長川哲夫

孤独でもメル友がいる挫けない
洗い音妻の機嫌のカウンター
少しだけ飾る言葉で和みます
志三日もすれば風にのる

神戸市　輿水弘

プラス志向お日さま味方してくれる
泣いている自分に酔って見るドラマ
ケイタイの中に隠している味方
運命が片目つむった曲り角

神戸市　白川淑子

絵日記に書く事ないと児がねだる
物忘れひどい老母に叱られる
数式を愛した姑に誰も似ず
靴音で新婚さんはドアを開け

神戸市　能勢利子

腹の地図過去の悪路が黒じみて
家こけて昔の人はもどらない
もたれ合う幸せもある古い町
遺伝子に忍耐の字のうすれゆき

神戸市　大島まさる

スランプを抜ける気がする春の海
深ぶかと前非を悔いて墓参り
棘ひとつ刺して許さぬバラの意地
山ほどの苦労だろうに子に言わぬ

尼崎市　田原一兆

シニア割りスッと買えるもいと淋し
助け合いぼちぼち行こかなあお前
生命線短いけども早や傘寿
先生が死んでも続くクラス会

尼崎市　市坪武臣

入試終え一家に戻る平和な日
独居風呂ちょっと不安な突然死
そこここの部品補修に医者通い
厳冬を今年も越えた長かった

尼崎市　小池幸子

誘われて会話も弾むモーニング
快復を願い散歩はかかせない
生える草負けてはならぬ畑仕事
台風なみテレビあっさり告げるだけ

加東市　黒崎美紗子

有り余るひまに愚痴言う膝小僧
君子蘭うれしい花芽覗かせる
娘の街へ本も絵具も連れて往く
車椅子娘が押しくれるさくら路

加東市　岩本美緒子

地蔵さん無理な願いと微笑んで
交わりはお医者で会った人ばかり
また一つ趣味を減らして身をかばう
もう来たか聞くと遠のく春の音

加東市　安達　厚

ふところに金はなくても花見かな
菜の花に酔ったふりして生返事
余白なし足らざるもなしただ生きる
足らぬのはお金でなくて知恵袋

川西市　日野岡和之

感謝する寄付する側であることを
ユニフォーム汚れて予選突破する
自分史に汚れたところ書いてない
触れようか悪い匂いのする女

川西市　山口不動

言うまいと思っていても愚痴がでて
クラス会お前の元気くれという
終点のない趣味だから生きられる
若い気でいるのに歳を聞く人が

篠山市　北澤稠民

くぎ煮つく友のやさしさ身にしみる
老人会道行く桜七分咲き
潮風とユーモア船長楽し旅
今日の旅おさそいうけて感謝の日

篠山市　永井かほる

感性が少し違って生きづらい
蛇になって時の移ろい見届けん
キムタクであるならウィンクやってみる
ほろ酔いのぶらぶら歩き趣味と書く

篠山市　酒井健二

その声を聞いて安堵の電話口
愛犬の尻尾の振りは何だろう
物真似に美人の口が開いたまま
入選を探しています流し読み

篠山市　佐々木勇

消したいねいじめと言う語この世から
七十の野心中火で燃やします
百歳へ何でも許そうお元気で
お茶すすり今日の暮らし省みる

篠山市　藤井美智子

スカイツリーあなたの星が近くなる
蛇行して人も山河も歴史積む
秘めた闘志選手宣誓煮えたぎる
生きるためカバン一つがはなせない

三田市　尾﨑一子

古希近い夫のリズムもそれなりに
春休み孫が顔見せ吹く嵐
ストレスを過食で飛ばしなくメタボ
良いとこも悪いとこもある夫婦です

三田市　辻　開子

三田市　雑賀一泉

巣づくりの鳥に遠慮の迂回道
お雛さん十二単のウォームビズ
花見席ダンゴと酒のこぜり合い
連休も他人ごととなり孫の守り

西宮市　株元玲子

誘われてホイホイと乗る春うらら
春風に逢いに飛び出すカメラ虫
老木に見つけた芽吹き感無量
今尋ねたこと忘れてしまう術

宝塚市　生駒利明

古希になり振り向き見れば夢のあと
水音に春の息吹きを感じ取る
籠の鳥放たれ行場見失う
昔人の想いひとしお今わかる

三木市　山口久子

苦労なき楽しく生きる八十路です
長風呂にいねむりしかけどなり声
ボケ防止声高らかに歌うかな
七転八起の友は社長さん

奈良市　矢野良一

いやな予感妻がゆっくり喋り出す
同窓会長さを競う手術痕
ウォーキング黄砂まじりの風の中
階段の下りが怖い歳かいな

奈良市　尾畑なを江

姉妹でも愚痴は言うまいこぼすまい
コマーシャルその間トイレ猫にエサ
早起きも遅起きもして春うらら
年度末荒れた天気と日本丸

奈良市　前田弘恵

正論を説けば若者煙たがり
なに着よか三寒四温惑わされ
髷取れば元のしこ名が出てこない
温度の差つくしんぼうが迷ってる

和歌山市　磯部義雄

何回も仮病使ったツケがくる
引退をした鯉のぼり谷渡り
セシウムへ立ち向ってるカタツムリ
百歳の母と筆談する至福

和歌山市　坂部かずみ

押入れに言訳多いひなまつり
メールなしみんな元気と信じよう
宅配も小さくなって古稀の春
ラブレター毎月送る花野ビル

岩出市　村中悦男

春嵐に新調傘を持ち去られ
暖房具邪魔になる日がやって来た
声落し昔の名前で来る電話
花吹雪演歌に合わせているように

人生は一日一日（ひとひひとひ）の数え唄
米寿まで三百六十五のマーチ
老夫婦支え合うことしか出来ず
天命を負うて世相について行く

田辺市　大峠可動

三寒四温春が時々かくれんぼ
トイレか風呂に入ってるときくる電話
反論をしたいが頭まわらない
しがらみが支えてくれた今がある

和歌山県　森下よりこ

節電と健康維持に散歩する
意気消沈を鞭で打つのも神の慈悲
人生は苦労してこそ花が咲く
困りごと有れば亡夫の恩を知る

鳥取市　山口千代子

贅沢にお陽様背負い土筆摘む
それぞれの好物作り墓参り
団子より酒がいいよねお亡兄さん
白黒団子碁石替りだ亡弟よ

鳥取市　津村律子

教わった技のお返し深い辞儀
ひたむきに咲きこぼれてた紅椿
言い負けてそしらぬ顔は床で泣く
長年の義理の笑顔が身についた

鳥取市　大前安子

被災地の天使は弱音吐きもせず
逝く日まで老いても女忘れない
シャボン玉の弾く若さは過ぎし日よ
お陰様老母の笑顔に助けられ

鳥取市　坂本とも湖

子は親が思うほどには思わない
長生きをしても呆けたら意味がない
ねを付けて話せば対話穏やかに
満身創痍俺の身体はボロボロだ

鳥取市　近藤秋星

頼み事真直ぐ目見て話しなよ
世渡りは下手でも正直者になれ
負けるが勝ち母が教えてくれた忍
二つ三つ頭痛の種がふえる春

倉吉市　田中紀美恵

復興を願い絆と筆はこぶ
燃えつきて恋することも忘れはて
泣かされて未練私のじゃまをする
強がりを言った心で男泣き

倉吉市　堀かずこ

分ける程ない財産にもめている
貧しいがトイレ廊下はピッカピカ
裏話直ぐに口耳栓をする
酔う程に人が恋しい春の宵

倉吉市　岡﨑美知江

おはようを笑顔で返すランドセル
連帯と絆で急げ瓦礫処理
散歩道新芽が燥ぐ春が来た
小六の分数を解く大学で

倉吉市　中村　毅

テレビ番中に入って見てござる
持ったならもっと歩けと万歩計
大臣に資格テストがいるようだ
国難じゃ与党野党と言わんとき

境港市　中井虎尾

春の風美容院にと足が向く
手作りのピザが届いた誕生日
自家菜園気力だけでも頑張るぞ
一病が優しい人に変えている

米子市　見山温子

人生の終り近づき断捨離か
スキージャンパー少女の度胸満点だ
預かった年金行方不明とは
マッサージ足の健康目ざめたよ

米子市　田村周子

いい知らせ亡母に届けと鈴鳴らす
怒ってるなやっぱり口が尖ってる
救いの神はやっぱり貴方しかいない
何もかもご破算させて桜咲く

米子市　野川宣子

誕生日忘れたい歳また拾う
感動は血圧のためゆっくりと
何もかも思い通りに呆けもくる
車から自転車にかえまだ歩く

米子市　加藤正二

今朝もまた明るい笑顔声をかけ
逆らった母に届かぬ侘び心
逆風にたえて果実は味覚増す
何もないわが家の財は笑い皺

米子市　池岡たけし

春一番咲いて桜が芽をさます
春風に急ぎ伸び出すつくしんぼ
晩年は波風立てず楽に生き
竹島の岩をなやます波がしら

鳥取県　大塚美代子

かけ違い気づかず相手攻めている
負け戦ふつふつ沸かすざんき感
飼い犬も弱い絆は切って逃げ
身の危険感じころがる虫になる

鳥取県　岡村孝明

年とって今ならわかる老いの愚痴
猛吹雪北は無口で春を待つ
逆風が家族の絆太くする
一杯のコーヒで語る過去未来

鳥取県　田口清帆

贅沢になれてエコには取りくめず
返事だけしても動かぬお人柄
エネルギー溜めて山菜取り歩く
年金日頭に入れて旅の案

鳥取県　橋谷静江

タクシーも入らぬ村に嫁が来る
大根がやっと覗いた雪の中
窓辺にも春の兆しがやっと来る
本腰で来る日来る日も雪をかく

鳥取県　飯野菖子

母の介護と父の山渡される
仏壇の父と交した内緒事
開発で父の田んぼは風になる
父の風母の風吹く七回忌

松江市　藤井寿代

でかでかと辞書に加える愛の文字
本当の優しさ探す鬼になる
このページめくるあなたに逢いたくて
聞くことができることにも感謝して

松江市　相見柳歩

山の緑守る人手のないままに
汽水湖を活かす方策進まない
宍道湖の大和蜆を取り過ぎて
地震列島承知の上というけれど

安来市　原煩悩児

この地球に生まれた証残したい
タイムマシンやりたいことがたんとある
いばら道旅の途中といいきかせ
大風に傍観してる木偶の坊

出雲市　黒目英男

一杯で命の洗濯して生きる
褪せているあの日夢みた未来地図
年金にまたもきびしい雨霰
どっしりと重石が辛い桶の中

雲南市　菅田かつ子

比べないできた事だけ喜ぼう
春風にきれいな色を着たくなり
泣き叫ぶ孫にも私の血が通う
春の雨大地の眠り呼び起こす

岡山市　前田恵美子

矢面で役に立たない糸トンボ
繰言に仏もついに生返事
残されたベッドに融けぬ根雪あり
円卓にのせて思い出食べている

備前市　森ふみか

無責任の後始末にも骨が折れ
予め用意した様な言訳だ
葬祭の最前列が泣きじゃくる
自転車は杖ですポストまで歩く

美作市　小林妻子

あの視線私の心見抜いてる
長電話相手の咳が移りそう
夕映えの空が絵になる鳥の群
句づくりに所構わず指を折る

広島市　岸本　清

あれ程に捜していたものひょいと出る
小一に母さん書いたフルネーム
桜花見事に咲いて今日の雨
鳩一羽イランに行って豆を食べ

竹原市　六田半徳

前兆でしょうか最近よく喋る
あの時の無理が出て来た四日後に
神様が充電せよと足萎える
婆ちゃんもあんなだったと許してる

竹原市　土井輝恵

一人だけスクールバス待つ過疎の朝
ゼロビールされど連れ酔い座ははずみ
施錠よりケータイ忘れが気にかかり
温暖化孫の頃にはどうなるの

高知市　三谷待太郎

開花宣言二番ではダメ意地がある
遠山桜粋な啖呵で咲いている
宣誓が心つないだ甲子園
人生論鼻たれっ子が説いている

香南市　桑名孝雄

入学金ほくほく顔の祝辞です
ゆるキャラの息子必死にペダル踏む
病院の窓から雨の桜見る
指切りをしてから月が笑ってる

松山市　神野きっこ

楽観の境地に遠い盆の窪
寒がりのせいか北風つきまとい
あやふやな漢字草書にして済ます
震災で知った空気と水の恩

今治市　渡邊伊津志

東風吹いて洗濯物をもてあそぶ
ゴミ捨てはスッピン誰も会わぬよう
隣組の役員終り羽のばす
パンジーの鉢に仲よく仏の座

福岡県　本田さくら

うっかりと漏らした本音左遷され
うかうかと乗った話が泥の舟
住人の足音を読む管理人
外人の額ならびゆく国技館

唐津市　北村松風

迎え撃つ手だてきびしく配備され
諍いをすればどちらも傷を舐め
四五日は花の命にほだされて
この杖でよろめく足をなだめつつ

唐津市　岩﨑實

定年を都合で決める自営業
退職し趣味が生きてる予定表
婆だけど国の行く末気に懸る
孤独死が増えて現実あまくない

唐津市　吉冨節子

たまるのは広告チラシばかりなり
おはようとゴミ収集日顔と顔
血圧の上り下りは食次第
入院で花見出来ずに深呼吸

佐賀県　清水園實

温度差の夫に悩む定年後
義援金続ける事に意義がある
親父ギャグやめてくださいとも言えず
子供の芽つんだ私の罪ひとつ

北九州市　小松紀子

当分は今の首相でやっていこ
プライドも品格もないクズ議員
大地震日本人居る居ないだけ
自分さえよければいいか日本人

山鹿市　三谷たん吉

春きざしマスク美人の花粉症
照れながら花束貰う誕生日
腹立つと血圧計の針がぶれ
ひょうきんな孫のお陰で笑い皺

札幌市　佐藤登美子

恒例の異動終えねば落ち着かず
新天地で君よ笑顔の花になれ
年越しをしたゴキブリが顔を出し
寒がりは雪景色など目に入らぬ

（前月分）

鳥取市　近藤秋星

第５回「ごんぎつねの郷」全国誌上川柳大会案内

○**課　題**《 虫 》
（２句提出、11人による共選）

○**選　者**
春口倭文子　渡辺　松風　松井　文子
丸山　健三　加藤　鰹　中山　恵子
宮村　典子　赤松ますみ　樋口由紀子
梅崎　流青　浅利猪一郎

○**募集期間**　６月１日～７月31日

○**投句料**　1000円（切手不可・小為替使用）

○**投句先**　〒475-0833 愛知県半田市花園町4-11-14
「ごんぎつねの郷」全国紙上川柳大会
実行委員会事務局　森本　恵子 宛

○**問い合わせ**　〒475-0805 愛知県半田市浜田町2-1-4
浅利猪一郎まで（TEL・FAX 0569-26-0721）

お願い

川柳塔への投句（川柳塔・水煙抄・愛染帖・一路集・檸檬抄・初歩教室）は、毎月15日必着で締切っています。土、日、祭日は前倒しになります。

新川柳鑑賞 (4)

麻生　路郎

子のカメラ俺と女房を引っつかせ　（喜　由）

大人がピストルをいじると、子どももピストルを欲しがる。大人がカメラをブラ下げて歩くと、子どももカメラと云うわけで、カメラ熱は盛んになる一方。お父さんと、おッ母さんを被写体にした子ども「もっと引っついてや」と一生懸命である。ムリに引っつかせられたパパとママ、思わず顔を見合わせたところをパチリ。家庭川柳の面白さを巧みにとらえた句である。

夫婦愛あんな怪我でも附添われ　（方　正）

「あんた大丈夫？」「痛い〳〵」「しっかり、わたしの肩につかまっていらっしゃい」と、夫を抱きかかえるようにして、長い廊下を蟻のように歩を運ぶ。外聞も何もないところに夫婦愛が盛りあがっている。作者が医者だけに、大した怪我でもないのにと思うと、斯うした夫婦愛を目撃してほおえましく感じたのであろう。

夫婦喧嘩で買うたテレビとは云わず　（春　巣）

「テレビを買ったそうだね」「ウン」「なか〳〵豪勢だね。僕のとこなどは、ラジオすら満足なものが買えないで、子どもにせがまれて僕の貧弱な知識で組み立てたやつさ」「豪勢と云う訳でもないが時代が時代だから、テレビぐらい備え付けないでは文化生活とも云えんからね」とは云ったが、テレビを買おうと云い出したら妻君が反対して、「あんたテレビどころですか、電気洗濯機も買って呉れないで、文化生活もないじゃアないの」

と、夫婦喧嘩までして買ったことはオクビにも出さないという男の心理をうまくつかんだ句である。

洗濯機あんたも憶えときなさい　（保　美）

お隣が洗濯機を買ったのでうちでも買ったという細君なのであろう。

「洗濯機が出来たのでホントに便利になったわ。スキッチを入れさえすれば簡単に洗濯が出来るからあんたも憶えておいて頂戴」と云われたと云うのである。

斯くして、おやじの主権がだんだん危険に瀕してゆくのではあるまいか。面白いところをとらえている。

女房の記憶に亭主恐れ入り　（不　水）

あの時は斯うだった。この時は斯うだったと、女房と云うものは、別に覚えていなくてもいいものを事も細かに覚えているものである。殊に、つれなくされてうらめしかったことにいたっては幾年経っても忘れ得ないものである。買うてやると云って、買うてやらなかったこともハッキリと覚えているもの、まことに怖るべき記憶力と云えるだろう。甲斐性のない亭主なら恐れ入ってばかりいなければなるまい。この句はこの間の消息を巧みにつかんでいる。

子がいてもうすい化粧で迎えてや　（鳩　花）

中年のサラリーマンが妻に対する心境をザックバランに詠んだ句として大変面白い。妻への愛情もよく出ている。この句、下五の「迎えてや」という口語調がいのちだと思う。

中島生々庵句抄

（句集『生々楽天』から　昭和五十一年発刊）

昭和二十二年～三十年

お名前も素性も知らず顔なじみ
有名になって親類様が増え
真似るのがきらいあまのじゃくにされ
素人と思えませんは褒め上手
相談と見せて気を引く腹黒さ
我ながら見事な嘘を思いつき
うらおもてあって都会の面白さ
電気冷蔵庫まぶし仏壇忘れられ
大掃除そのいでたちのものものし
大掃除母の遺品にそっとふれ
砂浜に先客らしい下駄の跡
辞退した手先でさぐるポチ袋
サンプルがよう効きますと書いてなし
つじつまが合いすぎ汚職かぎつかれ
幸せは夜長に母と卵酒
箒目に一条松葉掃きのこり
どさくさに折詰一つ足らぬなり
ご自慢のえくぼそろそろしなびかけ
枯れてから又蓑虫の役に立ち

小出智子抄

大正15年10月28日和歌山市生まれ……(元理事長)
……平成9年6月22日没　行年71
句集『蕗の薹より』

幸せな女にふだん着が似合う
気に入らぬ髪で一日落ち着かず
母の瞳にこの母鳥も苦労性
姑となる大きな傘を買いにゆく
長男の写真が少し多すぎる
返ってこない本のことなど思う　秋
長い手紙を旅のおわりのように書く
道を聞くだけにも人の選り好み
桜が散ってまた諦めることを知る
失った指輪のように忘れよう
にぎりめし母の祈りのかたちして
夕立去る人に訣れがあるように
友達と一緒に齢をとってゆく
七十はさほどに遠きことならず
玄関を出るとき男空を見る
玄関を出るとき女振り返る
女と妻のあいだで好きな彩を着る
風花の舞う日を父の忌と憶え
一緒には死ねない夫婦茶碗かな
諍うた夜も枕が二つある
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
立ち直れそうな五月の風の中
身のうちのランプが少し揺れている

月見草ひとりの湖をもつひとに
繭の中恩を返してから眠る
旅は道連れ飴玉一つ如何です
息子には話しておこう川の幅
生きるべし玉葱の芽が出る如く
清め塩人の絆は断ちやすし
晩年を庇うてくれるバスタオル
バーグマンのような帽子も被ずじまい
今にして子が膝に居た頃はよし
ほっとした処に置いてあるみかん
仮の世に生きているのをつい忘れ
魂はハンドバッグに入れてある
シャンソンを聞くさみしさが夫にも
夫とは深いはなしをしておこう
二で割った数で夫婦はことが足り
包んでみると意外に軽い私の荷
三月四日静かに雛を眠らせる
いちばん怖い人をわが師と決めてから
久方に逢えば柩の中にいる
風の音みんな一人で死ぬんだな
座布団を一枚敷くと私の席
デパートへ行くのは少し淋しい日
人の世に病院があり寺があり

誹風柳多留一一篇研究 82

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清　博美

649 **本国も生国もあるたかい山**

伊吹　富士山の句。孝霊五年に琵琶湖が陥没したその土で富士山が一夜にして同時に隆起した、ということが江戸時代では信じられていた。その理屈でゆくと、富士山の本国は駿河国で生国は近江国ということになる。ちなみに『和漢三才図会』の「駿河」の項に、

孝霊天皇五年六月ニ富士山始テ見ユ蓋シ江州ノ湖（ミナワ）一夜ニ湧出シ其土為ニ富士山一

とある。

生国へ顔も見せない富士の山　笠二10
一夜子のふじハ近江にうみの親　九九82

清　賛。

650 **あいきやうの無イふり袖は内て留**

伊吹　新造が、振袖を留めて短くし一人前の女郎になることを袖留めという。そのとき、馴染みの客がその披露の費用を負担する。馴染みの客が付かず人気のない新造は、妓楼主の家でひっそりと袖留めをすることになるのである。

しんそうの袖も思へハこわいもの　三15
袖とめハ孫のかた付ほどかゝり　拾六28

山田　賛。この場合は当然その費用は遊女の借金となる。

増田　賛。姉女郎のかかりになるのでしょうか。地娘の解も可能か。

山口　賛。やはり吉原だと思います。

清　賛。

651 **中にも此茶壱歩に高いもの**

伊吹　喜の字屋の台の物。吉原郭内の仕出屋である台の物屋は、通称を喜の字屋という。そこの台の物には、飾り付けに松の枝を立てる。値段は一歩だから、間違いなく高い。

謡曲『高砂』の「中にもこの松は、万木に勝れて、十八公のよそほひ、千秋の緑を為して。古今の色を見ず」からの文句取り。

きのじ屋の松ハ元より壱分也　安六56会
十八公の粧ひと廓で誉め　九七27

清　賛。

652 **いけとるとにらそうすいのしたくせ**

伊吹　元文四年（一七三九）に成立した『常山紀談』（巻之十五石田三成生捕らるる事）に次のような文があるので、少し長いが引用する。

馳走の士を附けてもてなしたれども、片時も早く死んとて食せず。馳走の士如何で兵部が計ひに及ぶべき。能く労りて最後の御用意候へかし、と言ひければ、さらば此頃腹中の悪しきに韮雑水を賜へ、

と云ひしかば、其設して進めければ、快く食して打伏して鼾かきたり。

とある。「生捕らるる」や「韮雑炊」など、まるで『常山紀談』から取材したような句である。

即ち、石田三成を生捕ると、馳走の士が韮雑炊の仕度をすると。

雪隠で味方まけるをいし田き、　二二31
小性あかりハ尻ッくせわるく死ニ　一八9

清　賛。

653 **木のそばにきみのまします雨舎り**

伊吹　『史記』（始皇本紀）、謡曲『老松』『高砂』などからの句。秦の始皇帝が、松によって風雨を避けることが出来たため、松に五太夫の位を授けた、という故事による句。木の偏に公の旁で松という字になる。それで、松の側に始皇帝の公が雨宿りしておられる、となる。

ちなみに謡曲『高砂』の中に出てくる「十八公」の語も、松の字を分解したもの。

唐松の下に大きな雨舎り　三九20

清　賛。「公の在す」（きみのまします）は、謡曲『清経』に「さすがにまだ君まします」とあり、その文句取としておきます。

654 **日本かときいて上総てわらハれる**

伊吹　難破船で漂流した者の句。命からがらたどり着いた上総の海岸で、ここは日本の国かと漁民あたりに尋ねて笑われた、というのである。

黒潮の関係で、白浜や勝浦など紀伊半島と同じ地名が房総半島に多いのは、漂着した者がそのまま住み着いたためではないかと思っている。

日本と書て上総で笑れる　一四四2

清　賛。伊吹氏地名説面白し。

655 **とまをつきぬいて舩頭のびをする**

伊吹　この場合の苫は、和船の上部を覆う菰状のもの。狭い船室の中で船頭が伸びをしている手が、苫を突き抜いたように見える、という描写句。例句の苫は、大工仲間で言うところの着物。

とまをつきぬひてせんどうたれるなり　安八信3

山口　賛。本当に突き破りはせぬか？

清　賛。

656 **鵜か呑こんでおとり子ひきはしめ**

伊吹　鵜が呑み込んでは、鵜で居ると同じく、何もかも知り尽くしている、だと思う。馴染みのお客たちの性格・好み・話題・癖などなど、総てを熟知して慣れた手付きで三味線を弾き始める踊り子なのである。例句の地は、舞踊の伴奏の曲。

地はつかり引クおとり子ハ出来ルやつ　明三天1

山口　鵜飼舟の情景のような気もするが、江戸にもあったのだろうか。あるいは長良川あたりのことか。

小栗　墨田区の『すみだの通史年表』寛永二十年の項に、「三代将軍徳川家光、牛島で鷹狩をする。以後隅田川で鷹狩り・鵜飼い・漁を楽しむ記事が見える」とあるので、隅田川で鵜飼いが行われたことは確かだが、それが屋形船で見物するようなものだったかどうかはわからない。長良川のものは多分にショー化されたものだろうから、これをイメージすると違うような気もする。隅田川に天然の鵜がいたかもしれず、川の縁語で「鵜が呑み込んで」という語を使っただけ、と考える方が無難のようにも思う。

清　小栗説を踏まえて礎説でいいと思う。

寄稿

切り取られた「川柳雑誌」昭和十八年八月号

一色哲八（いっしきてつや）

私は川柳とは関わりのない目的で地元図書館に取り寄せた膨大な資料の復刻版に眼をこすっていた。『出版警察報』全四十一巻。並べると二メートルほどになる戦中戦前の言論弾圧の記録である。その昭和十八年八月分という終末近くの記事が私を釘付けにした。

内地出版物の取締状況
出版雑誌　二件
川柳の雑誌　八月一付第※※巻第八号
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六昭和ビル同社麻生幸二郎發行　八月十八日削除
川柳塔（麻生路郎選）ト題スル記事ハ戦時生活竝企業合同ヲ呪詛スル川柳ノ多数掲載シ、戦時下國民精神指導上極メテ有害ナルニ因リ四頁乃至六頁削除。（記事省略）

「二件」とあるもう一件は『歌文』という短歌中心の雑誌で「御陵参り」という記事が「不敬」とされている。この『川柳雑誌』は「安寧秩序」侵害違反ということになる。

また、その号冒頭の「概説」欄には二件の出版雑誌について簡略に記されていて、「皇室の尊厳冒涜、不敬或は国史汾淆に亙る嫌ある」が一件。もう一件は「反戦乃至厭戦気運を醸成せしめる虞あり」とされている。他に該当する雑誌はないのでこれは『川柳雑誌』（以下『川雑』とする）のことである。

『出版警察報』。発行主体の内務省警保局は悪名高かった特高警察を統括する「特高課」を内部部局とし、同じく「図書課」が出版物の検閲の担当部局としてあった。この記事が掲載された当時は内閣情報局が加わり二頭立ての厳重な検閲機関としてあり、内容は全て戦中戦前の言論弾圧の詳細な記録である。表紙右上には秘の表示がある内部向けの秘密資料報である。

検閲による処分には四段階があって最高の処分が「発売頒布禁止」処分、いわゆる「発禁」である。発禁には当然「差押え」処分が伴った。発禁とは違い、全体としては許容もしくは推奨できるが、部分的に問題ありとされる場合の処分がその分量に応じて下されることになる。多用されたのがこの『川雑』号に適用された「削除」処分であった。

もう一つの処分に「分割還付」があり、昭和十二年六月に『川雑』はこの処分も受けている。この問題は別の機会に譲りたい。一番軽いのが「注意」処分で「始末書」を書いてとりあえず終わりになる。

これらの処分は「行政処分」であり、雑誌の発行は都度の届け出と二冊の納本が求められ、これを怠ると違法となり特高警察による「司法処分」として検挙されることになる。

問題とされた句の数々

反戦・厭戦気運を醸成するとして検閲官が問題とした「川柳塔」欄の句にどんなものが

あるのか。「川柳塔」は同人・社友に限定された投句欄である。

大阪　寺井　鋭々
一坪農園の薯でも呉れといふ
布施　上田　翠光
夢のない暮しは秋を耐へかねる
つゝましき愛は義足を温める
大阪府　井上登志緒
友情へ芋の土産をもってきた
大阪　丸尾　潮花
イノコヅチ喰える草とは思へども
大阪　福井　哲
絢爛とどうせ喰えない花が咲き
大阪　乙谷　乙平
企業整備労務係に転落し
布施　中村　聖司
辞めるのかそうかとむごく扱われ
大阪　橋詰　東雀
企業合同それから靴がよく痛み
姫路　夷　一笑
転業や僕は一個の部分品
尼崎　小林　文月
戦時下の誕生一枚撮っただけ
京都　明石　柳次
餞別だ貯蓄だ妻は産み月だ
大阪　井關恵比寿
垢の手が又債券を買ひにくる
川口　伊古田伊太古
未帰還機星と一緒に友を待ち
西宮　加川　泉泡
北支征服　故山地伍長に捧ぐ
乾パンを一ツ残さず食って散り
×　×　×
景色はいゝよと脳病院のはなしなり
（順不同。旧字は改めた）

昭和十八年八月号の「川柳塔」欄は異常というほかない。前七月号、六月号、五月号の同欄を見てもこのような句はほとんど無い。一、二句注意を受けそうなものがある程度である。翌九月号は当然ながら、全く無い。

検閲官、あるいは特高課員は路郎にこう怒鳴りつけたのではなかったか。

「この句は比喩的だな。脳病院とは一体どのことを指しているのか言ってみろ。景色がいいとはどういうことだ。貴様が良いと思ったから選んで載せたのだろう」

乾パンを一つも残さず死んだという句も飢餓状態で戦う皇軍を揶揄愚弄するものと検閲官に受け取られかねない。

「景色」とはいうまでもなく、もはや転げ落ちつつある当時の「戦況」のことであり、「どうせ喰えない花」がまぶしく、雑草をも食料とせざるを得なかった。物資はすべて戦争優先であったから従前の生産活動が維持できず企業合同は必然のことであった。

最後の「脳病院」の句は尼崎の長谷川三司（さんじ）という社友によるものである。

映画「海ゆかば」という小題のもと
雪晴れへ子の挙手遠く〳〵なり

に続くものである。この句は穏やかであるが戦地に赴く息子に雪晴れが重くのしかかり、戦地の非人間性を見事に詠んでいる。続く「脳病院」の句は戦争に子供をとられた三司の憤怒の「叩きつけ」と言って良いような気がする。勝手な想像である。詠んだ当の本人三司はただで済まなかったのではないか。

もう一つかなり気になる四連句がある。

豊中　黒川紫香
あっと云ふ間に東條さん泰になる
月見草バスのほこりの中に咲き
蛇ふっと兵隊ごっこにとりまかれ
結局は切れないナイフ借りてゆき

これも比喩的であろうと私は思う。連句に

なっていなければ見逃したに違いない。

「切れないナイフ」とは軍事同盟国ドイツ・イタリアのことであろうし、「月見草」「蛇」には誰かの名前を当てはめても良いのではないか。深読みにすぎるだろうか。

路郎は、このような反戦句や厭戦句を今までと違い、何故、このようにかなりまとまった形で掲載したのだろうか。

前年の昭和十七年六月には開戦半年にしてミッドウエー海戦で四空母を失い（報道では空母一）、敗戦へ歩みはじめた。八月には米軍はガダルカナル島に上陸、文字通り「餓島」での激戦の後皇軍は翌十八年二月に「転進」と景色は常にごまかされた。四月、山本五十六長官撃墜死。五月、アッツ島玉砕。九月、同盟国イタリア無条件降伏。十一月にはマキン・タラワ守備隊五千四百人全滅。

国内では膨大に膨らんだ戦費調達のため子供にも貯蓄が推められ、「債券」を購入しないものは非国民とされた。これにはその「標語性」を生かして川柳が先頭に立ち奮迅する姿があふれている。

文化方面に眼を移せば、十七年五月には日本文学報国会が設立。それに先立つ「大政翼賛会」は十五年十月に設立され、それに伴い内閣情報局の指導により「日本川柳協会」の設立が迫られた。

まとめ役を指名されたのは前田雀郎であった。雀郎は路郎に協力を求めたが路郎は既に「川柳人協会」を興していることもあり、明白にこれを拒絶した。昭和十六年七月発行の『番傘』にこの当時のいきさつは生々しい。

この年には各分野における雑誌の統合が特高警察によって進められている。紙不足の問題もその底にはあったが、その趣旨は柳誌柳会を中央集権的にまとめることであり、特高警察による言論出版の監視と統制管理を容易にする為であった。

特高は大阪における統合誌を一誌とし『川柳雑誌』を指名した。これは、『川柳雑誌』が唯一「有保証誌」であり新聞紙法上の「保証」を受けた官許公認雑誌であり路郎のプライドの基本にあった。『番傘』はその組織がいかに大きいものであっても建前上はただの同人同好誌に過ぎなかった。

路郎と岸本水府の文学観は異なり、水府に対する路郎の対抗意識は激しい。同じ土俵の上で共存できるはずがない。水府の必死の努力の結果として『番傘』も『赤煉瓦』『昭和川柳』『天守閣』など数誌を吸収する形で存続を認められることになった。しかし、当時の各誌を見比べても、全て聖戦称揚、銃後雑誌としての戦争協力推進の姿に大差はない。特高課にとって、『川柳雑誌』は合格点を与えられるものであったということである。

早く終刊させた路郎の真意は

私は『川柳雑誌』が何故他誌に先駆けて昭和十八年十二月という時期に一足早く終刊したのか疑問に思っていた。何故こんなに早く止める必要があったのかと。

川上三太郎の『川柳研究』は東京における唯一の残存誌であったが、空襲で印刷所が焼け三太郎も疎開して昭和十九年九月で止まった。空襲で被害を受けなければ継続されるはずのものであった。

椙元紋太の「川柳ふぁうすと」、戦時統制令による改題「川柳もめん」は昭和十九年四月、無念であっただろう。幕を閉じさせられた。

岸本水府の『番傘』は、『川雑』が終わったことにより残存を許され、減頁と合併号で紙不足をしのいだが敗戦の三か月前の昭和二十年五月についに落城した。

だが、しかしである。村田周魚は統制令を

かいくぐり、『川柳きやり』を『きやり社報』と名を変え、内部通信誌として存続をはかった。いわば脱法行為を続け昭和二十年九月号を準備中に敗戦を迎えることになった。

『番傘』に吸収されることに我慢出来なかった森鶏牛子は『川柳春秋』を昭和十五年一月に『関西川柳學會會報』と変え、「非売品」として周魚同様意地を通したのであった。

『路郎読本』によれば、その原因はほとんど全てが物資不足とされている。路郎もほんのわずかそれを認めているところもあるが、基本的には「雑誌奉還」という時局への協力を譲っていない。

『川雑』終刊を紙不足のせいにするのは難しいし言い訳にはならない。確かに紙が絶対的に不足していたのは事実である。しかしそれでは高い保証金を納めている意味がない。ただこの時期には傷痍軍人、つまり白衣の神様の川柳句集にぼんと紙の提供を引き受ける特高警察の姿がある。特高の腹一つでまだ出せる余裕はあった時期のことであり、紙不足を理由として同好誌である『番傘』よりも早い終刊などあり得ない。「有保証雑誌」である以上、量の制約はありえても優先的に割り当ててもらえるのである。要するに特高課に気に入られるかどうかということに過ぎない。

「有保証」である以上「保証金」を納めねばならない。そして「事故」を起こせば当然没収され認可は取り消される。

明治四十二年制定の新聞紙法によれば、東京大阪市内近郊では二千円、人口七万人以上の市は千円、その他は五百円。月三回以下の発行物はその半額という、明治という当時にしてはかなりの高額であった。これは事実上の出版制限である。『川雑』が「有保証誌」となったのは「川柳職業人宣言」が発せられた昭和十一年三月のことだから、路郎が求められた保証金は明治の世であれば千円であったことになる。明治末年の千円は現在の三百万円以上の価値があり、昭和十一年当時では、千円がそのままであっても実質百五十万円程度の価値はあり、物価上昇により改正され値上げされた可能性もある。

これは「川柳職業人宣言」とは切り離すことのできなかった壁であり、貧乏人路郎には勇気と工夫のいる金額であっただろう。

路郎はいう。

「我が社では御用川柳やモットーのやうな川柳は作らぬやうに絶えず厳戒した甲斐あってウワータイムにも可成優れた句を残すことが出来た。そのためには特高課へ呼び出されてお小言を頂戴して貰ったり、難行苦行をさせられたものだ」

これが昭和十八年八月のことを指しているのは明らかである。御用川柳やモットー川柳が他の有力他誌よりもはるかに少なかったのも確かに事実である。

路郎は始末書を書けといわれても書かずに頑張りとうしたという。しかし有保証誌の認可取り消し、保証金の没収。そういう事態になればその後一切の川柳活動は封じ込められることになる。官許公認雑誌と自由な川柳活動などというダブルスタンダードが通用する時代では全くない。

この八月号で路郎はついに決断せざるを得なかったのではないか。

八月号が削除処分を受けたのは発行日から二週間以上過ぎた八月十八日のことである。もうすでに発送頒布の済んだあとのことであるから回収が命じられた。

削除処分を受けると、その部分を切り取るしかない。組み替え、差し替え、製版のやり

直しなど月刊誌では不可能。回収したことは路郎も認めているが、その後切除したものを再頒布したかどうかは私に疑問があった。当然含まれていると思われた大阪府立中之島図書館蔵の『川雑』昭和十八年分のなかに唯一冊同号が欠号になっていたからである。

大阪市立中央図書館蔵のそれは路郎が直接寄贈したものであるから、当然完本のままである。所蔵が不明確であった大阪大学付属総合図書館に地元図書館を通じて照会したところ、「所蔵あり、ただし一部切り取られています」との回答を得た。「一部」というのは三頁から六頁という二枚であった。問題となった「川柳塔」欄は四頁から六頁であるから三頁は四頁の裏にある以上犠牲になる。やはり一旦回収され、再発送されたことを裏付けている。これらの『川雑』を付属図書館に寄贈したのは西尾栞や北川春巣等を含んだ「阪大句会」の誰かであろう。

かつて『雪』などで川柳の「高踏」を共にした、日車、半文銭、南北達は戦中句を作らなかった。いや、発表しなかっただけなのかも知れない。その理由は？

彼らは川柳を心の句として愛したからである。日車は「国策にひしゃげた嫌いがある」とし、南北は「窮屈さが川柳らしくないものにした」と戦後他人事のように語った。作らない、あるいは発表しないことでしか自分の心が守れないという悲しい時代であった。

もはや川柳のレベルを語る以前の問題があった。川柳が「社会詩」としての側面を強く持つ以上、「川柳塔」欄への同人たちの投句が、当時の状況を踏まえた社会性を強く帯びたものになるのは理の当然であり、十八年八月という時期にあっては、それがピーク近くに達していたはずである。それはもう路郎にとって無視や排除できないものになっていたのであろう。

当然予想していただろう、昭和十八年八月号への圧迫。「ええい、ままよ」である。冒険であり、ふんぎりをつけるため、また同人達を納得させる方法として、多くの「問題句」を意図的に載せたという気がしてならないのである。それはあるべき川柳の姿を守ること、聖戦への「雑誌奉還」とを見事に両立させた「策士」路郎の姿ではなかったか。投句課題の関係で猶予期間は必要である。節目として良かった昭和十八年十二月号の「雑誌奉還」は路郎のほぼ一人舞台で終わっている。

〈付記〉

「脳病院」という表現は、現在のものとしては差別を助長するものであるが、当時のものとしてそのまま表記し「」を付した。筆者にその意図はなく了とされたい。

私は『川柳学』２００７冬号「大東亜戦争下における川柳」（上）で昭和十三年三月の風俗紊乱を理由とした『川柳みすか』事件を最後に「事件」はもう起こらなかった、と断定的に書いたがこれは本稿により訂正する。これは流布する一般的な川柳弾圧史を鵜呑にした安易な結果であり反省せねばならない。

『出版警察報』や同類他誌を調べ直すなかで、発禁にあい潰された柳誌が通常二誌とされているが最低で五誌あることもわかり、鶴彬の作品が載せられた『火華』も『川柳人』発禁の以前に、要注意左翼文芸誌として当局から注視されていたこともわかった。鶴彬、『川柳人』を中心に据え強調されすぎる川柳弾圧史観も修正せねばならないと思う。

ーーーーーーーーーーーー

【作者プロフィール】昭和二五年兵庫県明石市生、岡山県南在住。所属無し。旧筆名中岡光次として『川柳人』『触光』他、非文芸誌等にも川柳評論他あり。

英語 de Senryu ⑥

麻生路郎句集『旅　人』

英訳　吉村　侑久代
（岐阜保健短期大学）

夫婦づれチップの要らぬとこで呑み

a married couple
enjoys drinking at the place
without tip

彼の一生雨雨雨のままだつた

his life
rain after rain
throughout

～リバーウィローのため息～

前号で述べた和田垣謙三の著書『吐雲録』(大正 3)、成見延亀、上床新助共訳『英訳川柳名句選』(大正 13)、『やなぎ樽研究』(大正 14) は川柳英訳の黎明期を飾る業績でした。昭和 13 年には、続々と川柳英訳・翻訳に関する記述が様々な川柳誌に登場します。その気運の前兆として昭和 12 年に、阿部佐保蘭による「川柳翻訳研究会」(SHK) が生まれ、『SHK』第 1 号が発行されました。阿部は「川柳翻訳研究会」のなすべきことを「川柳を海外に普及することです。それには、先ず外人にも、わかるように、川柳を翻訳することであります。このことは、非常にむずかしいです。それだけにこのことに手をつけた人は暁天の星であります。その前人未踏とも言うべき世界を開拓するのが、我々川柳翻訳研究会のしごとであります」(阿部：『川柳と翻訳』中央公論事業出版 1966) と彼の川柳翻訳に対する抱負を述べています。いよいよ英訳川柳興隆期の到来です。阿部の仕事に協力した宮森麻太郎の英訳川柳を紹介しましょう。この句は『川柳塔』の主宰者であった麻生路郎の代表的な川柳です。

俺に似よ俺に似るなと子を思い　　(麻生路郎)
"Be like me!"/"No, not like me!" I say,/as I think of my child. (宮森麻太郎訳)

愛染帖

新家　完司　選

ガレキなど受け入れないという絆

（評）「日本ガンバレ！」とか「絆」だとか、掛け声はいいが、いざ自分に関係があることになると腰が引ける。まったく情けない！

川西市　山口　不動

春嵐モンローになり立ち尽くす

（評）地下鉄の風にスカートを押さえる色っぽいモンロー。映画「七年目の浮気」の一シーン。春の嵐も粋ないたずらをするものだ。

鳥取県　吉野いさお

素面でも真っ直ぐ歩けなくなった

（評）ついこの間までは颯爽と歩いていたのだが…。膝が痛んできたのが原因なのか、身体全体のバランスが悪くなってきたようだ。

堺　市　村上　玄也

言い訳にAB二案用意する

（評）正面から攻めてきたらA案。裏側からならB案。用意周到ではあるが…、想定外の方向から突っ込まれたら、ちょっと困る。

岡山市　永見　心咲

取り敢えず会釈しておくすかんたこ

（評）関西ではポピュラーな「すかんたこ」。「すかん」と「たこ」の合体語。直訳すれば「嫌な人」。会釈だけにしておくのが無難。

高知市　小川てるみ

難聴も笑い声なら聞き取れる

（評）笑い声は愉快だから出るだけなので、相手の意図を斟酌する必要はない。また、笑い声には笑顔が伴うので明確に受け取れる。

河内長野市　松岡　篤

顔隠していても座席を譲られる

（評）残念なことである。おぼつかない歩きかただけで高齢者と判断されたのだろう。せっかくのご厚意、ありがたくお受けしよう。

三田市　石原　歳子

ハイタッチもとめて今日もママの店

（評）妙齢（高齢の場合もあるが）のママと「ヤア～」「ヤア～」の、ハイタッチは楽しい。それだけでも通う値打ちがある。かな？

大阪市　江島谷勝弘

懐メロはお経のテンポ有り難や

（評）ナツメロにアップ・テンポは少なく、緩やかで歌いやすい。「お経のテンポ」には笑ってしまうが、たしかに似ているのもある。

河内長野市　藤塚　克三

美人の選者これで抜けたらもうけもの

（評）顔を見て美声を聞いているだけでも出席した甲斐あり。呼名まで出来たら言うことなし。主催者は美人選者を登用すべし。

吹田市　太田　昭

寒い部屋ですがお花は長くもつ
老後という未知の世界の新鮮さ

和歌山県　森下よりこ
安来市　原　煩悩児

ああ今日も一日何もしゃべらずに
独り居てトマト茄子の計画表

岡山市　工藤千代子

特賽のチラシ眺めて雨の午後
四捨五入すれば良妻ですワタシ

倉吉市　中村　毅

得したり損したりする四捨五入
復興に私心を足してくじを買う

芦屋市　黒田　能子

鳥にもソプラノ　アルト　バスの声
クラス会今や老人クラブです

茨木市　藤井　正雄

灯明の影で遺産が揺れ動く
終電に遅れカプセルホテル行き

橿原市　安土　理恵

花冷えの夜を狂うて風邪三日
多分そう世間の方がおかしいの

堺　市　奥　時雄

偏屈に相槌打って逃げ帰る
剪定後花の咲かない我が家の木

東かがわ市　川崎ひかり

私も顔で大分損してる

患っています夫在宅症候群　鳥取市　福西　茶子

老いてなお運勢欄が気にかかる　唐津市　樋口　輝夫

一瞬の春爛漫を捕まえる　三田市　久保田千代

第一印象は斬られ役である　青森県　松山　芳生

意気地無し私を盾に生きる夫　河内長野市　穂口　正子

逝く先はどう喚こうが墓の下　奈良市　岩本　浩二

ざわざわと傍がうるさい老いの恋　松山市　神野きっこ

正直に映すと嫌われる鏡　塩竈市　木田比呂朗

靴音を響かせている消費税　倉吉市　山本　玲子

計画でいつも躓くフルムーン　堺　市　内藤　憲彦

外出にマスク姿をチェックする　河内長野市　谷　久美子

噂話荷物にならぬように聞く

モノクロの写真も老けて茶褐色

保険屋さん入会すればもう来ない

最前列君が代歌う役回り

言い訳が嫌で悪役通してる

豊満な胸より欲しい豊かな句

披講ではいつも心でコール・ミー　豊橋市　藤田　千休

これミミズ野蒜三本だけくれろ　橿原市　居谷真理子

長生きのサプリばかりが騒がしい　牧方市　伊達　郁夫

音程が外れてるのはアートです　鳥取市　前田　楓花

老妻の声若返るさくらかな　浜松市　岡田　史郎

ジャズ流し若く身軽に生きている　シドニー　坂上のり子

桜植えよう私がここにいた証　牧方市　松原　保

我がゴルフ試行錯誤が続き過ぎ

検査日の帰り立ち寄るのれん街　奈良県　渡辺　富子

春うらら猫とあくびを移し合う

理想とは遠い夫婦で孫五人　池田市　上山　堅坊

割り勘負けしない身体へ鍛えてる

いい薬あなたがくれるその笑顔　海南市　堂上　泰女

故郷の夜空アイディア降りそうな

不惑の子にまた笑われた老婆心　弘前市　髙瀬　霜石

酔っぱらうことは時々高くつく

湯豆腐もご馳走になるいい土鍋

ストレスはないが毎晩酒は飲む　三田市　堀　正和

好きですのお酒きれいに飲める人　堺　市　矢倉　五月

零歳児といえども泣いて主張する　海南市　三宅　保州

留守電にしておりますが昼寝中　西宮市　泉水　冴子

アリガトウ　ホナサイナラで終りたい　藤井寺市　鈴木いさお

顔ぶれも変わり四月の朝のバス　鳥取市　有沢せつ子

春嵐大きなゴミを置いて行く　豊中市　水野　黒兎

絶叫を売り物にする遊園地

日当たりは良好ですと墓地セール　大阪府　高木　道子

ようようの桜に待っていた屋台

絵馬の誤字許されまして高校生　米子市　成田　雨奇

主軸打者日本酒代打芋焼酎

耳貸していい目に会ったことがない　西予市　黒田　茂代

表門も裏門もないわが寓居

酒の味わからなくても生きられる　牧方市　寺川　弘一

財布拾うと人間性がよくわかる

塾年離婚して青春を取り戻す

香芝市　大内　朝子
背伸びした足がしんどいよと叫ぶ
松江市　三島　淞丘
スリッパと反りが合わない老いの足
豊中市　安藤寿美子
もうちょっと我慢この世に居るとする
鳥取県　竹信　照彦
金貸しが昔も今も幅利かす
藤井寺市　太田扶美代
あの時はあの時だけという仲間
大阪市　奥村　五月
気にくわぬ娘婿でも酒は合う
奈良市　大久保真澄
飲兵衛の家系汚さぬ嫁が来た
和歌山市　福本　英子
欠点を晒して肩の荷を降ろす
藤井寺市　鴨谷瑠美子
招待状に殺し文句が書いてある
八尾市　田邊　浩三
現世を冷笑してる古墳群
鳥取市　永原　昌鼓
老後ではないよまだまだ成熟期
枚方市　二宮　山久
我が家も春が来た来た木の芽和え
大阪市　榎本　舞夢
猫でさえ可愛い方がもらわれる
高槻市　片山かずお
閑そうな顔が揃った喫茶店

貝塚市　石田ひろ子
咄嗟に出た嘘で血圧また上がる
松原市　市川　雄太
山道を人生として登り行く
鳥取市　岸本　宏章
喜寿過ぎてまじめに唄う恋の歌
和歌山市　柏原　夕胡
断捨離をして消しました恋心
札幌市　三浦　強一
居酒屋は没句肴に盛り上がり
三田市　上田ひとみ
冷蔵庫夫にチェックさせておく
吹田市　野下　之男
女房のいびきばかりは元気です
東京都　岸野あやめ
曾孫二歳スマートフォンがお気に入り
今治市　渡邊伊津志
果実みなセシウムなどは知らず熟れ
鳥取市　倉益　一瑶
最高の老後にしたい万歩計
唐津市　井上　勝視
御飯零す祖母をニコニコ見ています
豊中市　松尾美智代
誕生日スイーツよりも白ワイン
松江市　石橋　芳山
浮き石を踏んでる俺はいいかげん
和歌山市　古久保和子
主治医とは同じ持病をもっている

河内長野市　坂上　淳司
入門書ずらり揃えていて無趣味
大阪市　笠嶋　惠美
飲み会が楽しくなって心待ち
鳥取市　岸本　孝子
血管の掃除毎晩猪口二杯
八尾市　吉村　一風
毒舌はやめろビールがまずくなる
紀の川市　宇野　幹子
有頂天合わせ鏡にさとされる
鳥取市　竹口　清信
面白い生き方がいいどうせなら
神戸市　田中　章子
ジョンという甥がこのたびできました
堺　市　大隅　克博
古希過ぎて今が第三反抗期
藤井寺市　津田シルク
デパ地下のどうぞどうぞの爪楊枝
大阪市　太田としお
スポーツが寒い政治を紛れさせ
奈良市　加門　萌子
インテリの方が原発好きらしい
鳥取市　高浜　勇
車窓見るふりして女ながめてる
岸和田市　中岡　香代
イケメンの阿修羅を訪ね一人旅
弘前市　岡本　花匠
着ぶくれてダルマの行を解けずいる

堺　市　羽田野洋介
どうせならちょい悪仲間選びたい

大阪府　米澤　俶子
裏向きの値札はきっと故意なんだ

大和郡山市　坊農　柳弘
噛み合わぬ答え湯割りで中和する

姫路市　古川　奮水
頷いた話へ銚子追加する

八尾市　髙杉　千歩
ブログから視野広くなる春の章

京都市　坪井　孝一
美しい所ありますこの日本

枚方市　小林　わこ
桜咲く嘘はとってもつけません

鳥取県　斉尾くにこ
触れ合いの余韻残して高速道

河内長野市　梶原　弘光
また来るね必ず墓に声掛ける

岡山市　藤成　操江
褪せた服破れないから捨てられぬ

三田市　福田　好文
金の力に勝てない事は知っている

鳥取市　津村　律子
鳥取の雨大阪に付いて来る

弘前市　髙森　一呑
コンパスの真ん中に居る丸い母

高槻市　島田千鶴子
手をかけぬ雑草ばかりよく育つ

米子市　後藤美恵子
若返るチャンス到来木の芽どき

奈良市　米田　恭昌
マイマイク持つドヤ顔がひとり浮く

寝屋川市　冨山ルイ子
花嵐忌に田中絹代をなつかしむ

鳥取市　土橋はるお
森が吐く空気を吸って出発だ

堺　市　志田　千代
母はパート三十路の息子ブーラブラ

堺　市　遠山　唯教
立ち止まると人がはっきり見えてくる

大阪市　吉内タカ子
ベレー帽好きでかぶれど顔の皺

弘前市　稲見　則彦
くどい酒螺旋階段上り下り

大阪市　榎本日の出
駐車違反買物よりも高かった

大洲市　中居　善信
ラーメンをおごるくらいの余裕なら

八尾市　村上ミツ子
傘持っていくかどうかを空に訊く

大阪市　髙杉　力
戦争を知らぬ　九条も知らず

鳥取県　細田　裕花
耳の穴たまに雑音整理する

富田林市　山野　寿之
阯かも知れぬ諭吉が落ちている

大阪市　伏見　雅明
先頭を妻に譲って風よける

鳥取県　西谷　悦子
わたくしの喜怒哀楽を知る茶碗

寝屋川市　平松かすみ
ニューハーフ出ない日のないテレビ局

大阪市　津守　柳伸
ホップステップ近場温泉目標に

鳥取市　大前　安子
義理の糸絆に変わり蝶結び

岩出市　村中　悦男
非常口知らせる図柄生きること

東大阪市　北村　賢子
切り立った岩場可憐な花が咲く

西宮市　藤本　直
挨拶は花見したかですれ違い

弘前市　今　愁女
独り居に寂しさつのる虎落笛

紀の川市　辻内　次根
一日の最後炬燵に潜り込む

大阪府　小栢こずえ
先に食べ終りはいつもびりになる

羽曳野市　吉村久仁雄
朗らかな妻が無視するおやじギャグ

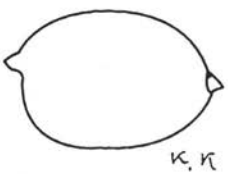
和歌山市　土屋起世子
秀才も美女も喜寿ですクラス会

田辺市　岡本　昇
落ち葉にも命かさかさ物を言う

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　738句）



「青い」　福士慕情選

超不況青息吐息町工場　奈良市　岩本　浩二
放射能汚染に悩む青い星　大阪市　近藤　正
原発で青い地球を泣かすまい　香芝市　大内　朝子
青空にすまぬと思う再稼働　大阪市　川端　一歩
東北へつながっている青い海　大阪市　神夏磯典子
青々と海は自分をとり戻す　京都市　都倉　求芽
青筋を立てているのでまだ元気　河内長野市　梶原　弘光
つかまえて見ると青虫泣いていた　シドニー　坂上のり子
踏まれても根っこが弾む青い麦　和歌山市　武本　碧
青梅がポトリ地球も病んでいる　紀の川市　宇野　幹子
青い実を齧り未熟の味を知り　奈良県　谷川　憲
青い実の熟しきるのを待っている　和歌山市　柏原　夕胡
そのうちに七色になる青い恋　堺　市　羽田野洋介
青い実がでっかい野心秘めている　東かがわ市　清川　玲子
さあ何かしたらどうかと青い空　松江市　石橋　芳山

「青い」　池森子選

しあわせになれそう空色の絵の具　和歌山市　柏原　夕胡
琴線を奏でる春のひとしずく　鳥取県　斉尾くにこ
群青の海に線など引くヒト科　大阪市　升成　好
青空にすまぬと思う再稼働　大阪市　川端　一歩
ロンドンへジャパンブルーが吹き抜ける　西宮市　藤本　直
平和の鐘聞いていますか青い空　羽曳野市　福田　悦子
青空と桜の恋は二週間　大阪市　原田すみ子
ハローワークの列に見えない青い空　堺　市　村上　玄也
剃りあとの青さ就職パスしたぞ　大阪市　柴本ばっは
新星の青い果実が旅に出る　鳥取県　西谷　悦子
青リンゴ上野の駅に着いたころ　札幌市　小沢　淳
酸っぱいがそれでいいんだ青リンゴ　八尾市　田邊　浩三
奔放に青いりんごが背伸びする　横浜市　菊地　政勝
齧らないでリンゴの頬はまだ青い　吹田市　木下　敏子
翔べぬままぽとりと落ちた青りんご　奈良県　渡辺　富子

ロゼワイン青い話を聞きたがる
愛情にはぐくまれてる青りんご
吐息まだ青いがやがて武器になる
弾かれる覚悟正論青く吐く
まだ青いリンゴが恐いことを言う
オンリーワン青い地球を守りたい
過疎もいい寝転べばホラ青い空
悔いばかり残るわたしの青い過去
脱皮するたびに青さが抜けていく
無謀だと知っても挑む青蛙
青いっていいな恐いもの知らず
雲ひとつない青空も味気ない
白内障癒えて青空別世界
青空が大好きなのはにぎりめし
好きな青着て大切な人と逢う
真青な空に胸襟正される
群青の海はトリックかも知れぬ
青い日の吐息が洩れる日記帳
青の時代十五の春の無言劇
青虫のままでは死ぬに死に切れず
さくら咲く青春で良し老いて良し
梅干も昔の青い夢をみる
葉桜をいいなと思うのが余生

海南市　小谷　小雪
弘前市　岡本　花匠
鳥取市　森山　盛桜
米子市　生田　寒之
宇部市　高山　清子
京都市　清水　英旺
鳥取市　吉田　弘子
西予市　黒田　茂代
明石市　糀谷　和郎
岸和田市　中岡　香代
鳥取市　倉益　一瑶
三田市　堀　正和
岸和田市　増田　隆昭
鳥取市　岸本　孝子
寝屋川市　森　茜
鳥取市　中村　金祥
篠山市　酒井　真由
豊中市　松尾美智代
大阪市　古今堂蕉子
松江市　三島　淞丘
鳥取市　斉尾くにこ
堺　市　荻野　像山
堺　市　加島　由一

しょぼくれるボクを嗤うか空の青
妻や子の夢を見ている青テント
青よりも青になりたい蛙の子
後めたさ空の青さに裁かれる
ロゼワイン青い話を聞きたがる
過疎もいい寝転べばホラ青い空
山小屋のハガキに浸みた青い風
露草の心根青のひと滴
青空を仰ぐと愚痴も言いそびれ
海の青戻らぬ人の色になり
新しい家族が増える青畳
宝飾展それより青い空があり
青い空青い力が夢を追う
今にして思えば青い風だった
折れそうなこころで仰ぐ青い天
まだ眠い青いレモンの独り言
泣くことがあほらしいほど青い空
神様のいたずら青い血も流れ
青春の真っ只中は爆発だ
青い鳥わたしの胸で暮らしてる
空の青さが目に沁みるころ郷を捨て
青い鳥卒寿の肩に休ませる
群青の海はトリックかも知れぬ

神戸市　山口　光久
寝屋川市　山本　三郎
島根県　伊藤　寿美
和歌山市　堀　冨美子
海南市　小谷　小雪
鳥取市　吉田　弘子
高槻市　佐甲　昭二
大和郡山市　坊農　柳弘
豊中市　藤井　則彦
芦屋市　竹山千賀子
東かがわ市　川崎ひかり
富山市　有澤　嘉晃
鳥取市　鈴木　一弘
和歌山県　森下よりこ
東大阪市　北村　賢子
鳥取市　永原　昌鼓
大洲市　花岡　順子
出雲市　竹治ちかし
東大阪市　佐々木満作
岸和田市　雪本　珠子
羽曳野市　吉村久仁雄
西宮市　秋元　てる
篠山市　酒井　真由

青い星ここで百までお邪魔する　篠山市　遠山　可住
こだわりを捨てると見える青い空　大阪狭山市　矢野　梓
雨上がる答えをくれた青い空　和歌山市　古久保和子
はやて飛ぶ青い地球がこいしくて　弘前市　髙森　一呑
じっくりと熟成させる青バナナ　大阪市　津守　柳伸
少年の夢は好奇な青写真　和歌山市　福井　菜摘
きちんと守る信号の青と赤　枚方市　寺川　弘一
沖縄の海は青くて哀しすぎ　高知市　小澤　幸泉
青リンゴ上野の駅に着いたころ　札幌市　小沢　淳
青い鳥人の数だけ屹度いる　大阪市　田浦　實
露草の心根青のひと滴　大和郡山市　坊農　柳弘
青春のまっただ中にビートルズ　弘前市　稲見　則彦
ふるさとに青い抜け殻置いたまま　西脇市　七反田順子
リクルート自虐の履歴持ち回る　横浜市　小野句多留
青いまま大人になったパラサイト　京都市　桝本　宏子
青い空人恋しさを掻き立てる　岸和田市　雪本　珠子
群青の海第九条を忘れない　堺　市　遠山　唯教
シャガールの青に心が濾過される　枚方市　伊達　郁夫
鳩尾にまだ飼っている青い龍　弘前市　髙瀬　霜石

秀　句

地球から洩れ始めてる青い過去　吹田市　太田　昭
青い空無限の夢を受けとめる　三田市　上垣キヨミ
春の画布夢いっぱいの青い風　大和高田市　鍛原　千里

鉄塔が空の青さに突き刺さり　静岡県　薗田　獏杳
海の色いつも青いと信じたい　池田市　栗田　久子
悠久の青を汚したのは誰ぞ　泉佐野市　稲葉　洋
働いた妻としみじみ青畳　福岡県　林　さだき
ふる里の過去が息づく海の青　神戸市　大島まさる
チリメンジャコの記憶に今も青い海　和歌山市　古久保和子
窯の中青磁が喋る火は燃える　岸和田市　中岡　香代
青い青い海も狂えば泥の海　河内長野市　植村　喜代
つかまえて見ると青虫泣いていた　シドニー　坂上のりこ
こんなにも空の青さが重すぎる　三田市　上田ひとみ
青年の拳に燃える一文字　大阪府　籾山　隆盛
ピーヒョロローなんてきれいな空の色　藤井寺市　太田扶美代
泣きに来た海は深い深い青　富田林市　中井　アキ
ふっ切れて空の青さがなお青く　芦屋市　黒田　能子
振り出しに戻れとばかり青い海　大阪市　髙杉　力
林から森へ手渡す青い風　弘前市　髙瀬　霜石
さあ何かしたらどうかと青い空　松江市　石橋　芳山
青鬼になりたいと言う赤い鬼　田辺市　岡本　昇
真青な空に隠れていた答　大阪市　古今堂蕉子

秀　句

青いガラスの心を割ったサクラチル　米子市　政岡未延子
三陸へ群なして飛べ青い鳥　岐阜市　平野あずま
ソロバンを避けて掴んだ青い鳥　米子市　林　瑞枝

主幹・理事長の選任について

川柳塔社

今年は主幹・理事長の改選年に当ります。

立候補者は下記の「主幹・理事長の選任に関する規則」に基づき期間内に事務所（06-6779-3490）へ申し出て下さい。

総　務　部

主幹・理事長の選任に関する規則

1　主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行う。ただし､会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。

2　主幹・理事長を選任するための投票は２年ごとを原則とする。ただし立候補者が一人の場合には選挙は行わず無投票にて選任する。

3　主幹・理事長が退任 (定年を含む) する場合において後任の立候補者がない場合には、主幹、理事長、副主幹、副理事長が協議の上、次期候補者を推薦する。

4　複数の立候補者がある場合には選挙により決定することとし、最高得票者を当選者とする。

5　主幹・理事長の立候補資格は、同人歴 10 年以上の者とし、同人 15 名以上の推薦を得た者、または現任主幹、理事長、副主幹、副理事長協議の上推薦を得た者とする。

6　立候補の受付は、７月１日から 10 日までに川柳塔社事務所総務部宛て必着とし、投票は７月中に所定の用紙によって行う。

7　この規則は、平成 23 年７月７日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

敏感

岸本　宏章選

花粉症予報聞いてもクシャミ出る　篤
明日は雨膝が疼いていますので　千代子
風評へ敏感になる夏野菜　(渡)富子
敏感に季節の変化知るお肌　千鶴子
円高へすぐに反応する株価　正和
老体に寒暖の差がよく応え　(中)章子
いち早くおめでた見抜く母の愛　政勝
温度差に敏感でない娘の衣装　一弘
娘が嫁ぐアンテナ少し高くする　捷也
母の手で抱いて泣き止む子の五感　注湖
蝿叩き取ってくる間に逃げる蝿　(福)英子
損得に敏感すぎて嫌われる　すみ子
血圧計見るとトクトク音がする　(岸)孝子
指先が触れて全身血が走る　朝子
座禅堂僧が背中に来る気配　慕情
受験生抱えピリピリする周囲　玄也
啓蟄にまず水虫が目を覚ます　好文
一波乱気配察して席を立つ　正彦
シルクしか合いませんのよ柔肌で　俶子
ひとりぼっち敏感になる夜の音　歳子
敏感な舌に消費の期限聞く　久仁雄
下馬評へ耳長くする異動時期　蜂朗

あの日からちさい揺れにも身構える　(鈴)いさお
好きだから心変わりは目でわかる　真澄
目と鼻がすぐに花粉をキャッチする　(谷)久美子
言い分の半分きいて打つ先手　茶子
以心伝心愛されてると感じた日　賢子
流行に敏感らしい細い脚　昌鼓
一寸した変化も気づく倦怠期　圭一郎
舌肥えた客を迎える肩の凝り　美千代
傷跡がもうすぐ雨と告げている　深雪
家計簿に圧力かける消費税　唯教
敏感に種は大地の時を知る　黒兎
敏感に世相をキャッチする財布　泰女
目の動きだけで返事が読みとれる　正雄
百人の中でも分かる君の声　芳山

佳

招かざる客と素振りですぐ解り　遡行
禁煙中敏感になるけむりの輪　奮水
両親の不和に傷つく幼い眼　まみ子
生きている証拠アイタタ・アイタタタ　霜石
間際まで響く太鼓でありたいな　扶美代

人

敏感にこころの襞を写す顔　菜摘

地

菜の花が咲いてますネと白い杖　(志)千代

天

逸早く母がおめでた察知する　**薗田猿沓**

軸

マスクした鼻を狙って舞う花粉

ハーモニー

寺川　弘一選

父はバス母はアルトのハーモニー　倫子
妻主演夫助演のマイホーム　一兆
うっかりとちゃっかりがよくハモる嫁　愛三
産声は神が贈ったハーモニー　(岸)孝子
子が出来てやっとハモって来た夫婦　(片)忠
ハーモニー楽しむ父子ハトポッポ　一風
二重奏もう迷わぬと決めている　扶美代
ハーモニー少し乱れて倦怠期　千鶴子
妻と娘がハモって僕の出番消え　久仁雄
ソプラノの美人が一人おりまして　(志)千代
我が家にはソプラノだけが取り仕切る　(七)順子
葱きざむ音にもハモる朝の妻　ばっは
クロワッサンコーヒーはラテ妻の声　美津子
夫婦って丸と四角のハーモニー　正彦
たっぷりの年月かけたハーモニー　よしみ
スローライフ夫唱婦随のハーモニー　柳弘
ハーモニー何とか保ち金婚へ　毅
しあわせの笑いをハモル家族の和　(山)節子
割れ鍋の役をソツなく五十年　四郎
老老の介護が醸すハーモニー　淳司
坊さんの読経に合わす低い声　宏章
仏生会読経の僧のハーモニー　(高)道子

ヂヂとババ今日も仲良く般若経　一泉
永平寺僧の和声が心地好い　慕情
声合わせみんなで歌う卒業歌　輝夫
降り出して待ってましたと蛙鳴く　(稲)洋
山菜の芽吹き音符を聴いている　次根
ハーモニー一つフラットつけてみる　雨奇
ピリ辛も添えてほどよいハーモニー　菜摘
雨だれが奏でる春のハーモニー　強一
直立不動ハモっていますチューリップ　ひろ子
ブータンの勉強したいハーモニー　堅坊
ハーモニー取れてる雨だ嬉しい日　捷也
米と水清酒育むハーモニー　黒兎
晩酌に酒とスルメのハーモニー　(鈴)いさお
とくとくとく徳利にハモる喉仏　敏治
かみしめるパンとチーズと白ワイン　まみ子
佳
年金とハモる歩幅で生きている　せつ子
夫婦円満子は真っ直ぐに伸びている　茶子
掛軸に備前の壺の和の世界　俶子
ハーモニー乱した杭が叩かれる　千休
一人だけ外れてるのがよく分かる　(江)勝弘
人
ユニクロで孫とお揃い買ってくる　正和
地
珈琲にミルクを入れるように説く　霜石
天

クラシックみたい妻とのハーモニー　吉岡　修

軸
夕飯に家族が揃うハーモニー

ひたむき

森　茜選

ひたむきに生きる背中を子に見せる　勇
「はやぶさ」の地球を目指すひたむきさ　孔一
今はただ追い越すことに棒グラフ　一兆
蝉しぐれ時間が惜しいかのように　像山
古里へ鮭は激流遡る　あずま
ご主人の危機ひたむきに知らす犬　賢子
アルバムに一途な頃の妻が居る　比呂朗
ひたむきに老いと向き合う万歩計　慕情
ひたむきな愛の虜になったバラ　朝子
ひたむきな球児が集う甲子園　弘風
ひたむきな父の頑固が生きている　婦美子
ひたむきの愛示された両陛下　輝夫
清らかな瞳に合って叱れない　螢
泥を這い一途に守る千枚田　(渡)富子
ひたむきに夫婦で守る先祖の地　雅枝
ひたむきな愛も淋しい親離れ　唯教
ひたむきな態度が私語を黙らせる　保子
ひたむきにのみを打ち込む石仏　伊津志
ひたむきに誕生を待つ十ヶ月　小雪
ひたむきな汗にやさしい春の風　菜摘
黙々と職人技を盗む弟子　裕之
嘲笑も非難も聞いてない背中　次根
ひたむきに走り周りに誰も居ず　かずみ
ひたむきに生きひっそりとさようなら　強一
努力に努力オリンピックの出場権　愁女
誰の手も借りずにトイレ済ませたい　遡行
転んでも転んでも未来信じきる　セツ子
一途さでいつかあなたを振り向かす　扶美代
ひたむきに節くれ指が鶴を折る　一風
ひたむきに生きて米寿の義捐金　千歩
ひたむきにパワーを溜めている蕾　俶子
ひたむきな愛が重荷の青レモン　深雪
ひたむきなあなたに欲しかった笑顔　(志)千代
しんどいが回っていたい風車　霜石
万人にひたむきの愛御釈迦様　ルイ子
ひたむきな介護を癒すアリガトウ　黒兎
ひたむきになったら花も咲いてくれ　(福)英子
佳
ひたむきな子育て終えた巣が温い　悦男
腐葉土になって明日を太らせる　千代子
ひたむきがやっと掴んでいる代打　善信
米作り何があってもへこたれぬ　ばっは
食べてねと食べてねと炊く母の粥　(矢)五月
人
うちにしか出来んもんやと町工場　篤
地
富士に湧く百態の雲撮り続け　獏沓
天

ひたむきに生きる愚直と言われても　鈴木いさお

軸
ひたむきに芽吹く更地の母子草

初歩の教室

題 ― のっそり

鈴木公弘

最初に、目立った傾向から申しあげます。

①中8の句。川柳はリズム文芸という側面を持っていますので、五七五の音律は大切にしましょう。

②誰のことを述べたかったのか見当がつかない句。川柳ではできるだけ他人事として描かないようにして頂きたいものです。

③断言した句。個人的な背景は読者には分かりません。読み手にも納得できる句にして発表してほしいと思います。

④ちょっとした言語の入れ替えでグレードアップするのに…と思える句。これは、この教室で勉強していきましょう。

【断言句・非断言句の問題点】

原 のっそりも希少価値だよ三男坊　律子
　長男も三男もでしょうか。

原 癪の種動作が鈍いもやしっ子　登美子
　わが子がそうなら、ご自分がなされた養育過程を振り返ってみてください。

原 のそりと車道をノラのお通りだ　真澄
　ノラとは野良犬、野良猫のことですか。

原 のっそりに悪人は無い世の慣　心咲
　泥棒にのっそり入られた話を聞きます。世の習いというのも断定的です。できれば視野を広くするよう努めてください。

【いわゆる同想・類想の句】

原 のっそりと猫が顔出すご飯時　吉太郎
原 のっそりと孫が顔出す夕餉時　弘子
原 のっそりと親しい友が顔を見せ　宏之
原 のっそりとのれんに覗く友の顔　智加恵
　「のれんを覗く」がよかったと思います。

原 のっそりと首だけ伸ばし何方さん　利夫
原 のっそりと蜥蜴首だす彼岸あけ　勝治
原 気づかれぬようにのっそり忍びよる　雄太
　この句では、何が…誰が…とは言っておられませんが、考え方としては右六句と似た思いを感じます。このような同じ発想、似た作品は、示し合わせて作ったものではありませんが、たくさんの句の中には必ず存在します。私がよく用いる、いわゆる「小道具」＝猫・友・首・蜥蜴などの違いはあっても、同士討ちにされて没になりやすいと思ってください。他人も同じことを考えているかもしれないという想定のもとに句作されることをお勧めします。

【正確な表現によって改善される句】

原 のっそりと見せて寄切り土俵際　妙子
添 のっそりと見せて寄り切る土俵際
原 春の風のっそり招く老の部屋　俊子
添 春の風こっそり招く老いの部屋
原 のっそりとゆっくりの微妙な違い　紀雄
添 のっそりとゆっくりの微妙な違い
原 のっそりと歩こう先きは見えている　温子
添 のっそりと歩こう先は見えている
　以上の三句、丁寧に書いてくださっていたら、入選でした。

原 のっそりとしてるがそれがいいところ　眞砂子
添 のっそりとしているそれがいいところ
原 のっそりと起きて寝てよしひとり者　正二
添 のっそりと起きても寝てもひとり者
原 寝坊してのっそり起きて大あくび　治子
添 寝坊してのっそり起きた大あくび
　「寝坊して」「起きて」というように「…して」を重ねていくと状況説明になりやすいです。

原 のっそりと太刀持ちつれて土俵入り　和幸
添 のっそりと太刀持ち連れて土俵入り
原 ロボットの足音響く近未来　きっこ
　この句はしばらく考えさせられました。ロボットが歩くとき足音が「響く」ことはないだろうか、という点でした。現在開発されているロボットの足は概して無音です。しかし、近未来に疑似人類化して、足音を立てながら闊歩する姿が想定できなくもな

いでしょう。難しい問題ですので、ロボットがのっそり歩くかどうかの結論は、その時に出すこととしましょうか。

原 陽だまりを亀虫這って匂ひ出す　冷子
添 陽だまりをカメムシ這って匂い出す
原 のっそりでも自分で出来る素晴しさ　武臣
添 のっそりでも自分で出来る素晴らしさ

【準入選句】

のっそりな「妻」と歩んだ50年　裕美
一人居りのっそり動く癖がつき　紀美恵
着ぶくれて僕のっそりと茶の仲間　孝明
のっそりの母から貰う急ぎぐせ　安子

面倒でも「癖」と書いたほうが読み手に伝えやすいと思います。

のっそりと一歩踏み出す退院日　開子
のっそりと鎧を脱いでゆく加齢　(畑)節子
のっそりでも動けるような体脂肪　一兆
うらやましのっそり動くなまけもの　滋彦
のっそりとしていてどこかにくめない　弘光
のっそりと家を出て行く猫の意図　のり子
のっそりと動く雲見て洗車する　洋一
のろのろと歩いちゃ駄目よ老いが来る　堅坊

できれば「のっそり」で書いてほしかったですね。

疾風にのっそり這ってしがみつく　(安)由美子

「どんな」「なんの」疾風かが明確になっていましたら入選です。

音なき音蛇のっそりと木登りす　ミヨノ

着眼はOKです。この句「音なき音のっそり蛇が木に登る」としてはどうでしょうか。ただ「音なき音」と「のっそり」は同じ状態を表すように思います。どちらかにするべきでした。

空腹でのっそり動く朝の父　(山)久子

【入選句】

なんとなくのっそり見える肥満体　雅信
孫帰りのっそり浸る湯にアヒル　正子
のっそりと歩いて老後かいま見る　英男
春の庭猫ものっそり気怠げに　秀子
風抜ける窓辺に猫がこっそりと　(石)久子
はにかんでのっそり歩く元子役　憲
のっそりと父の時代の飛行船　嘉晃
のっそりの影で努力のかたつむり　ひろ子
ロシヤでの二人の巨頭のっそりと　一泉
のっそりと見えてしんどい太極拳　孔一
のっそりとパジャマで過ごす五月病　義雄
のっそりと窓から覗く無礼者　真由
のっそりと遅刻してくる無礼者　宏造
のっそりと論議重ねてあと戻り　定廣
のっそりと過疎の村にも春の風　美知江
のっそりが絵になっている三代目　篤
雨の日はのっそり英気蓄える　こずえ
のっそりと停止原発不気味にも　(白)淑子
のっそりと迷わず前をゆく牛歩　一子

【佳句】

のっそりでよいわ生きてほしいのよ　美紗子
のっそりと突っ立つビルの地鎮祭　(高)道子
絞ったらのっそり知恵がまだ回る　エミ
のっそりと知らぬ間にくる老いの影　(株)玲子
東倉里にのっそり立った不審物　寒之
お隣の隠居のっそり何処へ行く　秋星
のっそりと生きる人生悪くない　(高)弥生
臨月の歩きのっそり誇らしげ　孝代
妥協して父がのっそり立ち上がる　(楠)富子

【今月の推薦句】

のっそりと見えて素早い身の熟し　谷　久美子

なんと言っても「熟し」が効いています。

のっそりと妻の後からカート押す　大西　晴雄

カカア天下は増えていますよ。

のっそりと父が出て来て座が締まる　能勢　利子

【私の句】

四面楚歌のっそり帰るほかはなし
やる気出るまでのっそりと穴暮らし

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

≪私見の一部再検討について≫

今まで既婚女性が自分を「妻」と書くことに異論を差し挟んできました。しかし、

のっそりと妻と歩んだ50年　裕美

を読んで、「妻」には「妻の座」という意味が内包されていることに気付きました。今後はよく吟味して評価します。

秀句鑑賞

同人吟　藤井則彦

―5月号から

さりげない〝オノマトペ〟の味に魅せられ膝を打った句を鑑賞させていただきました。

オノマトペとは日本語で言う「擬音語」と「擬態語」を総称した言葉で、最近少しずつ知られるようになってきました。「擬音語」は生き物や物事が発する音を字句で模倣したものであり、「擬態語」は状態や感情など音を発しないものの模倣であると言われています。これら多種多様なオノマトペのお蔭で私たちの暮らしは随分彩り豊かなものになっていると言っても過言ではありません。

川柳の作句においても、オノマトペを駆使することで表現にアクセントがつき、内容もより豊かで余韻が残るものになっています。

年金の枠でちんまり生きている

両川無限

「ちんまり」とはつつましやかにして情趣の籠った年金暮らしを言い得て妙、読むほどに実感が湧いてまいります。私も遅まきながらあやかりたいものです。

旅先でひょいと出会ってからずっと

鈴木いさお

「ひょいと」は前触れも何もなしに出会う様ですが、その後もお付き合いされている光景が想像を逞しくさせてくれます。「ひょいと」と「ずっと」の息がよく合っています。

眠れぬ夜銀河へぶらり一人旅

三宅満子

まあいいかばかりでぶらり生きている

堀正和

これといった目的もなく気軽に行動するのが「ぶらり」ですが、これは心身ともに健康でないと出来ないことです。一人旅も「まあいいか」も人生を達観された生き様です。

すんなりと認めたのではありません

高島啓子

過去の経緯や今後の見通しもあってあの場ではOKをしたものの、貴方だけは私の胸の内を分かって下さいねという、目に見えぬ真情の吐露なのでしょう。私もこういうことを時々言われました。懐かしいことです。

触れあった肩ふんわりとした誤解

松本文子

天命と思いふんわり受け止める

藤原ほのか

ひとひらの雪もふんわり露天風呂

二宮紫鳳

「ふんわり」は物が軽く浮き上がったり舞い漂う様子、更には柔らかい円やかな情景も表わしています。句想は異なりますが、触れ合う肩に感じるそこはかとない誤解、天命を穏やかに受け止めている姿、心安らかな露天風呂の情景などいずれも目に浮かぶようです。

くるくるとスマホの上で踊る指

峯村勲弘

車中などで指を器用に動かしてスマホを操っている若い人をよく見かけますが、愈々中高年向けの開発が本格化しそうなので大いに期待しています。ただ、個人情報の流出や新種のスマホ・ウイルスには要注意です。

女系家族まったりとした刻を持つ

籠島恵子

「まったり」は味・香りなどが甘く豊かな様を表わしますが、ここでは柔らかい中にもこくのある雰囲気を指しています。久し振りに耳にするいい言葉で、そんな刻を持たれる作者の姿が彷彿としてまいります。

務め果してポトンと落ちた木守柿

寺川弘一

木守柿は翌年の実りを願って木に一つ二つ取り残される柿ですが、見事たわわに実ったところを見届けてから静かに落ちてゆく姿を「ポトン」の語で巧みに表現されています。

本人をアハハフフではぐらかす

飛永ふりこ

時にはアハハと大きく笑ってみたり、時にはフフフと含み笑いをしてみたりしての両構えで臨むと、はぐらかされた当の本人は反論もできずに俯いてしまいそうですね。

熟年のデートゆったり風まかせ

小林わこ

ゆったりと余生を送る笑い皺

左右田泰雄

「ゆったり」は「ゆっくり」と違ってゆとりのある寛いだ様子です。今からでもこんなデートをしてみたいし、笑い皺が刻まれるほどの余生を送りたい気分になってきました。

犬だってそろそろ老眼鏡がいる

山本希久子

ひょっとして飼犬が目をしばたいているのか、反応が鈍くなってきたのか、いずれにせよ細やかなお心遣いにはホロッとさせられます。ぜひ眼鏡店に同行して上げてください。

ゆうらゆら揺れてるうちに気が変わる

小川てるみ

私も時々気がむしゃくしゃした時など流れる雲を見ながらハンモックで揺られてみたいなと思うことがよくあります。別世界に行ったような贅沢な気分になれるのでしょう。

親の無い子等すくすく育つよう祈る

加門萌子

雑草もすくすく花に負けてない

松原寿子

先日も東日本大震災で親を亡くされた方の気丈な姿を見て胸を打たれたことです。又「雑草には皆名前があるのです」と言われた昭和天皇の温かいお言葉を思い出しました。

父の愛メロンきっちり五等分

籾山隆盛

小さい子どもだって貰うメロンが他の兄弟より小ぶりだと不公平感を持つものです。メロンに託したお父さんの均等の愛に子どもたちはさぞや万々歳だったでしょう。

修飾語要らぬさらりと生きてゆく

西谷悦子

気負いやくどさが無く、滑らかさと軽快さをふりまいて行ける余生の素晴らしさは誰もが追い求めていることです。今はギスギスした世の中だけに余計そう思うのです。

保護色になってぴったり妻の後

稲見則彦

あれそれでぴったり合っている呼吸

福永ひかり

「ぴったり」は隙間なく強く付き添う様子ですが、前者は濡れ落葉ならぬ濡れ若葉の風情がありますし、後者は代名詞で十分にコミュニケーションがとれる羨ましいご夫婦です。

おっとりとしている人の七変化

川崎ひかり

いい環境に育ち、競争心があまり無かったり、他人を警戒する気持ちの少ない人は一見安心できそうですが、中にはカメレオン顔負けの人もおられますね。

ずっしりと膝に這い寄る児の匂い

小白金房子

膝に這い寄ってくる児の安心感の重みが匂いとともに肌に伝わってくる句です。目を細めながら児を抱き上げておられる雰囲気がほんのりと漂う微笑ましい光景です。

このように〝オノマトペ〟はその語感と拍子とを縒り合わせて程良いリズムをつくり生き生きとした描写を醸し出しています。「音の絵」とも「声の肌理」とも言われるだけに句を音読されると感懐も一入かと思います。

秀句鑑賞

―水煙抄

―5月号から

吉村久仁雄

あの日からまだともうとの一年目

針生和代

東日本大震災から一年が過ぎました。被災された方の思いは「まだ」と「もう」とが複雑に錯綜していることでしょう。作者と同様、私たちも被災者に寄り添っていかねばなりません。

つもりだけ一杯詰めて旅に出る

神野千恵子

あれも観たい、これも食べたい。出かける前の高揚した気分、欲張りな思いに浸るのが旅の楽しみの一つ。結局は疲れて、のんびりしようとなりますが。

花の咲く道を探して老い二人

岡村孝明

老夫婦の散歩はゆったりと、出来たら二人で花を愛でながら歩きたいもの。街中ではなかなか見つかりませんが、路地に入ると四季の花が歓待してくれます。

開いたり閉じたりはしゃぐランドセル

近藤治子

買ってもらったランドセル、孫は喜んで開けたり閉じたり、時にはおもちゃを入れたりします。そのはしゃぎぶりが何とも微笑ましい。

忘れた訳じゃない強くなっただけ

上田ひとみ

つらい経験を忘れたのではなく、乗り越えたからもう話題にしない。そんな強い人間に私はなりました…。

アイライン引いて目力強くする

巌田かず枝

アイラインは美しくみせるためだけではなく、戦いを前に目力を強めるためだったのか。目からウロコの思いです。

停電で一句浮かんだ雪明り

井上つよし

大雪が原因で停電、雪国の人は慣れたもので慌てず騒がず。一句浮かぶほどの余裕がむしろ清々しく感じます。

さよならの涙の先にある自由

田中由美子

別れは悲しいものですが、一方でしがみが無くなり、解放感を感じるのも事実。次の出会いまで自由を楽しみましょう。

時々は自分も褒める事にする

山根邦代

自分を褒めるのは勇気がいります。ぐらつく自信を鼓舞するため、時々は勇気を持って自分を褒めましょう。

当り前みんな違ってみんないい

渡辺芳子

個性はいいものだ、当り前のことだと言い切るまで、作者は紆余曲折、様々な経験をしてきました。

戦争の話を拒む母の耳

佐々木勇

戦後六十七年経った今でも、戦争の話を拒む母。改めて、戦争の悲惨さに思いを致さざるを得ません。

飴一つもらって和むバスの旅

安達厚

知らない人と一緒のバスツアー。おばちゃんが飴を配り、バスの中が一気に和みました。ありがたいことです。

どことなく手配写真のような顔

高木道子

どんな顔かと言われたら具体的には答えられませんが、なるほどと判ったような気になります。えっ、私の顔？

18 十四字詩と向き合う（1）

最近、七音七音という短い形の句を見かけるようになってきました。川柳マガジン誌でも「十四字詩」というタイトルで投句欄を設けていて、多くの川柳作家が挑戦しています。同誌四月号で秀句として選ばれたのは次の四句です。いずれも課題は「次」で、選者は佐藤美文さんです。

次の電車で春の真ん中　真羽　貴子
次のページに逃げる犯人　前田　高徳
次の駅まで夢見続ける　オカダキキ
2次会まではあったアリバイ　吉野　和夫

私は、この「十四字詩」という欄を知ってはいましたが、川柳とは全く別のジャンルであると割り切っていましたので、興味もなく読もうという気もしませんでした。

ところが、四月の日川協常任幹事会の議題の一つに、この形の句が取り上げられ、日川協として呼称をどうするのか、どのように取り扱うべきかが議論されました。そこで初めて、「私自身はどのように向き合うべきなのか」を、考えなければならないと気付かされました。そして、このことは、皆さんも選者を務めるときには否応なく対応を迫られることですので、この欄で二回に分けて考えてみます。

実は、この七·七という形の作品については、「さて、どう対処しようか？」と思案した経験があります。「川柳文学コロキュウム」の二月例会に出席したときのこと。「早い」という課題の選を仰せつかった中にこの形が数句混じっていました。「これは十四字詩ではないか？　川柳とはジャンルが異なるから没にするか…」とも思いましたが、結局、「破調の一種と受け止めて、内容が良いのは採ろう」と、抜いたのが、日本の経済状況を端的に述べた次の句です。

早い話がアジアのギリシャ　井丸昌紀

もちろん、呼名を聞くまでは誰の句か分かりません。井丸さんは塔社のベテラン同人で、特に十四字詩に傾注されているわけではなく、結果的にこの形に収まったのでしょう。そういえば、麻生路郎師にも七·七の作品がかなりあります。

二階を降りてどこへ行く身ぞ
嘘をまろめて　書斎けうとし
悪運つきず　資本家の端
書斎はいいが　いた事はなし
灰をみつめて　借金の嵩

他に、「しらじらしき悔みの淀まず（六·八）」「木の葉をくっつけ繕をむさぼる（八·七）」等、七·七と違う形がありますので、右五句も、「七·七」を意識して作ったのではなく、たまたまバッチリ決まっただけではないかと思われます。

ただ、この形は決して新しいものではなく、江戸中期の雑俳集「武玉川」（十五編迄は慶紀逸〔けい·きいつ〕編）に、「恋しい時は猫を抱きあげ」など、多数入っています。

このような歴史と照らし合わせますと、麻生路郎師の作品は、ただ単に「七·七でうまく収まった」というものではなく、この武玉川を意識して作ったとも考えられます。

ともあれ、今後とも増えてくるであろうこの形に対して、どのように対応するべきかは次号に回します。

『麻生路郎読本』余滴

(9) 大正15年の路郎と『旅人』作品

楽原道夫

大正15年は、路郎が「川柳雑誌」を創刊して三年目にあたる。大正13年の12月号から創立同人の吉川唖人の名が消える（大正14年10月号から復帰）が、大正14年の2月号から、「灰」を廃刊した井上刀三・林田馬行・塚崎松郎・平井光太楼が参加、馬行・松郎・刀三は編集にも関わる。更に12月には、三好革郎（本名正明）も参加する。三好は、大正8年路郎が主幹を務めた「商業の大日本」で机を並べていた旧知であり、路郎に漫画家柴谷柴舟を紹介し、路郎最初の著書『川柳漫画 懐手』（大正9）出版の労をとった人物である。当時は、「映画と探偵」という雑誌を出していた（『麻生路郎読本』4頁左上に野口雨情を囲む写真を掲載した）。

この大正15年に、路郎は三度も上京している。

一度目は、1月26日（火）夜行で上京し、2月7日(日)帰鳴した（当時路郎は、兵庫県武庫郡鳴尾村に居住）。「川柳雑誌」3月号「遅日荘柳談會(第一回)」(筆者註—柳談会は、路郎居での川柳勉強会）に、〈東京を夜行で立つて、七日の朝歸鳴した。第一回柳談會には、私が何か話す約束をしておいたが碌に眠むれなかつたのと、旬日餘りを旅にあつて俗用に忙殺されてゐたので、これといふ面白い話をみつけておく間がなかつた。それで東京で忙しいうちに會つた柳路、久良岐、信子、雀郎、劍花坊、維想樓の諸氏のことなどを雑談的に話した〉とある。

二度目は、4月24日（土）夜行で上京し、5月4日（火）帰鳴した。

6月号「近作」

柳路、千代二の二君が宿へ訪ねてくれた。三人で話してゐると東京にゐるやうな氣がしなかつた（旭館にて）

東京語大阪辯の宿もよし

「編輯後記　遅日荘にて」に、〈▼四月廿四日、原稿を印刷屋へなげ込んでそのまゝ東上したので、五月號は宿屋で寢轉んで讀んだ。何んだか餘所の雑誌を讀んでゐるやうな違つたよろこびに接した。(略)▼東京では、かなりいろんな方にお目にかゝれた。その中の半數は初對面だつた。大變皆様に御迷惑をかけました、感謝いたして居ます〉とある。

そして、三度目は11月3日（水）に上京し、8日（月）に帰鳴した。12月号19頁の上段に次の写真があり、下段に記事がある。

写真は西村哲夫氏提供

或るビルディングの
階上にて（東京同人小集）

—靴と近眼—

ゴム靴の人生僅か五十年　路郎
靴音は高しどつかの歸りなり　同
近眼の博士は握手したばかり　同
アパートでとどのつまりは靴をぬぎ　千代二
靴音をきゝわけてゐるむつまじき　同
帝展でちかめの看守にとがめられ　同
白靴で今日大阪の土を踏み　駒人
米久で日曜といふ靴を見る　同
ゴム靴のちと無遠慮な水たまり　同
社長ふと靴が汚ないなと思ひ　柳路
曾我廼家に見る近眼の面白さ　同

路郎先生が十一月三日に來京せられて、四日の夜は拙宅に一泊されいろ〳〵川柳の談や同人の消息を伺ひました。七日の日曜は新に同人に加はつた千代二君と千葉から中野に移つた駒人君と小生と三人で先生を迎へて小宴後他に席を移して同人小集をひらきました。夜に入つてから記念の撮影をしました。そして七時三十分の下關行で三人は先生と暫らくの別れをいたしました。何れ來春は三人で出かけることを約しながら。（東京支部岩崎柳路）

【寫眞說明】向つて右から千代二、路郎師、柳路、駒人（筆者註—写真右下に、(S.ARITA TORANOMON) の文字が見える。アリタ写真館の住所は、東京芝区明舟町二〇）

「編輯後記」に、（▲私は十一月の上旬に又々上京した。勿論公用で出かけるので、今度は誰に逢つて、誰に逢つてと胸算用をしてゐることも全く外づれて思ふやうにお目にかかれずに又の機會を思ひながら車上に搖られながら歸鳴する例になつてゐる。其代り意外な方にお目にかゝれる喜びのあることもあつた。▲川柳すゞめ會へ途中から顔出しをして同會の人達や濱の人達や村田鯛坊氏に逢へたことなどは、その喜びの一つであつた。▲東京支部柳路の熱心なのと、駒人が中野に轉じたのと新に檜山千代二君が同人となつたので一層の堅實さを示すことになつた。七日には私のために句會を開いた。柳路は未だ〳〵東京に同人を殖やすと云つて力んでゐる。私は四日の夜柳路居に一泊して、朝窓をひらいて富士を見せられたことを思ひながら、その好意を謝してゐる）とある。

岩崎柳路は、「川柳雜誌」創刊時からの同人である。本名武夫。当時は、東京市芝区愛宕町の大成社で特殊電気器具販売業の職にあった。後年大陸に渡りキャバレーを経営し、路郎の鮮満旅行（昭和9年）・北支蒙疆旅行（昭和13年）の一切の面倒を見た。雅号は、路郎の「路」の字をもらったものだろう。

三度の上京は、すべて仕事のためであったが、その合間を縫って東京柳人との繋がりを深めようとしたことがうかがえる。当時の路郎は桃谷順天館の広告部にいたと思われる。『麻生路郎読本』の「麻生路郎年譜」大正7年の項に、筆者は次のように記した。

『株式会社桃谷順天館創業百年記念史』（昭和60年6月・桃谷順天館）の「百年史年表」によると、この年に「川柳の岸本水府、麻生路郎、広告部に文案家として入社」とある。月給二百円。「麻生路郎物語（11）」の「蔑乃書簡」に、「路郎が桃谷へ入社したのは夕凪橋へ移転してからのことです」とある。桃谷順天館が営業所と研究所を市岡元町に移転したのは大正11年4月であり、蔑乃の記憶違いか。

大正7年の路郎は、葵書店（古本屋）を営んでいたので、『株式会社桃谷順天館創業百年記念史』の記述は誤りだと思われる。路郎は大正8年古本屋を廃業して「商業之大日本」主幹を務めるが、11月で退社。その後は、パトロンに研究費（生活費）を出してもらって

外国為替の研究。大正9年の秋には大正日日新聞経済部主任として就職。大正11年からは著述業に手を染める。大正日日新聞のあと毎日新聞に勤め始めたのが何年かは明らかでないが、辞めたのは大正12年の3月。「麻生路郎物語（11）」に、〈路郎が外国為替の研究を止めてから桃谷順天館の仕事をした〉（「嵐を怖れぬ路郎」葭乃）とあるが、外国為替の研究を止めてからすぐ桃谷順天館に勤めたという意味ではないだろう。「葭乃書簡」に、〈路郎が桃谷へ入社したのは夕凪橋へ移転してからのことです〉とあり、筆者は〈葭乃の記憶違いか〉と書いてしまったが、これは、『株式会社桃谷順天館創業百年記念史』の記述を鵜呑みにしてしまった誤りである。お詫びして訂正しておく。大正12年3月に毎日新聞を辞して以降、桃谷順天館に勤め始めたのだと考えられる。

それでは、具体的にはいつから桃谷順天館に勤め始めたのか。それがはっきりしないのである。「川柳雑誌」大正13年12月号「編輯後記」に、〈▲いよ〳〵十二月號となりました。これで月刊を斷行した譯です。私達のやうに別に本職をもつてゐるものにとつては月刊斷行は仲々容易ではないのであります〉とあるが、大正14年4月号「川柳家の戸籍調べ」では職業を〈著述業〉と答えている。路郎は、大正11年から13年にかけて子供・学生向けの多くの書物を刊行した。大正12年3月に毎日新聞を辞して間もなく桃谷順天館の仕事も始めたと思うのだが、大正14年のこの時点での路郎の意識としては、本職はまだ著述業であった。大正14年11月号の巻頭言「川柳と自然」に、〈私は毎日新淀川の鐵橋を阪神電車で渡るが、その時は必ず本から眼を離して大自然に接する〉とあり、電車で通勤していたことがうかがえ、これは、桃谷順天館に勤めていた時のことを記したものに間違いないだろう。

大正15年に「川柳雑誌」誌上に発表された句で『旅人』に収録された路郎の句と、『旅人』には収録されていないが筆者が注目した若干の句を記録しておく。筆者が注目した句は句の上に○印を付す。句の下に何も記していないのが「近作」から。句会の句で題が分かるものについては下に記しておく。用字・仮名遣いは、可能な限り「川柳雑誌」掲載時のままとした。

・1月号

親切をおしつけた事さへも悔ひ
善人が滅びつゝある寂しさに
炭ついで炭ついで女をうらむ
一ンち違ひで廿圓が死んでしまつたどの子もどの子も息災でお元日

11月8日句ひに關する川柳會
○寒さは寒し支那街の豚の鼻
12月5日（事務所小集）
十二月首だけ入れて呑んで行く

・2月号

死にともなかつたやろ娘のまゝで置き
新しい後家はぶべつのなかに立ち

・3月号

1月20日新春川柳大會
襯衣一枚で書いた勞働運動史「襯衣」

・4月号

逢ふだけでよかったころの菜種咲き
てんてこ〳〵妻の襷がけを見てゐる雀
長靴がへびにも見へて灯がともる
家へ歸れば社長は社長僕は僕
○二階はさびしふと取りだして見る鏡
二階を降りてどこへ行く身ぞ
2月14日本社二月例會
いつゞけのもう刺身でもなかりけり「刺身」
友達をみんなだまして南に居「雑」

・5月号

3月3日本社例會

國の父に似ていて車掌きりそこね「車掌」
苦勞がる程に女房のやせてゐず「苦勞」
品切れで向ひへ這入るとこが見え
「品切れ」
品切れにそのまゝそこへ話し込み「〃」

4月1日本社例會
馬鹿な話だ傘一本を持ち廻り「雨傘」
どもの兒にみんな云はさぬ親心「ども」
腰が碎けたやうに娘の舞ひ納め「腰」
○豚の子のゆくところまでゆく氣なり「豚」

・6月号
朝陽の令閨が亡くなつた。四月に二女を擧げてよろこび、五月には彼の女自身幽明境を異にす。無常迅速といふべし。
子のことで最後の唇が動きしか
『旅人』では、「朝陽の令閨を悼む」の前書きに変更。

5月4日本社例會
代診はバットをさして立ち上り「代診」
大男を母はこの子にしてしまひ「大男」
○眼に映るものみな青し蛙の子「蛙」

4月17日神戸句會
いのちさへあればと思ふのみ仲居「命」
○雲の外映らぬ川のうらゝかさ「雲」
軒店へ昨日や今日の客でなし「軒店」

・7月号
6月1日本社例會
骨抜きにされた毒婦を諦めず「毒婦」
弟の厄介ですと吸入器「病弱」
居候が今は高座に生きてゐる「雜」

5月26日六厘坊忌
濱邊まで見にやらされる許嫁「濱」
犬洗ふことも仕事の濱の家「〃」
濱へ出りや隣りのメリーさんも出る「〃」
相談をして洋服を着る養子「洋服」

6月13日第四回柳談會
○手紙を書いて山を降りぬ

・8月号
○見上げれば二階に椅子の端が見え
のろけることを姉も妹も
きつちりと坐はれば膝の女にて
このごろの疲れさんでりやは重し
すべりんこ親は涼しいとこで待ち

7月3日本社例會
板の間に寢たがこの頃金を出し「資本家」
醜男の哀れ使はれ損になり「醜男」
戲曲に生きんとすと云いぬソーダ水
「ソーダ水」

六厘坊忌 詠草（殘稿）
母の事思はぬにあらず泊つて來
7月11日第五回柳談會雜吟互選の五点句。
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
同じ五点句に、〈逢ふて戻つて父母に手をつく 松郎〉。最高の八点句は、〈重荷下ろした父の死顔 ひろし〉。

・9月号
見渡すとユダのこゝろをみんな持ち
誘ふても呉れぬほど髭のびてゐる

8月14日川柳涼み船
廣告塔一と雨降つた中に立ち「廣告塔」

・10月号
8月12日第六回柳談會
天井にいつまでおさへられて生き

9月3日柳珍堂忌
形見分で下女孕ませた事が知れ「形見」

・11月号
9月10日第七回柳談會
校長と意見の違ふ父をもち

9月23日柳翁忌句會
かなもけりも作れず蟲の聲ばかり「虫」
蟲なくを哀れとも見ず妾住む「〃」

・12月号
漫筆帳より（万よし報）
ビールビール秋が來たとて秋が來たとて
[付記] 引用句の中には差別語が用いられているのもあるが、資料的価値からそのままにしたことをお断りしておく。

エッセー

民族の詩歌（1）

三好専平

唐突であるが、この春、奄美大島に行った。奄美出身の短歌の友人の世話になった。一日中「島唄」を車の中で聞いた。音楽（サンシン・奄美では三味線という）は何となくわかるのだが、その内容は皆目分らなかった。言葉の意味がつかめないのである。ちなみに、「カンツメ唄」（奄美古来の民謡）をご紹介しよう。

嬶歌（かがいうた）（男女が互いに歌を掛け合う）と考えられる。

『ユビガデイ　五
アスイダル　五
カンツメアングワー　七
アスガヨネナレバ　八
グソーガトオリ　七
オンソデフリリュ　七』

基本的に、五七のリズムである。意味は、「夕日が出て、遊んだ可愛い姉御さん、明日の夕方になれば後生だから、また綺麗な振袖を着てきてね」

解説されるとなるほど「日本語」だなあと分かるが、だいたい、平安時代かそれ以後の言葉と土着の言葉と源平時代の落ち武者たちの言葉が混じり合って、こういう方言が生まれたらしい。

「島唄」というのは、沖縄の歌ではなくて、奄美地方の歌であり、この「シマ」とは「縄張り」というぐらいの意味である。集落ごとに歌があって少しずつ違うという。

何故五七なのか。日本語の特質と関係がある。

日本語の特質とは何か。1語が一音節・二音節が圧倒的に多いということである。言葉の九割は「名詞」だといわれるから、自然にその組み合わせが五や七になる。

言葉を連結する言葉もまた一音か二音が多い。

世界の他の言語は必ずしもきっちりと、一音または二音ではない。子音で終る言語も多い。「一語一音」というのは珍しいのではないか。中国語の漢字は、おおむね連母音である。例えば「王」は「WAU」と、連母音。日本語では「オー」と発音する。

日本の詩歌はこの日本語の上に成立した。奄美まで飛ばなくても、万葉集の最初の歌を引いてみよう。

『籠もよ　三
み籠持ち　四
掘串もよ　五
み掘串持ち　六
この丘に　五
菜摘ます児　五』（以下略）

未完成ながら五七の萌芽が見える。この歌は雄略天皇の歌と伝えられるが、その陵は私の住む羽曳野市島泉にある。伝説に近い時代で、何処までが史実なのか疑わしいが。

「籠」は「コ」と一音。「掘る」も「フ」と一音。「クシ」は朝鮮語の「KOS」から来た。もとは一音。

川柳の出現はもっともっと先の話である。

(五) 小名木川・寺町をゆく

「川の水は大川に近い下流で、秋の日をはじいて白くかがやいていたが、振りむいた上流の方、遠く猿江の川船番所のあたりは空の青が真青にそまっている。その川船番所の方に、白い帆を半分だけ上げた川船と、材木を積んだ荷船が近寄って行くのも見えた」(『ささやく河』新潮文庫)と藤沢周平が描く小名木川は、堅川と同じように深川を東西に切り開かれた運河である。川幅は三十間もあり、江戸時代は一里半丁の両岸に道が整備されていたので、季節の良い時には夕暮れ時まで散歩する人が絶えなかったらしい。

万年橋を渡って左に曲がり、小名木川沿いの海辺大工町(現在は清澄町)辺りを歩き、二つ目の橋、高橋をめざす。途中に相撲の北の湖部屋や深川神社などがあった。

高橋は本所深川を南北に結ぶ二つ目通りにある。その地下には都営大江戸線の清澄白川駅がある。高橋を北へ渡った西詰めの一角に岡場所があった常磐町だが、それらしい面影はまったくなかった。

馬鹿亭主貞女を捨て常磐町　(柳多留より)

二つ目通りを南に向かい都立の清澄庭園をめざす。清澄庭園は江戸時代のはじめは豪商紀伊国屋文左衛門が住んでいたところで、その後、大名の下屋敷などに移り変わり、明治維新後は三菱の創始者岩崎弥太郎の所有になって庭園が整備されたが、関東大震災後には東京都に寄付され、現在に至っている。庭園は回遊築山泉水式といい、規模は一万二千坪もあり、大都会のオアシスになっている。

紀の国やみかんのやうに金をまき　(柳多留より)

今日は朝から快晴、少し汗ばむが清澄庭園からさほど離れていない深川江戸資料館をめざす。

この辺りは、いわゆる寺町であり、歴史をもつお寺が続く。深川の寺町は六万坪にも及び、寺院数は七十ヶ所もあるという。その中で、徳川吉宗の孫で、寛政の改革を行った松平定信公のお墓がある霊岸寺に立ち寄る。

霊岸寺の東隣が深川江戸資料館である。体育館のような吹き抜けの建物の中に堀割があって、そこに猪牙舟を浮かべ、川岸には船宿と酒屋や茶店があり、火の見櫓もあった。

裏店には八百屋、魚屋、米屋などか建てられ、その裏には長屋があって、江戸時代の深川の風情をただよわせていた。長屋の間取りは半畳ほどの土間、横に一帖ぐらいの炊事場、部屋は四畳半か六畳一間で押入れは無く、布団は部屋の隅に積んであった。いわゆるワンルームである。狭い路地も通れるようになっており、面白いのは、館内が二十分ごとに昼と夜に変わり、昼は小鳥がさえずり、夜は屋根の上から猫がニャーンニャーンと鳴いていた。ただそれだけの資料館であったが、江戸時代の深川の暮らしぶりがよくわかるようになっていた。

本社 五月句会

五月七日（月）午後一時
アウィーナ大阪

五月句会は114名（投句者6名）参加で開催された。句会に先立ち、先日亡くなられた同人、田村邦昭さんへ黙祷を捧げた。

今月のお話は三宅保州さん。「続川柳いろはカルタ」と題し、その前半は昨年の十二月句会で話された。川柳の基本をいろはカルタになぞらえた物で、中々好評であった。今回はその後半で「の」から始まり「の」は多面的で「に」「が」は断定的であるとの事。

一日の重さ軽さよ日記帳　薫風

泊まる気になって外したイヤリング　薫風

泊まる気にの「に」は限定である事など、例題を上げて助詞の使い方の重要さを巧みに話された。また古川柳と現代川柳の違いや、歴史を知り川柳を普及させて行く大切さなど、今更ながら成る程と納得出来る話で、命ある句を作ろうと締めくくられた。

（まつお記）

月間賞は、新家完司さん（鳥取市）

（司会ー美籠・善純）（脇取りー真理子・蕉子）

（受付ー日の出・舞夢）（清記ー勝弘）

席題「ちぐはぐ」　河内　月子選

年の差のちぐはぐだって嬉しいの　理恵
やる気は満々体力ついて来ず　いさお
母ちゃん躾けて父ちゃん甘やかす　いさお
ファッションと言って左右が違う靴　かずお
ちぐはぐな問答しても明日はくる　宣子
老いの恋ちぐはぐに燃えあがる　滋彦
ちぐはぐに帰りめしめし言われても　すみえ
寿司買って帰るとカレーできていた　完司
ちぐはぐの手本お国が見せてくれ　時雄
物忘れしながらちぐはぐに暮し　義
一生懸命というちぐはぐが笑えない　蘭幸
着飾っているが喋れば河内弁　玄也
朝食をパンとご飯で五十年　美智代
今日の靴下右は紺色ひだり黒　完司
ちぐはぐな記憶で話かみ合わず　まつお
適当に合わせ笑顔の母と居る　蕉子
ソース顔ショウユ顔かて我が息子　柳伸
熱燗をちびちびケーキあてにして　楓楽
お互いにとんちんかんで五十年　よしみ
浴衣着てミュール履いてる若い女　賢子
減反の農家に金を払ってる　一歩
ちぐはぐな夫婦になった定年後　あかね
ちぐはぐな気象が春を振り回す　時雄
この時代土葬があったとは知らず　勝弘
ちぐはぐな情報脳がもつれ出す　隆彦
ちぐはぐを面白がった頃もある　紀乃
ギブアップしてから答え見えはじめ　好
暇できた時には金がない不運　希久子
最後までちぐはぐだった私達　美智子
ケータイの電池が切れた待ち合わせ　茂
ちぐはぐでも何とか夫婦しています　善純
攻める愛逃げる愛あるやじろべえ　よしみ
長生きのサプリの量で胃が痛い　郁夫
佳
ばらばらに夜を過ごしてなお夫婦　堅坊
父は賛成母は反対ボクの恋　シマ子
ボランティアの手話はちぐはぐでも温い　保州
スタートのちぐはぐゴールまで続く　能子
五十年のみの夫婦で恙なし　光久
人
自由きかぬ五体衰え知らぬ口　楓楽
地
体には良くないものが欲しくなる　久美子
天
ちぐはぐを積んで夫婦になれました　たむらあきこ
軸
まだ先は長い楽しくちぐはぐに

兼題「脇」　佐々木満作選

脇役があれこれ仕切る舞台裏　准一
脇あまい男の軽い腰と口　遠野
両脇に愛をたっぷり抱いている　柳弘

脇役を貫き通し光る芸　よしみ
脇甘く浪費の癖が直らない　靖博
脇腹を抱えて笑う新喜劇　野薫
結論は脇から妻が出してくる　弘一
脇取りの声に気を付けしてる耳　弘光
脇に居て答弁したい真紀子さん　淳司
北のドン脇をかためてゆるがない　恭昌
油断した脇の甘さが命とり　俶子
親友が脇を固めている安堵　美籠
誇り高き脇役だった紙吹雪　扶美代
大根役者脇の小犬がフォローする　恭昌
脇道にそれぬ男の一本気　柳弘
脇道にそれた話で盛り上がる　まつお
美女通るたびに脇見をする夫　玄也
脇道に逸れて気付いた思いやり　武彦
脇にそれた人生なりに咲かす花　富子
かたわらの子達に遺すありがとう　千枝子
鼻声の美人に脇が甘くなり　則彦
悩みごといつも小脇に抱えこみ　希久子
脇役に徹した人の芸の幅　みつ子
太郎冠者脇を固めており候　義子
脇へ来てにぶいお方と小突かれる　耕治
脇役も主役も食っている子役　楓楽
脇役も黒子も咳をこらえてる　瑠美子
脇道にそれて沸かせる話の巧み　ふりこ
ぴったりと盲導犬はけなげなり　(志)千代
脇役に生きてしゃべりもうまくなり　一風
脇道にそれて答えが見えてくる　冨美子
今あるも脇に徹した妻の功　忠昭
佳
すぐ脇に逸れてばかりの好奇心　能子
弁解の汗が冷たい脇の下　あかね
再起する決心くれた脇の人　弥生
脇にいる大きな愛に気付かない　正雄
脇役の地道寿ぐ二千本　ふりこ
人
脇役で家族ささえる母の愛　美籠
地
脇役に徹して光る人間味　武彦
天
句読点ときどき打って締める脇　たむらあきこ
軸
両脇に家族とローン抱えてる

兼題「ドラマ」　渡辺　富子選

一芝居打って見ようかこの辺で　美義
連ドラが日本の朝のネジを捲く　かずお
梅ちゃんに会うため八時には起きる　楓楽
女湯を空っぽにした「君の名は」　淳司
傷口を舐めて宥めているドラマ　朋月
終電の顔夫々にあるドラマ　恭昌
黄門を引きずり下ろす視聴率　進
ドラマより三面記事が恐ろしい　加お里
積み重ねたドラマを語る深い皺　賢子
地味でしたご覧でしたかお月さま　弘之
突っ走ることでドラマになりました　信子
敗者にも見せ場をくれた甲子園　扶美代
いつの間に主役になっている喜劇　完次
それぞれが今日のドラマ主人公　完司
一幕の主役演じて人は逝く　和夫
劇的な出会いにもらう玉手箱　光久
定年の支線へ入り込むドラマ　正雄
老々の介護のなかにある踏絵　冨美子
転結に磨きをかけているドラマ　完次
鎧兜ぬいでドラマも小休止　一風
人生はドラマとしても日日煮炊き　敏治
語らない心の襞にあるドラマ　すみえ
その昔死ぬ程辛いことがあり　ルイ子
椅子ひとつ空いてドラマが展開す　(久)千代
百のドラマ見るより母の生きた道　扶美代
臨月にエール希望の幕が開く　直樹
凄惨な現場推理の刑事の眼　靖鬼
始まりの予感打ち水たっぷりと　理恵
神妙なる叫びムンクにあるドラマ　柳弘
終焉はどんでん返しきっとくる　(志)千代
春嵐思わぬドラマ連れてくる　美智代
佳
散りゆく花のひとひらごとにあるドラマ　俶子

ピンセットで抓めるわたくしのドラマ　あきこ
今日も米研いでドラマはまだ未完　楓楽
喋らない猫真相を知っている　靖鬼
齧りかけの林檎ドラマはまだ未完　朱夏
人
平凡なドラマに塩をたんと振り　月子
地
生きていることも劇中劇なのか　保州
天
最大のドラマこの世に生きている　たもつ
軸
古事記祭り神のドラマは今佳境

兼題「奇　跡」　古久保和子選

リハビリの苦痛が連れて来た奇跡　和夫
三兄弟揃って決めたロンドンへ　紀雄
まだあった落とした財布戻る国　誠一
余命一年ぴんぴんしてる十年目　靖博
思い出のボール北米から届く　まつお
完璧に実行されたマニフェスト　黒兎
奇跡起こり私美人になりました　舞夢
神さまが留守か奇跡が起こらない　雅明
働きもせずに飲んだり歌ったり　完司
歳時記の中は奇跡が満ちあふれ　楓楽
再びの奇跡起こしたのは愛だ　蘭幸
税金を後期高齢者は免除　正雄
連休を何事もなく乗り切った　冨美子
合格通知奇跡のような虹が出る　美籠
大宇宙今人として生きている　富子
妻家出　夫ひとりで生きている　妙
粟粒の癌を拾った再検査　唯教
呼ぶ声が聞こえて彼岸から還る　真理子
古くとも老母はやっぱり百度石　恭昌
奇跡かな僕がこんなに持てるのは　寿之
手が止まる奇跡に近い妻の勘　よしみ
奇跡だと気軽に言われ傷ついた　(志)千代
恐竜の骨を見ているのも奇跡　信子
やすやすと奇跡はやって来ませんな　月子
一期一会ジャンケンポにある奇跡　瑠美子
サプリ飲みクレオパトラを夢見てる　敏治
笑い声聞えています棺の中　郁夫
あの日だけ妻に私が言い勝った　寿之
嫁はんが僕より先に起きた朝　弘風
平凡な日々の奇跡に蹴躓く　宏子
伸び切った輪ゴムの中にある奇跡　昭
断捨離もされずに生きている奇跡　朱夏
佳
奇跡だと思いませんかウォシュレット　完司
節電でこの夏奇跡生む日本　淳司
合格を奇跡と言ったのは三女　蘭幸
奇跡だとしておく科学では乾く　あきこ
努力という器をあふれ出す奇跡　希久子
人
懸命に生きて奇跡にまだ合わず　美智子
地
針の穴するりと抜けてきた奇跡　朱夏
天
真っ新の命産まれてくる奇跡　朝子
軸
奇跡ってどんな形でどんな色

兼題「内　幕」　新家　完司選

お互いの財布知ってる飲み仲間　美義
機密費が内幕を知る永田町　遠野
どの家にも人には言えぬことがある　(志)千代
内幕を家政婦斜めから見てた　蘭幸
密約を暴いた正義裁かれる　進
内幕は小銭数えているらしい　あかね
内幕を知って飼猫家出する　俶子
内幕は反対論で渦を巻く　信子
ペアルック内幕じつは別居中　ふりこ
家庭内別居他人様には内緒　いさお
置物の社長椅子だけ離さない　すみえ
内幕と幕の内とは縁がない　哲男
原発の内幕さらけ出しなさい　善純
原発は恐いものだと知りつくす　勝弘
窓際で内部告発準備中　和夫
内部告発こわくて飲みに連れていく　恭昌

内幕がピアスの穴を洩れてくる　楓　楽
内幕を引継ぐ北の三代目　千枝子
鯨幕血の争いの見え隠れ　真理子
内幕を覗くと金銭の縺れ　扶美代
被爆量企業秘密と逃げておく　武　彦
ピカ一を妻に持ってる疎ましさ　すみえ
内幕ちらり編集後記興味盛る　正　雄
反対派とタッグで増やす交付金　直　樹
冷凍庫に妻の内幕詰めてある　哲　子
香典の中味は知らぬ仏様　朋　月
金盃がメッキと知った日のショック　淳　司
欠席の理由行きたくないのです　保　州
定職がなくて止むなくボランティア　直　樹
待てというサイン無視してホームラン　保　州
ご馳走を食べてる人が先に逝き　日の出
内幕はおでんカレーでよく遊ぶ　敏　治
ご両家が婚儀を急ぐ裏事情　好
佳
子を連れて二年にもなる里帰り　野　薫
内幕は朝の木魚もマイク音　宏　子
今朝撒いたことは内緒に潮干狩り　和　子
家計簿の内幕酒が多すぎる　黒　兎
もめ事のわけが饅頭とも言えず　見　清
人
別居中らしいと分かるゴミ出し日　真理子
地
更衣室お局様が取り仕切る　いさお

天
予想した通り立派な二重底　完　次
軸
家計簿の事情は知らず飲み歩く　完　司

「惚れる」　小島　蘭幸選

惚れっぽい寅さんが居た三丁目　朱　夏
五十年ずっと恋愛進行中　加お里
あの世まで共に行くほど惚れてない　蕉　子
惚れちゃったダルビッシュだけ観る野球　宏　子
女の一生惚れた男に捧げます　理　恵
恋なんてもんとちゃいます惚れてます　真理子
惚れっぽい私なんです闇魔様　和　夫
平凡だが後姿に惚れてます　信　子
惚れ薬やっぱりあった副作用　郁　夫
惚れたのは本気振られたのは誤算　柳　弘
ゆるキャラのような男に惚れた魔女　朝　子
惚れたのは昨日で今日は冷めている　かずお
聞き惚れて熟睡してたコンサート　りこ
大好きな人とコーヒー飲む夜明け　美智代
惚れてから私人生変えました　舞　夢
やさしさに惚れてまあるくなった鬼　朝　子
婚活の息子に欲しい惚れ薬　久美子
惚れているわたしを軽くみるあなた　すみ子
この刻に惚れる真夜中のしじま　紀　乃
歳のせいか惚れたら好きとすぐ言える　見　清
うぬ惚れを自信に変えてから強い　能　子

川柳に惚れ過ぎ家庭内離婚　完　司
自惚れることも一つのエネルギー　千恵子
金払い早い男に惚れている　勝　弘
惚れたいような男はんにはまだ会えぬ　俶　子
鶴田浩二の声に似ている人でした　(志)千　代
惚れているのに気づいてはくれません　千枝子
僕だけはぞっこん僕に惚れてやる　真理子
惚れてると言えぬ夫の赤いバラ　誠　一
男だが男に惚れることもある　勝　弘
大空に惚れて翼を買いにゆく　日の出
私しか解らぬ彼に夢中です　舞　夢
佳
一筋縄でいかぬ男に惚れました　義
ムンクに惚れる96億にも惚れる　紀　雄
だんじりに惚れて岸和田離れない　玄　也
阪神に惚れ安らかに暮らせない　楓　楽
火だるまになっても守る人がいる　日の出
人
惚れるっていいなチカラが湧いてくる　直　樹
地
好きだった靴音だけでときめいた　葉　子
天

惚れっぽいので美人は近寄らぬように　**新家完司**

軸
ずうっと好きで皿を洗っているのです

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

米子住吉川柳会（鳥取）**渡辺多美子報**

厨房で命の素を刻む音　紀の治
曇り空に心も重く春を待つ　登美枝
鬼平と座頭市とで今日を終え　宏　之
やすやすとどじょう人気が止まらない　正　二
袖なしを着たり脱いだり浅い春　公　一
もう少し梅のつぼみに声かける　礼　子
ひとり暮らし鬼も招いて福は内　多美子
開発か自然守るかヤジロベー　すみえ
パンの耳カラスに覚えられている　未延子

わかあゆ川柳会（島根）**松本はるみ報**

人の世へ媚は売らない山桜　はるみ
冗談と本音の狭間で今日も昏れ　好　栄
背中押す緑の風の独り言　恵美子
ふと思うこの幸せを二人して　澄　子
七回の年女です豆を撒く　英　子
飛べそうな歩幅をためす水たまり　ちよえ
じいちゃんの家来になってうどん店　かつ子
空歩む時代となって月旅行　博　利
カラクリに振り回されている地球　清　泉

松露川柳会（鳥取）　**小西　雄々報**

雪おろし無理をしすぎて痛む腰　鈴　枝
無理をせず楽しく老後すごしたい　弘　子
風に乗る無理はするなと天の声　公美枝
天国に届かぬ手紙今日も書く　智恵子
動かねば歩くも無理となる体　豊　枝
病み上り無理をするなと言い聞かす　和　代
無理からか膝も悲鳴をあげている　久　子
子育てへ無理を承知で動く母　静　江
これ以上無理だ限度と言って呑み　正　光
無理をせずじっと我慢の寒椿　雄　々

竹原川柳会（広島）　**古田　太虚報**

13才やる気の芽が出翔ぶ準備　汎　美
懐かしむ祖母と並んで麦踏みを　半　徳
私にもやっと芽が出た膨らんだ　泰　子
新学期瞳キラキラ希望の芽　幸　子
膨らむ芽根っこの努力に感謝して　淑　子
竹の子の芽吹き聞こえる足の裏　慶　子
花芽ツンツン雪の下からツンツン　蘭　幸
トースターポンとはじける笑顔もね　京　子
パンなんかもの足りないと父の鍬　栄　恵
貧乏をそっと見つめたパンの耳　輝　恵
赤ちゃんの頬っぺふんわりパンの生地　弘　子
今朝からは妻ですパンは二枚焼き　敬　子
笑顔満開母の砦を春にする　笑　子
日なたぼこ猫一匹にある砦　規　代
砦から最後の力見せてやる　房　子
竹原の砦になるか道の駅　節　夫
忠実に砦を守るのはポチだ　白　狐
砂山の砦に僕は虹を見た　千代美
冬眠の妻起き上がれ春はそこ　静　風
一本の芯がわたしの邪魔をする　厚　子
おもてなし梅一枝の備前焼　栄　香
一筆箋ほどよい長さの文を書く　比呂子
新幹線窓に張り付くキラキラ目　史　子
春夏秋冬巡って一つ歳をとる　千　枝
料理好き妻という字を輝かす　一　路

和歌山三幸川柳会　**武本　碧報**

ひょっとこの顔をしながら通す糸　孝　子
くもの糸きみは構造建築士　章　子
蓮糸を紡いで描くユートピア　朱　夏
父さんは我が家の柱一の糸　富　子
綾とりの橋を渡って亡母に会う　俶　子
絆とは納豆の糸ほどで良し　美枝子
今以て頼りにしてる仕付け糸　絹　子
仲間との出会いで糸がよく跳ねる　美　花
凧糸の出番ないまま早二月　み　ね
縒り糸の呼吸清々しい二人　柳　昌
キルト画の一糸一糸にある思い　義　泰
綾取りの日々も二人で泣き笑い　豊
糸偏のころに儲けた土地らしい　桂　香
納豆の糸引く程に腹を立て　かずみ
したたかもいつか探している手摺り　八重子
転んでもライバルの服掴んでた　ひろ子
したたかに手を組み合えば山動く　碧
したたかな敵かも知れぬシーベルト　純　子
したたかな野心を包むオブラート　町　子
したたかに計算されていた涙　義　雄
借りた金死んだふりして返さない　昇
したたかに生きて風邪など寄せつけず　当　代

したたかさ欲しい領土を守るため　典子
ふるさとを諦めさせたのは科学　元三
廃屋に住めど故郷捨てられぬ　エイ
ふるさとの詩を奏でる柿すだれ　菜摘
会者定離ふるさと瞼の中にある　起世子
ちょっと待てそのＩＴは進み過ぎ　侃太
待っていたチョコが今年も届かない　准一
待つ人があるから家に足が向く　登美代
煮こごりの溶ける日を待つ自在鍋　幹子
生き抜いた命平和を待つとする　さち子
待ち針であなたをつなぎ止めている　保州
母の椅子丁寧にふき春を待つ　イセ
待ちぼうけ化石になった恋抱いて　和子

川柳塔打吹（鳥取）　**野口　節子報**

胸水や腹水溜まり顔は皺　貴恵
被災地は溜まる瓦礫に困っとる　勝憲
目に涙溜めて見詰めるサスペンス　善江
溜まるのは落葉とゴミと愚痴ばかり　公恵
深呼吸溜った愚痴を吐き出そう　たけ代
忘れない教えてくれた母の味　久芽代
教えてるつもりが子らに教えられ　義人
カーナビに教えて貰う街の中　螢
御釈迦様沢山教え代々に　悦子
震災に絆の重み教えられ　龍枝
家の味母に教わり子につなぐ　滋
十人十色教えてあげる色の味　三津子
身を持って教えていますこの笑顔　節子
信頼が帰る日を待つ原子力　清
丸裸信頼だけで生きる国　岳人
単身も信頼し合い二十年　耕治
信頼の於ける三色ボールペン　玲子
信頼をされているから嘘つけぬ　芙美子
信頼をされて淑女の荷物番　重忠
目を見れば言葉はいらぬ信頼度　紀美恵
過疎地でも信頼出来るバス時間　美知江
信頼を払い落としている桜　照彦
信頼をします朝の深呼吸　野蒜
窓際に明日の朝がやってくる　石花菜
頭が良くないのは親のせいだと思ってる　克枝
ロボットが人の頭を追い越した　泰山
デジタルの生活に老いの偏頭痛　三代子
頭を振って春ですよ狂います　みち子
色々とあり懐に頭痛薬　道子
空模様見てから土筆頭出す　禎元
一本のペンが頭をそそのかす　美ッ千
教室に次のジョブズの芽が伸びる　くにこ
頭ならマッチ棒にもついている　芳光
雨の日は頭の中も雨模様　和子

川柳塔みちのく（青森）　**小寺　花峯報**

痛い膝労わり歩く雪の道　小とみ
木の葉舞う一緒にワルツ風にのり　一湖
老夫婦労る会話で肩もみし　つとむ
労われ素直に折れてゆく頑固　きよし
売り買いのできぬ命を病んで知り　呑舟
今更と思うが夢の種は蒔く　洋子
セシウムを少し気にして飲む緑茶　和香子
僕の眼に緑色した虫が棲む　ひとし
折れそうな心の支え杖になる　美鈴
手ごころの知れた壷から湧く勇気　芳生
幸せにすると言うからついて行く　則彦
セーターの色は緑と決める母　一呑
今更に自分を見つめ合う命　隼人

佳句地十選（5月号から）

矢倉　五月選

知らないでおこうか平和主義だから　純子
コーヒーの香りの中に腰かける　すず
威しともとれる猫撫で声である　よりこ
呆けるなよ毎日脳に言いきかす　あしび
あやふやな返事が悩み深くする　寿代
木洩れ日が森を不思議の国にする　盛夫
しんがりを行くわたくしに敵はない　房子
出遅れぬために長蛇の列にいる　(籠)恵子
断捨離の手本ほれぼれ山頭火　敬子
媚びるのが上手になってからの鬱　昌紀

酷使した膝に声かけ床に就く　ふさゑ
緑陰の読書少年大志立て　花匠
瓦礫から若芽萌え出て春を告ぐ　愁女
砂漠化にみどりが消える地球危機　井蛙
人情に触れてしまった若葉雨　黙人
四十年愛した煙草辞められぬ　花峯
自転車の少女緑の風を着る　慕情
ブータンで真の労り見るばかり　一花
白骨を拾う労る姿して　劦
紫陽花のみどり逢いたい人ばかり　五楽庵

川柳塔鹿野みか月（鳥取）　**福西　茶子報**

鹿は角わたしは何も残さない　宣子
四字熟語知らぬジュニア大学出　くに子
君が代が国家と知らぬジュニア達　いさお

ロゼワイン花の便りはもう近い　和子
燃え殻は無視新しい火に期待　盛桜
好い男に出合ったら出発はすぐ　孔美子
立春寒波心の根雪また凍る　彩子
酒いっぱい呑むと出てくる裏の顔　照彦
いい風をじっくり読んで切符買う　実満
百円でいっぱい欲の初詣で　房子
子が巣立ち寂しくなってきたお膳　茶子
後期だが少女に戻る同窓会　弘子
鹿が出て交通事故にあっている　はるお
娘からいっぱいみかん送って来　露子
中原の鹿射止めるか就職戦　惣子
分限者が鹿の毛皮を羽織ってる　蟹郎
始発駅咲いていたのは沈丁花　美ッ千
遠慮せず猪鹿も通る道　すず
ジュニアとは思えぬ技に完敗だ　咲和
べた凪で出発したが時化てきた　重忠
すくすくと伸びてジュニアの建ち姿　富久江
負けん気のきょうもいっぱい喋ってる　満
合格へ笑い弾けているジュニア　みさ子
ポケットに飴いっぱいをつめて出る　小鹿

南大阪川柳会　津守　柳伸報

アルバムの母とときどき会話する　太郎
胃カメラに指摘されてる暮し振り　楓楽
判決へ涙こらえて聞く遺影　栄子
あせるなと自分を諭す試験場　庸佑
見習いのあせる手元に声援が　百合子
定年を前に働き蜂あせる　ひさ乃
ゆかぬ子に焦っているのは親ばかり　修
あせってもあせっても僕亀の足　恭昌
あせっても出ない名前がひょいと出る　更紗
約束の時間がせまる厚化粧　なぎさ
あせっても体が効かぬ高齢者　ルイ子
春雪にあせりはしない花時計　典子
身内ほど可愛い叱るのもきつい　シマ子
紙コップ身内になれと渡される　郁夫
里帰り妻の身内が多すぎる　弘子
近くより遠くに居たらよい身内　和雄
家系図に載らぬ身内を隠し持つ　清
原発の賛否身内にまで飛び火　柳伸
身内にはアンチ巨人がたんと居る　忠昭
身内にも言えない事を言える友　昌紀
君はA型だろうとよく言われる　勝弘
老いの日々きちんと出来ぬ事多し　叡子
理論整然すぎてアリバイ疑われ　正春
添いとげて夫婦きちんと合う歩幅　集一
卓袱台に母の苦労がある昭和　弘風
玩具とのお別れもある一年生　直子
厳冬に耐えた桜が笑い出す　一歩
余生とは戻る思いの道歩む　たもつ
身銭切る男の背なは傷だらけ　柳弘
躍進へスタート切った紺スーツ　志華子
未来図の中にもちろん妻を置く　克己

川柳塔すみよし（大阪）森松まつお報

着飾ってさっさと出かけるコンサート　篤子
亡き母の味と闘う台所　志津子
オカリナで聴いたら泣いた千の風　一歩
住み慣れて地域の良さを思い知る　のん子
ネクタイを締めて闘う顔になる　昌紀
ピアノだけ孫の演奏聞きに行く　公平
化粧してたたかう顔に活を入れ　りつえ
ティンパニーが鳴り渡るよな朝よ来い　昭
一度でも住んでみたいな別荘地　伸子
明日また闘うために飲んでいる　まつお
復興へ元へ届けと打つ太鼓　賢子
三味線の音に弱かった内の人　蕉子
ガラクタを楽器に子等の可能性　朝子
還らない死者に捧げる海の琴　朱夏
毎日が闘いですよ記憶とね　美世子
太い妻コントラバスの響きあり　舞夢
ごめんねとさっさと言えた君の勝　克博
さっさとし親の言葉を子にゆずり　チエコ
窓際で睡魔に勝てぬ五時間目　直子
さっさと手を打たねば日本沈みます　桃花
ばあちゃんの闘志専らじいちゃんに　半銭
どじなくせ好きな事ならさっさとし　とし子
楽器店の空気が好きで来ています　太郎
だらだらせず早く乾杯しましょうや　勝弘
軍隊でラッパで泣いた夢を見る　(奥)五月
メキメキと頭角出してくる闘志　美籠
百歳へ挑んでいますあと二十　日の出
何事もさっさと出来ぬ歳となり　吉太郎
立ったままズボンがはけず肩借りる　晴雄
どうしたん夫ピアノを習いだす　和代
卯の花は出会いと別れ知っている　順子
ATMさっさと急かす後の目　妙子
美女の事で闘うなんて馬鹿らしい　シマ子
水茄子と茶がゆ美味しい泉州路　裕之

川柳塔おっぱこ吟社（香川）川崎ひかり報

浮き沈み九十七年泳ぎ切る　あきら
浮いた金軽い財布が笑い出す　はつ恵
AKB浮かれて踊る孫可愛い　よしみ
喜びが浮き沈みする風呂の中　いさむ

聞く度に浮き名に尾鰭ついてとび　放任
一家団欒魚は竿と浮まかせ　弘
七十五日次へ浮き立つ人心　ひかり

川柳ふうもん吟社（鳥取）夏目　一粋報

基地移転もめると総理死んだ振り　洋々
誰とでもつなぐ野心のない両手　無限
ツイッター挑戦状が舞い込んだ　一瑶
とっときの地球皆で守ろうよ　金祥
妻の愛死んだ振りして確かめる　振作
悲しみを共有できるツイッター　圭一郎
騙される度に感心する手口　秋月
金で済む事では無いと意地を張る　清信
押売りを風邪と言う手で追い払う　菊香
ツイッターで今日も政治を叱ってる　毅
蟹持ってアイラブユーは古臭い　蟹郎
手口など全く見せぬ落し穴　節子
くっそう又同じ手口でやられたか　凱柳
とっときは大切にして忘れてた　清帆
馬鹿になる術心得ている利口　美恵子
死んだ振りわざとせんでも死んどるが　善夫
ツイッターの厳しい主張聴いている　地佳平
同情の手口に乗って大火傷　春名
死んだ振りしても駄目です妻の前　回春子
代議士が大炎上のツイッター　克也
三途の川を死んだ振りして渡ろうか　月満
とっときの家族津波に剥ぎ取られ　とも湖
不況ならパート議員にすればよい　妻子
思い切りの悪さ自分に腹が立ち　みゆき
ツイッター彼と彼女の仲を裂き　雅女
沈黙の声なき手口恐ろしい　悦子
ツイッター見知らぬ友が増えていく　昌鼓
ツイッター気楽に愚痴を吐き捨てる　秀四
野良猫めとっときのツボ割りおって　弘康
とっときの言葉でお世辞言ってみる　一京
死んだ振りしても嫁さん驚かぬ　茂登子
老いの身にツイッターなどわからない　はつ江
死んだ振り続き存在忘れられ　由美子
ツイッター波紋を広げ風を呼ぶ　房江
とっときの愛の深さは無限大　一粋

川柳らくだの会（鳥取）岸本　宏章報

雪解けの小道へ春が背伸びする　紀子
すき焼の具材奏でる鍋の中　冨貴子
昼だけになぜか知らせる腹時計　仁子
長電話相手の咳が移りそう　清
健康な米寿をめざす散歩道　せつ子
マッコリを飲んだとたんに下痢になり　大鯰
爛漫と桜と春のハーモニー　寛
終列車みんな寝ている疲れてる　玲子
マスクした鼻を狙って舞う花粉　宏章
ざわめきが一瞬とまる掲示板　一弘
恋をした虫が奏でるハーモニー　孝子

川柳ささやま（兵庫）　遠山　可住報

欠点を褒めて気付かせる人の智恵　久子
おはようさん元気に今日が動きだす　純子
つい口に後で後悔先せない　美紗子
八百万神様だって得手不得手　哲男
欠点を皮肉たっぷり妻がいう　稠民
けしからん人だが情はたんとある　真由
産声に愛の母乳がほとばしる　勇
拉致の国ポチが付くと暴露され　啓子
親も子もゲームで家計火の車　多美子
親と子の欠点知ってる美容院　開子
お神輿へ過疎の元気が盛り上がり　可住
年をとり顔のクリーム値下げする　かほる
暖房しクリーム食べてる至福時　幸子
欠点を弥陀に諭され夢の中　ちかゑ
ああ言えばこう言い合ってまだ元気　静子
親子でもゲーム遊びの真剣さ　照代
ゲームへの熱勉強へと願う母　美智子

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

日日の迷路楽しんでいるのも余生　桂子
カーナビが迷路に行けと指示をする　順子
迷い道歩いただけのダイエット　康子
叱った子に叱られ辿る老いの坂　幹治
自分より長い物には逆らわず　久子
わだかまり持って従う人事権　信男
マニュアルについてきたのに崖っ縁　美智代
服従も損得尽くの匙加減　勝
先生に従い被災した津波　長一
どろどろの土の中にもある命　公子
被災地の泥の中にも春芽生え　郁子
見ないでね只今ドロのパック中　正子
どろどろに溶かしてみよか石頭　純子
どろどろの思いを消したロゼワイン　契子
同行二人泥んこ道も越えてきた　扶美代
どろどろは元気の証拠子供靴　黒兎
卵焼の味でもめてる塩・砂糖　春代
ふるさとへ戻り卒業友の顔　柳童

高知川柳社　小川てるみ報

打たれる度に磨きがかかる土性骨　正射
婿殿は打たれ強いと言う真紀子　圭二

美しい波紋を愛の風が打つ　哲　史
打ち所悪くて釘がひねくれる　憲　一
なあなあへはっきり打った句読点　てるみ
電動で打った釘にもある狂い　千恵子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

成功の一歩手前と言っておく　彰　治
四季ごとに装いします富士の山　(中)勝　弘
究極の愛はピンコロだと思う　紀　雄
普段着の愛にも欲しい薄化粧　隆　之
装った君の横顔他人めく　ふりこ
沢庵を細かく切ってくれる妻　とし子
人前では挨拶だけの二人仲　(江)勝　弘
意識するたえず女を忘れない　怜依子
言い出した手前責任負うつもり　満　作
片方が病んで静かな愛になる　萌　子
お迎えの一歩手前で花咲かす　芳　子
無関心装う街の灯が怖い　ばっは
平静を装っているが二日酔い　弘　風
ため息で一刀彫に見とれてる　修
人形を抱かせて癒した介護の手　郁　夫
惜しい浮気落ちる手前で立ち止まる　堅　坊
今の世に物言いたげな埴輪の目　良　一
幸せを装って出るクラス会　恭　昌
操られ上手に踊るぼくが居る　寿　之
魯山人美味を器に愛でさせる　隆　盛
手前から攻められました恋一途　恵美子
階段の手すりの愛が深くなる　完　次
春遅い仮設に並ぶ小さな雛　あかり
幸せな人形抱かれて汚されて　真理子
満願の手前でほっとした報い　柾　子
木を刻むわたしの愛が見えるまで　のりこ

竹人形雪の下から鳴咽する　克　己
爆発の手前介護の一昼夜　洋　子
愛に生き愛に死ねたらなんて嘘　柳　弘
セメントの乾く手前を猫が踏む　朝　子
永遠の愛を誓った手前まだ夫婦　富　子
人間の手前この手をさし伸べる　ダン吉
薄衣を重ね装う下ごころ　理　恵
愛枯れた日から日記は笑わない　國　治
生涯を無事に演じた木偶坊　成　子

岸和田川柳会（大阪）　米富　淳風報

モノクロで鮮やか昭和よみがえる　昭
ひとり冬越して安堵の春を聞く　あさこ
鮮やかな騙し見事なＡＩＪ　蛙　城
鮮やかな手口詐欺師もデジタル化　いさお
岸和田花火浴衣にうちわ下駄の音　益　祥
カーネーション目にも鮮やか三姉妹　和　美
足音を立てずに歩く朱のふくさ　香　代
鮮やかな桃の摘花の惜しみなく　幸　子
満開の桜眺める操子句碑　笑　司
桜見る人の足音アンダンテ　隆　昭
色も香も解せぬ野暮天桃の花　武　志
タンポポは満開桃は一部咲き　龍　子
鮮やかに裏切られても断ち切れず　珠　子
どん尻でゴールそれでも鮮やかだ　ダン吉
包近に桃の香薫る泉州路　忠　太
桃には桃の自由があって枝の向き　はこべ
一献を傾けて見る桃畠　彦　弘
早朝散歩レンギョの黄が鮮やかだ　寿　恵
写るなら花の香合わせ写メールで　英　夫
明日咲くあした咲こうと蕾たち　(石)ひろ子
ツタンカーメン金鮮やかに渡来する　(仲)弘　子

わたくしの足音待ってる人がいる　美　花
足音で機嫌の悪さあらわれる　美也子
増税の足音高く新予算　康　信
花影を溜める遊び上手な池の水　侑　子
おかっぱがすいすいと乗る一輪車　義　泰
足音を消したら余計怪しまれ　柳　昌

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

資産より書棚公開新議員　四　郎
お隣りの池へ小石を投げいれる　高　明
うっかりを笑い飛ばしている不安　蜂　朗
二度三度泣いた女の土性骨　勝　視
春彼岸吾も及ばぬ気配りを　實
天下一のラベルでお神酒鎮座する　輝　夫

富柳会（大阪）　古田　千華報

言い訳が続く背中にかき氷　ア　キ
直向きな人の波長がここちよい　紅紫朗
一時の主役となった離婚劇　和　子
我が胸を鷲掴みにとザクロの実　七　朗
散りぎわに花は別れを意識する　晴　美
直向きが今輝きに変わる羽化　奏　子
一途さを込めた視線が眩しくて　伸　雄
ひっそりと晴れ舞台から退いた　武　人
北帰行母の命を抱きしめて　未　知
熱い血が騒ぐ理想論が踊る　寿　之
人間の坂坂坂が続く旅　欣　之
私を木の芽起しの雨が打つ　よしみ
直向きに生きて苦労もつきまとう　登　子
春風に私の五欲解き放つ　恵
愛を編むただひたむきに直向きに　高　鷲
直向きに生きて損得考えず　千　華

直向きに生きてまっすぐ歩きます　千恵
続編の真ん中辺に冬がある　華
初音聞く振りして妻の手を握る　彦次
一人旅まだまだ楽し好奇心　よりこ
第二ボタン未練残して別れた日　佳子
ひたむきに歩み歩んで米寿の譜　信子
ごんたくれも卒業式で泣いて居た　深雪
不器用な右手をさばく母の風　鬼焼
逢うた時より別れある運命　壽峰
招いてはいけない薔薇が散り急ぐ　森子

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

春を待つ快気する日をひたすらに　百合江
スランプに落ちた小鳥の高望み　幸子
ドクダミとヨモギが薬だった頃　遡行
頑固には引けを取らない老い二人　まみ子
老残をさらしたくない椿落つ　美千代
内緒だって何でも分かるガラス張り　雅美
二度押しのチャイムは孫のランドセル　かつ子

西宮北口川柳会（兵庫）藤岡　りこ報

遅刻してのこのこやってくる無礼　光久
孫の絵は婆ばもまつ毛カールさせ　弘子
非常識をユニークと言う非常識　茂
新聞の一面飾るいいニュース　順子
降る花を両手で受ける車椅子　キヨミ
パパママに見えない個性ほめてやり　章子
自画像が未完で終わる癌告知　敏夫
元気ですそれだけ書いてあるハガキ　ひとみ
ユニークを煮詰めてみればアーティスト　直
原発がすべて停まる日もう間近　勝弘
来るものが来たと覚悟の紅を引く　美籠

復興を支えつづけるミニコミ紙　氷筆
ついに出た空気で走る次世代車　伯備
もう孫はひとりで電車乗ってくる　耕治
携帯で未来を語る相聞歌　哲男
来る人が来て飲む人飲んで盛り上がる　比ろ志
春の土おこしジョークの種を蒔く　無限
ユニークな国に隣国悩まされ　千代
花束は涙なくして抱けぬもの　美津子
添い寝して絵本の森に迷い込む　武彦
祝古稀の少年少女クラス会　武臣
新聞の社説で判る社の気風　基輔
免許取りたて乗せてあげると孫が来る　りこ
すべてもう時効としたい春が来た　わこ
退屈を助けるようにカモが来る　千賀子
猫に小判所詮分からぬピカソの絵　毅
世界中へ漫画文化が夢広げ　浩司
失敗を笑顔で語る時が来る　宏造
新聞をよく読む妻が私設秘書　盛夫
ユニークなゆるキャラ競い町興す　玲子
沈んでもいつか浮く瀬に賭ける夢　嘉代子
陽炎が花の巡礼連れてくる　いわゑ
唯ごとでない顔つきにピンと来る　光子
愚痴になる苦労話は絵の裏に　のぶ久
ユニークな話でハート掴まれる　朋月

川柳塔きゃらぼく（鳥取）大塚　恵子報

認知症賢い人がなると聞く　まゆ
貰った寿命今は宝にして暮らす　亜弥
粉々に舞い散って行くひとり言　喜周
転ぶ度思う生きてる証拠やと　瑞枝
眠れぬ夜家族の集い思い出す　初枝
四苦八苦して立ちあがる膝小僧　てい子

惚けたかな再確認の後もどり　鶴子
私を人間にする億の声　富美子
もうそこに春が来たよと沈丁花　ゆき
窓開けて春のいぶきをたしかめる　寿々子
窓開けて春の鼓動を聞いている　恵子
その胸に抱いて欲しいと寒椿　麗
開けるよりひとりの鍵を閉めるとき　千代

岬川柳会（大阪）　八十田洞庵報

亡夫偲ぶ般若心経書く余生　和香
世直しに橋下維新切り込んだ　清一
こよみでは春と言うのにこの寒さ　圭子
頬染めて萌える心の早春季　富美子
どこの実をついばんでいる野鳥たち　茂平
紅梅が一足早い春告げる　梅琴
しもやけの指先痛い寒の朝　冨美
野仏の頭に止まる赤トンボ　寛
新調の着物春日に面映ゆい　洋子
駅までは遠くなったと嘆く足　年子
鍬振れば菜の花畑に春が来る　覚庵
近松の情念今にあるロマン　洞庵
ジョークだと後で気がつくアンポンタン　和美
ジョーク聞く遅れて笑うのは誰だ　貞夫

長　柳　会（大阪）　坂上　淳司報

ふる里をカタカナにする放射能　淳司
不愉快な花見で騒ぐ酔っ払い　武男
不況でも救いを招くバーゲン日　辰男
どんな夢妻がとなりで唸ってる　弘光
さかなにもクシャミをさせる落語ネタ　篤
時流れ救われるものあるのだな　エミ
病救われドクターに感謝今生きる　明子

ガン告知誤診とわかり救われる　たけし
ときめきが動悸が一寸迷い坂　ヒロ
どん底に落ちて昔を噛みしめる　靖博
「もしもし」で意気込む質疑はぐらかす　克三
生きていれば愉快な事もたまにある　幸子
行き詰る心を本に救われる　孝代
臓に傷持てば煙たい人ばかり　光弘
グチを聞く頷くだけで晴れる顔　ふみ
命拾いした身に桜身に沁みる　正美
表札に亡父の名前がまだ元気　一慧
母さんはいつも愉快に笑ってる　よしお
笑ってよ笑っていれば皆愉快　もこ
ユニークで愉快な踊り安来節　隆彦
クラス会愉快な風に包まれる　正子
退院だびっしり埋めた予定表　(穂)正子
助けたい救いたいけど才が無い　マサ
あの時のあの拳骨で目が覚めた　正博
花見酒一気イッキで救急車　芳野
捨て犬をかこみ相談ランドセル　けい子
先先の国を背負ったランドセル　久美子
点滴へゆっくり命喋り出す　和代
地獄の方が知り合い多く愉快かな　敬二
ハシズムで国救うとは猪口才な　直樹
定年後表の顔を片付ける　和子

はびきの市民川柳会（大阪）徳山みつこ報

維新塾うなぎ登りに人気出る　久仁子
七光りうなぎ登りの出世する　庸佑
日本の海を忘れたのかうなぎ　美代子
原発の川に鰻も棲みにくい　いさお
萌えいづる緑にちなむ和菓子買う　美喜
どなたにも会わない日には鏡見る　ヨシ枝
仰天の拡大鏡のしわの数　フジ
花嫁の荷物のトップ鏡です　敏
人間は自信無くせば弱くなる　雄太
壇上に自信をもった顔ばかり　獏沓
孫相手まだ負けませんピンポンは　千鶴子
褒め過ぎて自信過剰の子に育つ　ちづる
忍耐と我慢我慢が自信です　かつ美
おばちゃんはおばちゃんを見て自信持つ　光男
絶対という自信もう使えない　登志子
百点に鼻が天狗の様になり　悦子
しごかれて付いた自信は宝物　りつえ
セキュリティ良すぎ娘に会えません　喜久子
マンションに住みたいらん物捨てて　瑠美子
同居したバリアフリーの十五階　高鷲
マンションの親が負担の頭金　章司
ゴミ出しもエレベーターがいる暮らし　みつこ

八尾市民川柳会（大阪）土谷　耀一報

女房に反抗しないのも美学　耀一
名残り雪春の隣りに君が居る　寿之
あわよくば寝ずにいろいろ出かけたい　雄太
ライバルに花を持たせている美学　朝子
咲き初めし桜に未練春嵐　壽峰
おせっかい人とつながる第一歩　晶美
髪そめて友はなやぎぬハーブティ　美穂子
リハビリの一歩一歩を這う手摺り　欣之
内心は譲ると決めて席を立つ　紀乃
ハイハイが明日へ飛躍のスタンバイ　高鷲
言い勝った言葉が刺さる喉仏　華
ミサイルを我が物顔で発射する　紀雄
私の美学おごらず媚びずくじけない　賢子
停車場は無情非情の吹き溜り　森子

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

失敗を隠すためですとぼけます　やすの
鏡の顔気に入らぬが母に似て　あや乃
勘違いとぼけて通すテクニック　三楽
おぼろ月さくら恋しく顔出した　ミヨノ
ぼんやりと見て見ぬふりの親心　昭好
とぼけてもバレていますよ口の餡　みちる
メタボだぞはしれはしれそれやせろ　陽
どの顔をさげて行こうか頼みごと　克衛
おとぼけが身上ですとまたぼける　泰子
顔色を伺い続け勤め終え　勇太朗
米寿万才泣くも笑うも恵比須顔　一幸
あなた次第夜叉や菩薩になる私　敬子
とぼけてるようで胸刺す父の喝　薫
惚けても妻の関所は通れない　楽鬼

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

ときどきは居てほしくなる夫です　和夫
ヨガ気功母さん死ぬの忘れてる　俊宣
いい気分やさしく誉めてもらった日　美智子
ときどきは心の花に水をやる　典子
チャチャを入れ自慢話の腰を折る　弘風
大丈夫きっと見られる花吹雪　杞香
シャガールの青の気分に溶けていく　郁夫
なにしても先を越される不器用さ　勝弘
ほろ酔いの気分で彼にラブコール　あさ子
三十キロの枠は知らない放射能　堅坊
こころ一つにする三本の矢は折れぬ　賢子
どうしても亡母と差のつく煮ころがし　朝子
体力と折り合いつかぬ好奇心　榮子
目礼にときどき出合ういい散歩　一歩

一生の運決めたのはあの出会い　修
ともすれば折れる心を弥陀に請う　満作
ときどきがさいさいになる物忘れ　正
鼻の差と言うが大きな大きな差　いさお
ときどきは言って下さいありがとう　千恵子
子の夢を折った言葉を悔いている　寿子
爽やかな気分になれる花の風　志華子
暮しの差内包にして趣味の会　ルイ子
あほやから手の鳴る方へついて行く　倫子
九条へ母は祈りの鶴を折る　正子
誰にでも笑いかけたいしゃべりたい　葉子
差はないと競う気持に差があった　縣祚
突き当る壁がときどき知恵をくれ　素雲鸚
花見酒むかし五合いま二合　直樹
温度差で着かず離れずいる夫婦　麗
ときどきは故郷に帰りリフレッシュ　隆男
折れる子の涙両手で拭いてやる　仁
消費税増やし格差を積み上げる　義明
八起き目の坂で男は風になる　満洲夫
夢いっぱい溜めて爆発させる春　令子

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

今度こそ本気らしいと眼でわかる　准一
ここ一番本気だまだ残しとく　よしこ
強風にわたしの旗を守り抜く　小雪
波しぶきけって本気で生きている　和香
花火散る意見平行線のまま　紀久子
澄んだ眼で本気かどうか試される　紀子
さくら満開私を呼んでいるように　大輪
本気のポーズ土壇場で見せよう　翠子
誘惑の春に年金追いつかぬ　英子
ウインドウーの春へ魔法かけられる　冨美子
私から誘惑してもいいですね　克子
誘惑と闘いつづけてる財布　泰女
誘惑の嵐にこころ射抜かれる　寿子
思い止まらせてくれた子の寝顔　保州
桜散り緑輝く章になる　ダン吉
夜の蝶はねがなくても自由です　佐一
パッチワーク夜の長さを縫い繋ぐ　精子
神さまと遭うのはいつも夜の底　輝子
午前〇時の魔法が解けませんように　夕胡
打ち明けた夜から深くなる眠り　智三
災害地輝く夜明け目にしたい　秀子
技ひとつ守り続けて幕があく　ほのか
天国へ続く隙間を飛んでいる　美子

川柳大阪山崎珠生報

待っといて急いでは事を仕損じる　功
歳かいなフラのリズムに乗り遅れ　かよこ
復興の槌音にぶる放射能　司
満開を待つとき惜しむ花筏　いつふみ
ゆっくりと母のリズムでする介護　善純
基本からたたき込まれて晴舞台　鉄心
リズム感生まれてこの方ありまへん　珠生
同窓会年々歳々人が減り　照月
阿波踊りリズムに元気もらい受け　川童
待ちぼうけ夕焼け雲に笑われる　芳香
待っとくは期待のメール桜咲く　すがお
メーデーは男の歌だ鯉のぼり　比呂志
年寄りの骨まで愛す消費税　彦太
骨のないくらげのような夫です　美花
骨惜しみせず定年に胸を張る　喜楽
おはようから家族の今日が始動する　美籠
いろはから教えた選手ドラフトに　五月
エリートの魚は骨も立派です　笑風
カラオケのリズム後からついてくる　美世子
イカナゴは少し固めが好みです　勝弘
気骨はあるが財力が伴わず　紀雄
聴診器命のリズム覗いてる　柳弘
骨太の男に甘えたい女傑　朝子
不都合があるので基本ねじ曲げる　まつお
骨太の妻に持たせる旅カバン　万紗子
基本線もう外さない老いの酒　堅坊
待っとくよ何があっても待っとくよ　一風

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

いろいろと試して灸にたどりつく　孝子
風車さえ花見日和は眠たそう　宏章
仲直りした箸の瞳が笑わない　美恵子
長生きも試練と思う常緑樹　忠良
父の手記塗り潰された箇所がある　芳光
横たわる花に男を試される　芳山
母がする自慢ばなしに父を知る　紀の治
耳鳴りの奥はタクラマカン砂漠　石花菜
寄り道もいいな友あり茶菓子あり　玲子
何を試してゆらゆらと象の鼻　博子
青空に瓦礫の山は似合わない　寿代
シナリオの一つを潰す風の向き　厚子
娘に甘く馬の骨には渋い父　典子
満開の桜おぼろにした黄砂　照彦
年金も人質にする消費税を　ひかり
ごきぶりにあわて素足で踏み潰す　風露
百均の眉墨芯が抜け落ちた　けいこ
針穴を抜けた噂が飛びまわる　幸子
歯の治療命を削る音がする　重忠
体力を試されている遍路道　鈴野

墓護る責任重くボケられぬ　水歌
痛くってやる気を潰す五十肩　久子
詰め込んで踏み潰されるアルミ缶　蟹郎
試されて使い回され捨てられる　希楽良
お化粧も大儀になってボケ進む　すみゑ
核兵器持てば試してみたくなる　仁美
さむいさむい千回言って桜咲く　完司

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

一途さが過ぎて持て余された愛　かずお
物体になり切っている手術台　肇
ご期待に答えられずにほぞを噛む　庸佑
言い分を全部聞かずに叱る親　佐和子
ひょっとするとひょっとするぞと馬券買う　比ろ志
陽をかざしばんだの桜夢うつつ　勲
自分にも見えぬ取柄はきっとある　(永)玲子
大卒も読んでくれない杭全町　幹治
満開の桜に負けた血糖値　幸雀
むずかしい話は困る紙コップ　千恵子
便利さに逆らい生きる老いの意地　健二
凛として咲く木蓮の妬ましく　紀子
ひょっと口を横から出して揉める羽目　武臣
これと言う取柄もなくて口を出す　隆坊
全没がなんだ次回もきっと来る　堅夢
幼な子は命丸ごと駈けてくる　靖鬼
赤ちゃんの笑顔手足が援護する　葉子
思い残したことなどないと桜散る　則彦
人生の答えが分かる最期の日　求芽
ひょっとしてまだチャンスある余白かも　菜々子
スキャットでぼんやり毒を吐いている　勝弘
そんなことないと思うがあの素ぶり　寿美子
ひょっとしてと思った遺産何もなし　美義
取柄だけ目立って味方の無いお方　巴子
散り際の美学に浸る花吹雪　千枝子
胸張って言える取柄が一つある　見清
全音符だけでいびきをかく昼寝　久子
明日のこと明日答えても遅くない　千代
待針に思いを止めた春が来る　(岩)玲子
答には笑顔を足して出している　志津子
全快を祈る千羽の鶴の揺れ　歌留多
取り柄など無いが揉み手で生き残る　美津子
ひょっとすると貰に激怒の龍之介　美智代
ゆっくりとこたえるボロが出ぬ様に　美籠
ハンカチに春を包んで持ち帰る　スミエ

米子住吉川柳会（鳥取）渡辺多美子報

ありがとう今日も笑って暮れました　未延子
岩に咲く花よ誰にも看取られず　宏之
ポイントのところ大阪弁でいう　紀の治
頭では解っています健康法　多美子
墓参り善男善女の顔になる　欣子
信金の楽しみに待つプレゼント　律
はなれても誘ってくれる友うれし　正二
マグマの目海と山地で競い合う　公一
天気図にきれいなカーブまだ冬だ　登美枝
彼岸来て坊主の集いにぎやかに　いわゑ

六甲川柳会（兵庫）伊勢田　毅報

画集繰るドラマをめくるかのように　美穂
ない答探しみつめる花いかだ　武彦
ありがとうは魔法の言葉だと思う　政一
ウィンクの魔法かけられ雲に乗る　茂
念のため跨ってみる竹ぼうき　登美子
試着室に魔法の鏡置いてある　妙子
うとうとと春の魔法にかけられる　ひとみ
魔法かけ取り戻したい株の損　洋一
魔法かなあれ程の雪せせらぎに　勝
魔法からデモクラシーが醒めるとき　美恵子
チチンプイ不思議を探る子の瞳　和郎
今日も無事笑いが盛ってある夕餉　遼子
負けるもんかアリが地べたで笑ってる　弘
笑わせて楽しくさせてまあいいか　敏夫
辛い過去笑いばなしで済ます母　寿朗
手品ショータネを明かして笑わせる　照子
高笑い弾むリハビリグーチョキパ　忠貞
笑う日を増やしていこう老いの坂　淳
快復の兆し気にする乱れ髪　盛夫
三陸に希望の兆し春わかめ　ひろ
何げない仕草にドキリ恋かしら　千賀子
ビビッと来た何かありそう初対面　浩司
大地震やはり後から兆し説　武臣
復興の兆しが見えぬガレキ山　勤
生きざまが滲み出ている顔の皺　康子
夕焼が煙のような雲に乗り　恵子
ネオン街灯りも消えて妻のもと　利子
散らかっている時に限って客が来る　英子
温かい思いのこもるホワイトデー　繁義
坂道を人という字で支え合い　弘子
初投句思い出残る一行詩　基輔
まず骨組たてて字句入れ五七五　光久
正直な鏡修正聞き入れぬ　みつ子
丸い月明日は希望が叶うかも　楓楽
為政者に土の匂いが届かない　ますお

京都塔の会　都倉　求芽報

思うより雑に生きてる今年古希

風評がちらつく心ないメール　鹿太
ステップの遅さ瓦礫はじっと待つ　牛延
テポドンに寄与すパチンコやめなはれ　俊宣
会ってない密会するとはそんなもの　義昭
三歩歩けば忘れてしまう記憶力　綾子
かなり無理したなと思う駅斗袋　庸佑
この悪たれかなりの男になりそうだ　益子
春はそこかなり濃い目の紅をさす　万紗子
境界線越えず温和に三世代　公子
頭と顔の境が少しずつ上がる　かずお
境界線国の力で移動する　文代
絶望と夢の隘路で四苦八苦　美義
隣から家の境界言ってくる　泰夫
失うものなし老境の身の軽さ　英旺
人間が甘いはらわたまで曝す　欣之
チョコ一つ緊張ほぐす初舞台　ふりこ
酒が好き祖母のぼた餅もっと好き　美津子
甘えるのはよそう古びた父の傘　由美子
どこまでも甘い男で株を買う　福子
東電にまだまだ甘い永田町　篤子
甘言によろめくまいと仁王立ち　則彦
財布の紐するりと解ける甘い声　弘之
見通しが甘い見直し多すぎる　葉子
夫婦にも子にも春風甘く吹く　求芽
甘すぎる菓子もおとこも厭がくる　宏子
沸点を下げて私を甘やかす　啓子

ローズ川柳会（兵庫）　**木村貴代子報**

都合良く忘れる脳を持っている　哲子
野仏にひらひらさくら春ですね　みつ子
ねばならぬには暇をやり日々気楽　てる
雲と遊ぶすこしあなたが近くなる　年代
五輪めざし競う若者輝いて　貴代子

川柳あまがさき（兵庫）　**加川　靖鬼報**

鼻唄に合の手貰いありがとう　洋子
ドンマイと鼻唄うたって生きる母　茂幸
鼻唄にまとわりついてポチ跳ねる　龍
叶うなら一度男に変りたい　泰子
天才児親の期待も二十歳まで　初音
低気圧去ってやれやれ猪口を持つ　佐紀子
普通なら上下左右がよく見える　和子
親の汗箪笥の肥やし捨て難い　あかり
金かけてはるのに惜しいあのセンス　里江
鼻唄が一合で出るひとり旅　健二
マイペース崩さぬようにハイヒール　菜々子
ああ不倫甘い地獄に落ちてゆく　祐康
御巣鷹山九ちゃん惜しむ夜の星　よしひさ
仕舞風呂鼻唄も出る小宇宙　勝巳
春愁や行方知らずの花筏　ヨシエ
抱っこした児を父さんに荷を母に　イサミ
風雪に耐えた桜に酔う花見　野薫
ほっとして尻尾を出した阿波狸　靖鬼
薬屋で売らぬお酒が僕クスリ　五月
子が育ちやれやれ趣味の川柳へ　柳明
なめくじに朝採りイチゴ先越され　りこ
アウトローでも携帯は持っている　ひとみ
惜別の情湧く今日は定年日　比ろ志
人生のパズルを解いて共白髪　素雲鬱
賞味期限気にせず何時も消化する　奮水
健康が好きとサプリの依存症　かずお
無料パス持ってぶらぶら医者通い　耕治
蟻の列どれが先頭なんだろう　シマ子
譲るもの何もないのに遺書残す　朋月
煽られてその気で昇る縄梯子　美籠
職退いて鼻唄まじり鍬を振る　哲男
やれやれと言ってるようなデスマスク　楓楽

岩美川柳会（鳥取）　**石谷美恵子報**

今日生きる顔を写して見る鏡　清帆
破裂した建屋写真がものを言う　幸安
若過ぎる遺影に無念偲ばれる　圭一郎
若すぎた遺影に百合の造花添え　公子
美人コンテストに出た姉の写真　重忠
胃カメラが撮ったえくぼに悩まされた　ぬ
写真撮る桜静かに待っていた　菖子
過ぎた日の記録アルバムセピア色　和子
モノクロの写真に若さはち切れる　雅女
バーゲンのチラシみかんの皮入れに　蟹郎
バーゲンで必死に買ったゴミの山　節子
一面に花びら敷いて姫気分　一瑶
善人になる座布団が寺にある　茶子
下敷きにすると癖字がよくわかる　はるお
不都合があると防衛線を敷く　一粋
食卓に春を敷きつめちらし寿司　幸子
甘やかな午後はゆったり春を敷く　くに子
神の目に盲導犬はなっている　忠良
蟹の目は海の向うがよく見える　昭弘
冷めた目で見られています見ています　美恵子

いずも川柳会（島根）　**佐藤　治代報**

七色の薬を食べて生きている　志げる
朝の顔明るさチェックする鏡　テル子
この人の明るさ天性かも知れぬ　桂子
誰かしら明るい声で歌ってる　嘉寿恵

貸本の小説斜めに読んでいる　祐次
放射能囲いをしても出て歩く　俶子
忙しさを縫って囲んだ祝勝会　房緒
赤ペンで囲んでいても忘れてる　たえこ
春キャベツ明るい顔を覗かせる　淞丘
世の中がやはり気になる斜め読み　佳子
雰囲気の明るい孫の助け舟　煩悩児
肩書きがとれて気軽なお茶を飲む　敬子
前向きに明るく生きる友が好き　治代
一服のお茶にたかぶり解けてゆく　多喜
風を読む度になくしてゆく正義　孝亮
成りゆきを読んで出直すことにする　あきら
相槌を上手にうってくれるお茶　美江子
誕生日話明るく過疎を跳び　左余
抹茶席おしゃべり虫を封じ込む　ちえ
明るくて胸の中まで見せている　徳子
ちっぽけな秘密囲んで骨となる　喜子
茶柱に今日の運勢かけてみる　弘子
茶柱が立った何かを期待する　昌枝
私を癒す明るい窓がある　歌子
生きよ生きよと山が言う海が言う　久枝
宮沢りえと同じお茶を飲んでいる　寿美
明るさに頼る秩序の守り神　妙
絵心はないが明るい絵が欲しい　(長)博子
負けられず明るい色の服を着る　熊四郎
めざめ良い今日一日も生きている　蘭水
苦い茶も甘い茶も飲み生かされる　玲子
巷には明るい話落ちている　きみえ
ゆっくりと聞こうお茶でも飲みながら　文子
手に囲むかなしいことはなつかしい　章峰
悩みまだ抱いて不惑も過ぎ生きる　ちかし

翠洋会（大阪）　佐々木満作報

糸切ってマリオネットは生き返る　昭
運命の糸にすくわれ今がある　公平
ひと言が多くて解けぬもつれ糸　希久子
クモの糸細い絆でゆれている　弘子
大臣の風船すぐに糸が切れ　真澄
幸せも糸のようには続かない　日の出
縦横糸うまく織りなす老夫婦　舞夢
ガス欠か男の顔に生気なし　恭昌
好奇心いっぱい私のガソリン　紀子
ガソリンが切れると鉢巻をしめる　義
ガソリンの値上げ旅情が遠くなる　捷也
しようがないので影と乾杯する独り　桃花
ガソリンと酒は仲良く出来ぬ仲　すみ子
妻よりは数段勝る掃除ロボ　げんえい
だまされる気配もなくて四月馬鹿　滋彦
大樹から生気を貰う早春賦　満作
許してる証拠ビールの栓を抜く　正雄
生きるのもあの世行くのも金がいる　善之
男見る目が曇ってた若かった　蕉子
いとし子の真剣な目に賭けてみる　浩二
生き方は変えぬ化石と言われても　楓楽
赤子抱き歩く夫婦に笑みが出る　知之
年毎に体力気力逃げていく　照子
過ぎ去った過去よ幸せ溢れてた　千歩
喜寿過ぎてまだ翌桧の志　集一
子に還る母を乗せたや花いかだ　富子
さくら仮りの世存分に狂わねば　理恵

あかつき川柳会（大阪）　山本柳昌報

仏様と二人で軽くくらしてる　シマ子
国民の命かあるく見積られ　美世子
未完成だった作品軽水路　勝弘
じゃあまたと軽く言えない震災後　敏子
喪の風を抜けると女蝶になる　賀世子
韓流に嵌り込んでる元少女　和雄
挨拶をくれた少女を抱きあげる　太郎
幼な妻少女の顔で子が二人　秀夫
被災地の子らの笑顔に安堵する　峯二
宇宙人の顔で政治掻き回す　紀雄
誰とでも話せる顔を持っている　(山)和子
顔貸して真心までも盗まれる　柳弘
持ち合せ笑顔だけです悪しからず　哲男
国の顔一年毎に変わる国　篤和
好かん人大きな顔をしはるなあ　まつお
表情を消すとスラスラ嘘が出る　克己
雲は天才母の顔父の顔　忠昭
混沌を大地踏ん張り生きてやる　花笑
タンポポが大地にファッと根をおろす　いさお
みちのくの大地に遅いおそい春　朝子
躍動の大地に貰うエネルギー　穏夫
踏のトウ春押し上げる大地から　敏治
大地には国境など線はない　桃花
記録づくめの冬のり越えたのりこえた　直子
衛星を打ち上げるより米でしょう　英夫
芸術のわからぬトップ持つ悲劇　武
衛星とならず祝砲花火となる　美智子
再稼働被災の人に聞いてみよ　隆昭
財務省と二人羽織の野田総理　のぶ久
再稼働へストレスなどと軽く言う　好栄
相性にこだわり続けたこの私　恵美子
手鏡にある日映った胸の奥

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

不足言う子供に母の目が押え　澄子
ひと言が私の人生変えました　英子
いつだって一歩手前で運が逃げ　ちよえ
青春の地図はロマンも夢もあり　かつ子
昭和ひと桁昔の地図に責められる　はるみ
卒寿坂誤算誤算の富士の山　博利
小ぶりだがぴりりと辛い日本地図　清泉

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

春が来たテンプラしてね蕗の薹　鬼一
らっきょうの天ぷら旨い町おこし　日出子
てんぷらで揚げてもセシウムは消えぬ　石花菜
蕗の薹天ぷらにして春となる　智恵子
蕗の薹天ぷら味噌に老人食　英子
友は言う天ぷら人生大好きと　瑞子
天ぷらを揚げてた母の割烹着　恭子
鳥取の砂丘の音がするラッキョ　完司
ラッキョウの花は皇后さまのよう　茶子
ラッキョウ食べエレベーターは遠慮する　風露
ラッキョウが一役買った健康美　萩江
ラッキョウを一日三粒長寿薬　賀寿恵
病む妻よくよくよするな俺が看る　重忠
くよくよとしても桜の花は咲く　美代子
きよくよはするなと母は強かった　酔芙蓉
被災地にくよくよしてちゃ笑われる　悠子
くよくよはしないひとり住いの小宇宙　玲子
くよくよはこれ程無駄なことは無い　祐子
青春は音も立てずに通り過ぎ　貞子
その意見尻が青いと笑われる　次男
ひょいと来て桜散らしてゆく若さ　美ッ千
年なんか忘れたふりでスタスタと　和子
若者よいずれ君らも老いぼれる　由紀子
五・六歳若かったらと負け惜しみ　喜美子
青春を取り戻そうよ四季のうた　康子
年寄がくよきよしてもはじまらん　照彦

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

空っぽにただ君だけが浮いている　畔寿代
手を空にして思いきり抱きしめる　芳山民子
愛は空っぽ冷たい炎抱いている　長吉美智子
空っぽの財布を包む愛もある　ちえこ
空っぽにしてはならない和の心　昌枝注湖
黄昏の心で鳴っているなにか　淞丘ゆき
良い夢を見よとお寺の鐘が鳴る　幸代治代
行き詰まり鳴りを潜めてチャンス待つ　熊四郎
原発論議長崎の鐘高く鳴る　桂子
腹の虫おさめる酒がほろ苦い　幸子禮子
虫食いのリンゴがひとつ独りごと　螢とも子
春眠のミミズにふとん掛けてやる　左余
虫も芽も希望の春へ顔を出す　芳恵文子
本の虫髪が逆立ちして困る　東政子
どこでどう生れてきたかダンゴ虫　孝流
仲人にやっぱりあったオブラート　久枝博子
ためらった傘に真珠の雨が降る　久絵
車間距離ホタルはとうに逃げだした　草庵
大砲の球にやっぱり潜ってた　柳歩
やっぱりと言われぬように苦策する　知恵子
旅終えるせんべい布団やっぱいい
さざ波の中から自分取り戻す
波の音かすかに浮かぶ故郷の絵
大波をかぶって男強くなる
受話器から大きな波が押し寄せる
毎日が日曜波も風もない
大津波来たらままよと飯を食う
世も末か波打際が騒騒し　勝弘
君からの大きな恋の波受ける　婦美枝
生活の波ざわざわと春になる　いさお

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

一代目に似ているからと三代目　弥生
みんな忘れた顔には見えぬ車椅子　悦子
阿弥陀如来のようなお顔に騙された　美代子
底抜けに酔うてる時の顔が好き　清之
地蔵さま何とやさしい顔でしょう　シルク
その人の顔が浮かんだ電話口　ちづる
もてなしの気持ち笑顔ですぐわかる　一歩
親の事はお墓の親に言ってほし　みつこ
病み上がり顔色隠す頬の紅　雄太
石だってにんまり笑う顔もある　喜代子
想定外ばかり女のお天気図　光男
天候が地球の気持ち示してる　扶美代
あの雨がなければ横に居ない妻　みよ子
天候不順家計圧迫米野菜　榮
地震予知怠慢だったナマズ達　アヤ子
仮設地の屋根吹きとばす春嵐　トヨ子
青空をひとりじめする揚げ雲雀　武義
天候の善し悪しで着る旅衣　雅枝
黄昏期淋しき夜の一人言　龍一
火の種をチャント消して去ってゆく　登志子
かまどの火大事に守る故郷の母　紀雄
燃え残る火種を抱いて老いの坂　瑠美子
口火をきって彼女は重い荷を背負う　六点
使い方間違いました原子の火　あかり
曼珠沙華姉が抱いてた火の匂い
先月で保険が切れていた火災
ひょいと来て火種を残していく女

川柳クラブわたの花（大阪）西川　義明報

椅子ひとつ譲り合いする老いふたり　美代子
南から春を知らせて行く桜　いつふみ
輪の中に私の椅子のある温み　民
車椅子の目線に立ってする介護　宏
鏡って嘘のつけない木偶坊　晴美
記念樹の桜吹雪に夢託す　俊子
風呂上り一口うまい缶ビール　義明
煽てにも乗らぬ鏡に磨きかけ　はじむ
孫はいい反抗期でも来てくれる　浩三
平穏で暮せる日日に感謝する　愛子
お水取り過ぎ待ちに待つ春はそこ　博子
幸福と顔に書いてる孫の笑み　和子
咲いたねと夫婦より添う梅一輪　耀一
マニフェスト言った言わぬと喧嘩ごし　正春
家長の座車椅子取りゲーム妻優位　孝子
車椅子我が人生の友となり　奈良司
梅干しをおいしく包む握り飯　ますみ
一代で先祖の家を食い潰す　宏至
古椅子は家族の歴史知っている　知佐子
手鏡と穴のあくほどニラメッコ　かなえ
幼な子が鏡を見てはハイポーズ　えみ子
昇進の椅子はやっぱり心地よし　一風

川柳さんだ（兵庫）　堀　正和報

発泡酒CMほどは旨くない　哲男
散り急ぐ桜にペダル踏んでやる　朋月
無理やりに病気探しに行くドック　好文
春うらうらヘソクリそっと数えてる　一泉
ほいほいと軽く受け合い墓穴掘る　キヨミ
開店と同時に走る特売日　宣子
モデルチェンジ出来ない私アナログ派　淑子
子の帰省ハモル靴音笑い声　一子
善行をやって一本クモの糸　健二
新型のカツラを準備する薄毛　茂
誕生日の主役はどうもケーキだな　菜々子
時刻表開くと旅の匂いする　光久
あるがまま泣いて笑って生きてます　武彦
花びらも一緒に届くラブレター　ひとみ
朝刊は負けても開くスポーツ欄　ちあき
胸襟を開けば沁みるはるの酒　ヨシエ
瓦礫処理絆もちょっと後ずさり　徹
一病を抱いて今年も奇跡待つ　美和子
原発に頼らず新型エコ発電　雄司
頼まれもせずにイランへ鳩の糞　晃
年度末餞別かさみ赤字です　裕美
胸襟を開いて交す杯深夜　雅司
あの世まで一直線の迷い道　茂山
他国では新型になるブルートレイン　章子
無芸大食ペットのような夫と住む　忠
ホイホイと初孫に買うランドセル　正和

サークル檸檬（大阪）　松尾美智代報

叫んでも人間いつか無にかえる　房子
無償の愛祖母母子へという鎖　蕉子
うまいのを虫は知ってる無農薬　加お里
無の境地極めていても腹は減る　昌紀
経験の無さは笑顔でカバーする　久仁雄
しなやかに舞いたいものよ終の章　光久
気力には付いて行けない影法師　たもつ
無事の知らせだけ待っている母の耳　美智代
ふる里の山に向って無の境地　扶美代
無いというほど強いものはありません　希久子
使用前使用後モノは無に還る　義子
無になって夕日の中に溶けている　いわゑ
貧乏は運が無かったことにする　楓楽

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

パトカーの前運転がぎこちない　敦子
今更と言いつつのぞくコンパクト　嘉子
おらやうちらが主役で地域掘り起こす　勝之
化粧よしそして仕上げに歯を入れる　信子
説教の仕上げに頭なでている　恵美代
大都会を止めさせる雪一センチ　みちこ
薬指リングくい込みあぐらかく　葵
気が付けば姑と同じ事してる　美江
好き嫌い理屈ではないフィーリング　章子
習わずに引き方を知る予防線　みどり
いい人に出合い一日いい気持ち　温子
回覧に噂話が付いてくる　久司
やじろべえ迷いが多く揺れている　美恵子
放し飼いされているのに家ばかり　純宏
この冬も無事乗り越えた毛玉とる　陽子
アドリブが下手で言い過ぎ言いそびれ　寒之
染み一つ隠すことさえ知らず古希　安子
次世代に残す基地だよ磨き上げ　澄子
わたくしを再生しよう春や春　華蓮
愚痴多く唇もさぞしんどかろ　一眸
緊張がゆるむ平和の鐘が鳴る　菜美
お茶を酌む役にプライドかけている　遊子
春の花飾り気持ちを軽くする　和代
このじげで役人風を吹くじゃない　はるお
診察でわからん顔をしちゃならん　正雄
道がわからん家がわからん妻がわからん　公弘

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

うろうろとネットの森に迷い込む　深雪
棺桶は狭くうろうろできません　愿
打つことは打つが守りがからっきし　玄也
浴びるほど飲んでベンチで蚊に刺され　像山
欲張りで二足のわらじ履いてます　月子
爺婆のどっちも好きと言わせてる　敏治
結婚は両家反対お腹に子　冬虹
両方のお誘い時間差でこなす　五月
両の眼を閉じると見えぬものが見え　好
いただきますパチッとあわすもみじの手　ばっは
花吹雪浴びて二人は恋になる　明子
しあわせが合わす両手の中にある　唯教
花びらを両手で掬う春あらし　朋月
両脇が甘く大臣棒に振り　世紀子
うんうんうん仲裁聞いてくれるだけ　かりん
両方の顔立て私つぶれてる　舞夢
空っぽの両手で朝日抱きしめる　篤子
この歳で両手に花は荷が重い　山彦
浴びるほど酒と薬は飲んでいる　時雄
こだわりが溶けた両者のいい笑顔　のん子
反論を浴びた数だけ強くなり　俶子
返り血を浴びて正論押し通す　雅明
褒めあっているが互いに棘がある　つづや
両方の親を看取ったのが誇り　さくら
降参もバンザイもしたこの両手　誠一
地下街の同じところでまた迷子　和夫
おりまへん顔が良うて別嬪は　としお
穏やかにスローライフの老夫婦　八千代
スーパーを行ったり来たり万歩計　清

浴びるほど飲んで酔えないほどの傷　りつえ
春風を浴びて細胞よみがえる　みつこ
拝んでもすがりついても老化する　澄空
母よりもちょっぴり妻の肩を持つ　千代
同じ話するのが好きな老夫婦　扶美代
警察もすりも手錠で結ばれて　天笑

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

おっとりとしてはおれない再稼働　弘風
恋病い退院する日が分からない　柳弘
一千兆円も借りておっとりしてる国　祥昭
花筏あなたの海へ辿ります　茜
碁敵がひとあし先にお葬式　三郎
退院日ふとんほっこり干してある　ルイ子
張り合って負けて良かった今の夫　尚世
夜桜に酔って発表ご婚約　忠央
膨らんだ蕾を抱いてる私　洋
以下同文主役に遠い位置にいる　仁
ふる里で父母の昔を誉められる　一風
それからを教えてほしい仏さま　修
真っ新の命を抱いた退院日　朝子
今日からは手足伸ばして畳部屋　賢子
全没の帰りに妻の花を買う　鈍甲
ほとぼりも冷めた退院でもするか　仁清
おっとりといらちが今もまだ夫婦　さち子
失敗でほっとしました北の国　かすみ
おっとりの料理に慣れた腹の虫　麗
退院日がおどって見えるカレンダー　薫
原発でもう汚させぬ日本中　美智子
桜が咲くとどの新聞も記事にする　弘一
しょうもないことではりあう会議室　秀雄
退院はいつかドナーを待っている　恵子

川柳あまがさき（兵庫）（前月分）　加川　靖鬼報

肩寄せて甘えてみた日もあったけど　佐紀子
過去忘れ余り無き道ためらわず　泰子
ブランコに乗ると昔が蘇る　茂幸
青春の過去を詰めたる玉手箱　龍
灰皿がそこにあるから吸うタバコ　イサミ
花鋏み過去も一緒に切りおとす　初音
立春に出来た新酒を仏壇へ　柳明
美人薄命格言通り妻は逝き　野薫
とことん問いつめないで許します　洋子
お水取りすんで春呼ぶ二月堂　あかり
ふと見せる寂しげな背に過去を見る　和子
月の夜とことんあなたきれいです　ひとみ
東北の傷まだ癒えず遠い春　純
過去形を笑顔で語る苦労人　よしひさ
しゃべり明かして一夜あけたら皆忘れ　靖鬼
寒いはず心待ちするお水取り　祐康
愛情をとことん注ぎ嫌がられ　りこ
孤独です過去を語らぬ青テント　五月
貝殻とよい思い出を拾いあげ　菜々子
威勢よいキャンプレポートばかり来る　正和
失恋の傷はとことん塩で揉み　朋月
とことんもよいがお酒が笑ってる　耕治
春の海ほろほろゆれる去年今年　ヨシエ
いつまでも過去を引きずるのが男　かずお
山笑い杉の花粉が邪魔をする　奮水
幾度か妻の笑顔で越えた山　比ろ志
自分史に生きた証を書くドラマ　キヨミ
良い過去はパッチワークにして飾る　見清
過去は過去さてこれからをどう生きる　勝巳
まだ傘寿悔いない暮し鍬を振る　哲男
和のままでいきます過去捨てて　美籠

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田川柳会	16日(土)13時30分締切 下手物・緩む・ちぐはぐ ダンディ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13－19 中岡香代
川柳ねやがわ	17日(日)14時締切 汚点・バーゲン・ゆっくり 自由吟	寝屋川市立総合センター4F　第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳藤井寺	17日(日)14時締切 粗食・水・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	17日(日)14時締切 ファイト・人間・雫	淡輪17区集会所　南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中もくせい川柳会	18日(月)13時40分締切 置く・中身・いろいろ・自由吟	豊中市中央公民館4F　阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2－8－4　江見見清
川柳さんだ	19日(火)13時から 雨・相性・書く・新しい 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5－2－4　堀　正和
川柳クラブわたの花	22日(金)9時開場 竹・金魚・時計・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1－4－8　西川義明
川柳塔すみよし	23日(土)14時15分締切 枠・帰る・惜しい	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子
和歌山三幸川柳会	23日(土)12時30分開場 蟹・これ以上・選ぶ	和歌山商工会議所4階　第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの市民川柳会	24日(日)14時締切 泳ぐ・空・バス・責任	綾南の森　公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
川柳ふうもん吟社	24日(日)13時開場 一匹・ノーメイク・面倒だ	開発ビル2F　ホール 〒680-0872 鳥取市宮長205－45　萩原深雪
南大阪川柳会	25日(月)18時開場 恥ずかしい・迷信・戻す・人間	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304　前たもつ
京都塔の会	25日(月)14時締切 丸・かかわる・拾う	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328－202　都倉求芽
松露川柳会	25日(月)20時締切 恩・カード・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757－3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

6月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	2日(土)13時開場 肥える・熱気・がつがつ 自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4−10−18 神夏磯典子
富柳会	2日(土)14時締切 以後・アナログ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4−1−10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉川柳会	2日(土)14時締切 ラッキー・私・扱う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072−17 谷口次男
川柳塔な ら	6日(水)13時開場 凌ぐ・鍵・野菜	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき川柳会	8日(金)14時締切 忘れる・親・電柱・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586−14−102 森村美花
川柳塔さかい	9日(土)13時から 変化・びくびく 折句(アテネ)	堺市総合福祉会館 〒590—0016 堺市堺区中田出井町3−4−31 村上玄也
川柳大阪	9日(土)14時締切 危ない・風・演技	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔まつえ	9日(土)13時45分締切 踊る・個性・投げる クールビズ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織 禮子
川柳塔打 吹	9日(土)13時締切 米・(昇る・登る)・投げる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637−3 牧野芳光
八尾市民川柳会	10日(日)13時30分締切 愉快・虹・結ぶ・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5−9−3 土谷耀一
川柳塔わかやま吟社	10日(日)14時10分締切 兼 題＝上・まさか・敷居 課題吟＝雨	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2−1−2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890−12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 乗原道夫
西宮北口川柳会	11日(月)14時締切 仏・つれない・すっかり 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3−15 亀岡哲子
川柳あまがさき	12日(火)14時締切 融通・ペース・ろくろく 自由吟	尼崎女性センター トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2−45−8 山田耕治
ほたる川柳同好会	12日(火)13時30分締切 コピー・降る・さばさば	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2−4−1 水野黒兎
川柳塔みちのく	16日(土)17時締切 色・うっかり・植える	弘前市桶屋町4−7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53−1 小寺花峯

柳界展望

★第12回春はくろぼこ川柳大会は4月1日鳥取市立さざんか会館で開催。参加者253名。同人秀句。

耳たぶはピアスに耐えているのです　河内月子
苔むした岩ドンマイの気をくれる　矢倉五月
運命線ところどころに岩がある　倉益一瑶
軸足が国境またぎややこしい　川本　畔
縦軸に自己責任と書いてある　両川無限
朝の風弱音を掃いてくれました　稲村遊子
乗ったのも降りたのも風無人駅　両川無限

全日本川柳協会会長賞
河内　月子

鳥取市教育長賞
倉益　一瑶

鳥取市教育長賞
鳥取県知事賞
両川　無限

★二〇一二ふあうすと川柳大会は4月8日(日)、兵庫県民会館で開催。出席者289名。

神戸市長賞
酔うと眠る男だ長い友達だ　小島蘭幸

★第16回川柳展望全国大会は4月22日(日)、ホテルアウィーナ大阪にて開催。参加者176名。同人天位次の通り。

星が降るただそれだけのおもてなし　髙瀬霜石
花札の桜と春を暮れ残る　木本朱夏
目も耳も口も塞いで群に入る　木本朱夏
降ろしたら二度と背負えなくなる葛籠　髙瀬霜石
出がらしのような二人であたたかい　北村賢子

☆小島蘭幸主幹は、二〇一二年ふあうすと川柳大会に出席。祝辞を述べた。

☆島ひかるさん（同人・富山市）の「白銀の高原を歩く」は4月8日、北日本新聞朝刊・読者のひろばに掲載された。

▽出　版△

◇六甲川柳会メダカの学校五周年記念合同句集「ろっこうみち」を出版。B6判115頁。お祝いのことば・西出楓楽、ひとこと・奥田みつ子、跋・西口いわゑ。

◇富田蘭水氏（同人・出雲市）は句集『ふめじ』を上梓。A5判166頁。

◇山本希久子さん（参与・吹田市）は句集『イヤリング』を上梓。B6判204頁。序文・西出楓楽、跋・奥田みつ子。

▽御芳志御礼△

○美研アート様より金一封拝受しました。

▽お詫びして訂正△

▼4月号＝P72下段22行目、凛々と生気が走る風車→凜々と。P79中段13行目、吉岡→吉岡修。

▼5月号＝P7上段23行目、鈍感です→鈍間。P51上段17行目、陶治に詩→陶冶の詩。

▽催　し△

○前田尋きり絵展
5月28日(月)～6月2日(土)AM10時～PM7時。大阪市北区西天満2－2－4、マサゴ画廊。TEL06－6361－2255。

▽新誌友紹介△

堺市　**梅本　澄空**
紹介者　矢倉　五月
和歌山市　**北原　昭枝**
紹介者　木本　朱夏
日置市　**前田　洋子**
紹介者　木本　朱夏
高槻市　**安福　利夫**
紹介者　山岡冨美子
河内長野市　**大島　友子**
紹介者　山岡冨美子
村上　直樹
和歌山市　**坂田喜久子**
紹介者　三宅　保州

▽削　除△

○5月号、21頁下段4行目「酒好きはつい悪友に仕分けられ」は本人の申し出により削除。

常任理事会＝5月7日(月)
①第18回川柳塔まつり関連②平成24年（第47期）同人総会式次第案③誌友へのアンケートについて④定例確認事項⑤各部報告事項。

次回＝6月7日(木)

新同人紹介

大久保（おおくぼ）　真（ま）　澄（すみ）

―楓楽・みつ子・恭昌・浩二推薦

第13回 生駒市民川柳大会

日　時　7月15日(日) 12時30分開場
会　場　生駒市芸術会館「美楽来」
〒630-0246 生駒市西松ケ丘2-20
TEL 0743-74-1101
事前投句「ゆ と り」　笹倉 良一 選
ハガキで1句　6月15日締切
事前投句先　〒630-0288 生駒市東新町8-38
生駒市生涯学習課宛 TEL 0743-74-1111
または　上田　有行 TEL 0743-75-0239
宿　題（各題2句　13時30分締切）
「好　き」　安土 理恵 選
「隠　す」　小寺竜之介 選
「気　分」　西 美和子 選
「繰り返す」　菱木　誠 選
「見　事」　松田 俊彦 選
会　費　1500円　発表誌呈
主　催　生駒市・生駒市教育委員会
生駒番傘川柳会

第15回 鳥取県川柳文芸大会

日　時　7月8日(日)　午前10時開場
場　所　新日本海新聞社5階ホール
(JR鳥取駅南口徒歩3分)
兼　題「予　感」　山本希久子 選
「マ ン ガ」　山口 桃子 選
「笑　顔」　渡辺 信也 選
「やっと」　鈴木 公弘 選
「ネ　ジ」　春木圭一郎 選
「すっきり」　山下 蟹郎 選
「粘　る」　蔵本 悦子 選
「真似る」　西谷 悦子 選
会　費　2000円（軽食・大会誌呈）
欠席投句　1000円（大会誌呈）
欠席投句締切　7月4日(当日消印有効)
主　催　鳥取県川柳作家連盟

鶴彬忌
第2回 全国誌上川柳大会

課　題（各題2句　共選）
「 腕 」 天根 夢草　三宅 保州
「生きる」 西出 楓楽　福士 慕情
「地 球」 田中 新一　大内 朝子
自由吟　川端 一歩　植竹 団扇
＊投句料　1000円
（切手不可・小為替可・発表誌呈）
＊投句締切　7月31日(火)　消印有効
＊投句先
〒583-0037 藤井寺市津堂1-7-25
鈴木いさお 宛　TEL 072-952-6855
＊問い合わせ先
〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102
森村　美花　TEL 072-476-2397
＊主　催　あかつき川柳会

北見川柳社創立六十周年記念
第九回 全国誌上川柳大会

題と選者（各題2句）共選
「続　く」 赤 井 花 城（神　戸）
木 本 朱 夏（和歌山）
池　　さとし（函　館）
「雑　詠」 熊 谷 岳 朗（岩　手）
平 田 朝 子（熊　本）
岡 崎　　守（札　幌）
酒 井 麗 水（旭　川）
投句締切　7月31日（消印有効）
投句料　1000円（発表誌呈）
投句先　〒090-0033
北海道北見市番場町4-10
北見川柳社　誌上大会係
TEL 0157-24-2444

編集後記

★進む時計遅れる時計夫婦かな　薫風

★「切り取られた『川柳雑誌』昭和十八年八月号」の筆者・一色哲八氏は実作はされないが長年、川柳の歴史を掘り起こし、問題提起されている在野の研究者である。「川柳雑誌」の裏面史ともいえる貴重な玉稿を戴き、感謝に堪えない。

★先頃ソフトバンクの孫社長は「紙を使う者は人間ではない」と宣言。会議もスマホを使用、ペーパーレスを目指すと、IT化の時代ならではの発言。紙大好き人間の私には由々しき事態。

★2012年本屋大賞第一位、三浦しをん著『舟を編む』（光文社）を読んだ。「辞書は言葉の海だ」をコンセプトのもと困難な辞書作りの、大航海へ乗り出した編集員のドラマだ。採録する言葉への執着、辞書に採用される用紙への飽くなき追求など、感動的であった。私たちはともすれば井戸を掘った人への恩を忘れて、水を飲む。一冊の辞書に籠められた熱い想いを忘れてはなるまい。

★「用事がなければどこへも行ってはいけないと云うわけはない。なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う」内田百閒著『第一阿房列車』のあまりにも有名な冒頭の一節。用事もないのに借金までして一等車に乗る。さしずめ乗り鉄の元祖であろう。百閒は夏目漱石の弟子。独特のユーモアに暫し憂き世を忘れた。

★「七十はさほどに遠きことならず」その七十を待たずに小出智子先生が逝かれて十五年。パソコンを叩く手に涙が落ちた。「小出智子抄」を味わっていただきたい。（朱）

ひとこと

亡父からの年賀状

私は年賀状を書く時自分宛のも出す。一筆画を習っていた時、絵と川柳が残ってゆくと思った。亡夫の介護に疲れ果て絵も止め年賀もお断りしたこともあった。思いついて自分から自分でなく亡父母か姉妹にしてみようと、昨年中にあった褒められる事叱られると思う事と、そして今年の希望に対する励ましと注意点をかき差出人は亡父の名、住所は嫁ぐまで居た町名（今町名も少し変更）で投函した。元日にその賀状を手にした時、本当に父からの文のように思ったのが不思議で読んでいるうちに涙がポロポロこぼれて嬉しかった。

来年も父から賀状がもらえるよう叱られる事が無いよう、しっかり生きて行きたいと思うのが今年の目標である。（宮崎シマ子）

○松の廊下の刃傷で内匠頭を抱きとめたのが大奥留守居役・梶川与惣兵衛である。梶川はその功で五百石の加増を受けた。

五万石捨てれば五百石拾い　（9）

五万石しっかり抱いて五百石　（50）

加増はされたが、武士の情けを知らぬ者だと評判は芳しくない。梶川としては職務を果たしただけのことであったのに。

○ちなみに、江戸城内での刃傷事件は三度目である。一度目は寛永五年（一六二八年）八月十日、目付・豊島信満が老中・井上成就を殺害、豊島もその場で斬殺、二度目は貞享元年（一六四八年）八月二十八日、若年寄・稲葉正休が大老・堀田正俊を刺殺、その場で老中四人で稲葉を斬殺。この二例と内匠頭の刃傷が異なるのは加害者、被害者共に生きている事と、朝使下向という賓客を招いている最中の失態であった事である。

○「誹風柳多留百全集」より忠臣蔵に関する句を二百十句ピックアップした勝弘さんから、資料として頂いた。有り難く参考資料に加えさせて頂く。（ま）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（8月号）　地名

都県
道府
市　姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

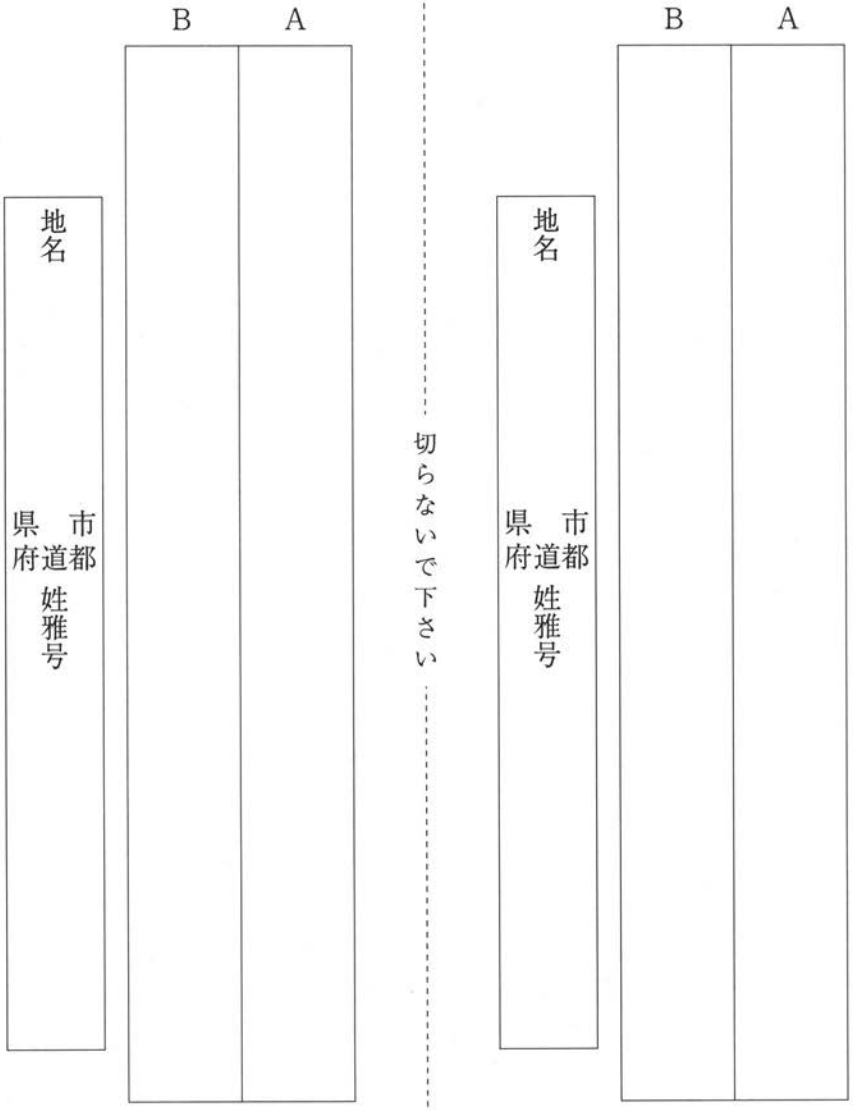
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「ダイナミック」（6月15日締切）

8月号発表

池　森子 選 ——共選—— 福士　慕情 選



左右に同じ句を書いて下さい

本社6月句会

とき　6月7日㈭ 13時開場・14時締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「須崎豆秋」　河内天笑

席題「　　」　鴨谷瑠美子選

兼題「例」　桝本宏子選
「すごい」　江見見清選
「単純」　大内朝子選
「引き金」　村上直樹選
「染める」　小島蘭幸選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社7月句会

6日（金）午後1時から

兼題「煽る」「トリック」「今更」
「奥の手」「萎む」

作品募集

8月号発表（6月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　川上大輪選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「ダイナミック」（2句）　福士慕情共選
池森子選
「うねる」　伊藤玲子選
「雲」　加藤茶人選
一路集（3句）
「なるほど」　根岸方子選
初歩教室「抜く」（3句）　鈴木公弘担当

9月号
檸檬抄「継ぐ」
一路集「曲線」「弱点」「もやもや」
初歩教室「雑誌」

第31年度　夜市川柳募集

第1回「まだまだ」　新家完司選
ハガキに3句　**6月20日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一二年（平成二十四年）六月一日発行

発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　**川柳塔社**
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十四年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇二一号　川柳塔　六月号
定価　八百円（送料　八十四円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703-6